

ひたすら生きて——目次

I 編集者時代

佐方さんと諸先輩と私と『社会・労働運動大年表』	二村 一夫	10
佐方信一さんと過ごした日々	栗田 健	16
佐方さんにお世話になって	早川征一郎	20
大学院時代からの付き合い	五十嵐 仁	24
佐方さんからの最後の電話	鈴木 玲	28
佐方さんと『大年表』	佐伯 哲朗	30
「いいじゃないですか」の励まし	木下 武男	32
唯一、激論の根底にあったものとは	手島 繁一	34
「知」をどう編むのか	木内 洋育	38
「兄と弟」を重ねて	平木 豪達	42
凛とした生き方	山本 達夫	45
編集者の鑑	口石 利昭	47

鹿児島県人の佐方信一さん	永山 誠	50
佐方さん いっぱい いっぱいありがとう	江森百合子	52
「坊がつる讃歌」をデュエットして	隅井 郁子	55
何でも知っていた大先輩	飯島 信吾	58
間近に接し、あらためてわかったこと	真田聡一郎	63
佐方さんのご指導で本ができた	橋爪 七臣	66
アルプスの風に乗って	原 ます美	68
『大分県労評三十年史』刊行に感謝して	佐藤 正人	70
もっと若い頃にお会いしたかった	徳住 堅治	72
信念の人——出会いと別れと	石井 次雄	75

II ある日ある時——学生時代

三月一五日に逝ったわが親友	井之脇寿一	82
同学舎から神田川へ流れた青春	永山 義高	85

青春残照——同学舎前後	森山慶四郎	89
テレビに映った穏やかな姿	松窪 尉雄	92
気合いの入った友情	竹下 昌勝	94
トロツキストと呼ばれて——ひとこと	皆倉 宣之	96
「こずかた」って何のこと	吉田 節子	101
「三九会」の山歩き・街歩き	成田 勝代	103
青年佐方信一の夢	木場 茂	108
橋口先生の『某月某日』出版のあとさき	大貫 健介	114
一本の焼酎	佐藤 学	118
宝物のような体験	中谷 綾野	120
久志の海を望む校舎で	鈴山 泰弘	122
同期生っていいな	尾辻 孝一	124
「川畑塾」の三人	三窪 良子	127
テニスで準優勝	小原 道夫	129

Ⅲ ある日ある時——地域から

「共同の子育て」を通して	広瀬 靖子	132
学童で楽しかったよ	鈴木のぼる	136
学童ばかりの追憶	深山しげみ	138
心臓病を抱えながら	草野 文喜	140
地域における「暮らしの相談会」	伊藤 猛	142
安心感をいただきました	野口 靖子	144
「国道に信号」を	生方ヤス子	146
ま、やってみるか	吉田 成助	148
本当の知識人に会えてよかった	澤田 勝雄	150

Ⅳ ある日ある時——うからの一言

兄との想い出	加藤 明子	154
--------	-------	-----

一四歳年上の兄	白石 京子
信ちゃん、ありがとう	菅沼チイ子
優しかった、いとこの信ちゃん	村上久美子
おじさんの置き土産	黒永 智子
信一おじさん	羽原 章子
オヤジ・佐方信一	佐方 隆
いつも微笑んでいたお義父さん	佐方由紀子
	176 169 167 165 163 159 156

V 遺稿・書簡・その他

多賀夫人に学んだこと	180
組合運動史執筆者の誕生	185
わが病氣	188
恩師川畑まり子先生へ	190
合宿の贈りもの	192
三九会主催の山歩きへのお誘いと資料	196

・初夏の緑のなかを歩くゝ高水三山ゝハイクのご案内 196

・三九会のみなさま 198

・資料 三九会山歩き・街歩き日程表 200

『堀田善衛を読む』への感懐 207

VI 主な仕事

VII 略歴・病歴

あとがきにかえて	237
佐方三千枝	

装丁

表紙写真（久志の海）

佐藤 篤司

尾辻 孝一

I 編集者時代



労働旬報社入社後 1966 年頃

佐方信一さんと諸先輩と私と 『社会・労働運動大年表』

二村 一夫

佐方信一さんと私が出会ったのは一九六六年のことです。この年三月、佐方さんは労働旬報社に入社し、『日本労働年鑑』担当として、木曾哲夫さんに連れられ、大原社会問題研究所に顔を出されました。一方私はといえば、その一〇年も前から大原社研に出入りはしていたのですが、立場は「無給の一資料整理係」でした。それが同年四月、念願かなって研究員に採用されたばかりでした。つまり、二人とも人生の大きな節目の年に出会った形です。

実は、私と労働旬報社の関係は、その前年に始まっています。主な研究の場であった労働運動史研究会の機関誌『労働運動史研究』が、大月書店・日本評論社を経て、一九六五年に、同社から再刊されたからでした。雑誌編集者の初代は、研究会会員で

もあつた川崎忠文さんでしたが、ほどなく佐方さんも編集陣に加わり、すぐ主担当になりました。こうして佐方さんと私は、仕事場と研究の場の双方で、頻繁に顔を合わせる仲になったのです。

佐方さんは、綿密で、手間ひま惜しまない仕事ぶり、誠実で、さりげなく細やかな気配りをする人柄から、担当した著者の誰からも信頼され、愛されました。今さら、言うまでもないと思いますが、若い世代のためにあえて付け加えれば、彼が編集者になった頃は、著者は原稿用紙のマス目に文字を埋め、編集者は原稿を受け取りに著者の家を訪ね、時には書き上がるまで待つのが普通だった時代です。電子メールで原稿や校正刷りのやり取りまで済む今とは、著者と編集者の関係、距離感はまったく違っていたのです。当時の編集者・佐方信一の姿は、彼自身が『松尾多賀をおくる』に寄稿した「多賀夫人に学んだこと」に活写されています。

彼が受け持った著者で代表的な方は、年鑑の仕事を休んでまで携わった『大河内一男集』の大河内さんをはじめ、塩田庄兵衛、松尾洋さんでしょうか。どなたもご健在なら本書にも寄稿されたと思いますが、大先輩ばかり、とても叶わぬことなので、私からご紹介する次第です。とりわけ佐方さんが全面的に担当した本は、塩田庄兵衛さんの立命館大学退職記念『京都にて』と傘寿記念の『二十一世紀へのバトン』、そ

れに「おしどり夫婦」で知られた松尾洋さんの『松尾多賀をおくる』です。いずれも佐方さんが特に依頼された、どれも美しい私家版です。

これら佐方さんと親交を結んだ著者のなかでも、とりわけ彼を信頼していたのは、大原研究所で私の一年先輩だった中林賢二郎さんでしょう。彼こそ、教え子だった三千枝さんを信一さんに紹介し、二人を結びつけた仲人であることは、ご承知の方も多いと思います。中林さんは、『日本労働年鑑』が売れ行き不振から版元に継続を断られ、難航していた折に、労働旬報社を大原研究所に紹介し、自ら年鑑編集の責任者となり、たるみ切っていた編集体制を一変させ、年鑑永続の基礎を築いた方です。これはまた、旬報社と大原社会問題研究所との半世紀を超える協力関係の出発点ともなりました。私個人としては、彼こそ研究所改革の中心人物だったことを特記しておきたい気持ち強いのですが。一九八六年一月、急逝された中林さんのお通夜と密葬を、不慣れな私たち二人のコンビで取り仕切ったことも、佐方さんとの交友における忘れ難い思い出です。

半世紀を超えるお付き合いですから、記すべきことは多々あります。編集者・佐方信一の生涯の仕事であった『日本労働年鑑』のことは、他に語られる方が何人かおられます。ここで、やや詳しく書き留めておきたいのは、『社会・労働運動大年表』のことです。発端は一九八一年四月、佐方さんが労働旬報社を代表する形で、労働運動史研究会の中

心会員だった栗田健・高橋彦博両氏と私とに、労働運動史関係の「大出版」を企画して欲しい、と依頼されたことでした。「人物評伝集」などいくつかの案が検討されましたが、最終的には『社会・労働運動大年表』と決まりました。一八五八年から一九八五年まで約一三〇年間の日本の労働運動・社会運動の関連事項を詳しく記録し、政治・法律・経済・経営・社会・文化、国際の関連項目も加えた六欄構成、各項には出典を、重要項目には解説を付け、全四冊・定価五万八〇〇〇円という一大計画でした。問題は、その作業量の途方もない大きさで、年表項目や解説の執筆には外部の協力を仰ぐとしても、原稿チェックや選択・構成など、多様な実務をわれわれ三人だけで担いきれないことは明白でした。どうしても若い方の力を借りざるを得ません。ただ、これには難問がありました。将来ある若い研究者を、数年間も、この仕事に拘束しておけるだろうか、ということ。当然、問題の解決にはお金がかかります。そこで出資者側代表でもある佐方さんと私とで話し合い、検討を重ねました。その結果、この企画を法政大学大原社会問題研究所の事業とし、協力者を「嘱託研究員」に採用すれば、彼らの経歴上にもプラスとなり、実現可能だろうとの結論に達しました。白状すれば、研究所の財団法人解散・大学との合併の時が迫っており、この際、出版社の負担で「研究員の予算枠」を拡大しておこうという魂胆もあったのです。

かくして一九八三年三月、「大原社会問題研究所創立六〇周年記念」と銘打った事業が始まりました。出版完了は一九八七年一月、企画から足かけ七年、作業開始から四年、追われるような日々でした。もともと私立大学付属の弱小研究所にとって、これは無謀な企てでした。作業が進むにつれて、実務を担う若手研究者に、また出版社側にも、予想をはるかにこえる労苦を強いる結果となりました。完璧を期し、四校になっても赤字を入れるなどしたこともあって、刊行は遅れ、版元の財政負担も膨れ上がりました。出版社の社員であると同時に、著者側の実情も熟知していた佐方さんは、両者の板挟み状態となり、心身ともに疲れ切ったに相違ありません。間もなく彼が旬報を退社したのは、これが主原因だったと推察され、私も辛い思いをしました。

幸い『社会・労働運動大年表』は『朝日新聞』書評欄で大きく取り上げられ、冲永賞も受賞、版元の営業努力もあって、完売・増刷されました。さらに一九九五年には、九年分を増補した上で、本巻を一冊にまとめた『新版 社会・労働運動大年表』が完成しました。付け加えれば、この新版に付された「別冊索引」は、香取治良・佐方信一両氏による三五〇ページの労作です。この「大年表」は、その後の旬報社・大原研究所共同の「大企画」の基礎となり、両者のそれぞれに、大きな財産として残りました。多くの方の協力を得て完成した事業ですが、その功労第一は、佐方さん、貴方です。

私が研究所を辞めた後も、彼は私を友人として親しく付き合ってくれました。それに甘え、『労働は神聖なり、結合は勢力なり——高野房太郎とその時代』の入稿直前の原稿を読んでいただいて感想を聞いたり、個人サイト『二村一夫著作集』に掲載している多数の論文を校正していただきました。今にして思えば、熟達したプロの技を安価に利用した形で、ちょっと申し訳ないことでした。発病後はお目にかかる機会はありませんでしたが、何回か電話でお元気な声を聞いていたので、突然の訃報に驚きました。佐方さんの葬儀は、偶然、研究所の「創立一〇〇周年・法政大学合併七〇周年記念集会」の日と重なり、私にとって忘れ難い日がまた増えました。

（法政大学名誉教授・大原社会問題研究所名誉研究員）

佐方信一さんと過ごした日々

栗田 健

自分のことから書き始めて申しわけないが、私はもともと社会思想史を志して研究生活に入り、大学院の専攻の都合で労働関係の分野で仕事をするようになってからも、イギリスの労働運動を素材に歴史研究をしていたので、当時の労働旬報社の刊行物で取り上げられる日本の現実的な課題とは縁が薄く、原稿を媒介とする佐方信一さんとの付き合いは無かった。

彼と知り合ったのは、大河内一男先生の指示で「労働運動史研究会」の事務局を担当し、その関係で法政大学の大原社会問題研究所に出入りするようになったことがきっかけで、それからは頻繁に出会い、話をする機会を持った。実のところ私は労働運動史研究会の会合を設営することはあまり好きでなく、その集まりもじり貧を重ねて、最後には自分の手で解散をする始末だったが、佐方さんはそのような「苦境」の研究会にもよ

く顔を出してくれた。後に『社会・労働運動大年表』の編集の仕事で綿密な共同作業を重ねた頃からは、同じ職場の仲間のような密接な付き合いになった。彼は面倒な仕事もいとわない働きものだっただけでなく、こちらの意図をすぐに察する理解力の持ち主で、一緒に仕事をするのが楽しい仲間だった。

彼と私はほぼ同じ世代なので、日本の戦後史を一緒に体験したもの同士、仕事は違えど、同じ空気を吸いながら、時間を過ごしてきたことになる。だが、この世代で労働問題を追究してきた人々の多くは、思ったようには事実が展開しないという悔しさを味わい続けてきたはずである。闘争そのものが好きで、それを生き甲斐とする類いの人は別にして、労働者に良かれと思いながら真面目に仕事をしてきた多くの人が、落胆し挫折感を味わされる経験を重ねてきたに違いない。

それなのに、愛し続けてきた当の労働者たちからは、それほど労れることもなく、下手をするところらが変わり者扱いをされるような、甚だ間尺に合わない歯がゆさを共有する仲間だったような気がする。この仲間たちとは、何か重要なことをとらえ損なっているのではないかと自省し合いながらも、全く間違っていたとも思えず、さりとて現状を是認しているような華やかな連中とは、絶対に席を同じくしたくないという意地も共有している。

それだから、佐方さんや私などが送ってきた歳月は、それほど朗らかな道程ではなく、見通しが利かないままに手探りで進んで来たようなものだった。佐方さんも好きだった登山に例えれば、汽車賃が安く済み、山小屋の料金も北アルプスとは格段に違って安いためによく登った南アルプスのように、ずっと林の中で一向に展望が開けない、長く苦しいだけの山道を何日もかけて歩きながら、なんでこんなことをしているのだろうと、われとわが身を呪った、あの山行きによく似ている。

黙々と歩き続けるしかないのだが、時折「マド」と呼ばれる切れ目から遠くの山並みが望まれ、少しの時間だけどジンと慰められるときがある。杖に寄りかかってしばらく眺め、ふと横を見ると同じように佇みながらこちらに笑顔を送ってくれる人がいる、そんな人が佐方さんだった。一緒に山登りをしたことはないが、山仲間の付き合いのように、あまり喋り合うこともなく、ただ足元を見つめてすぐす長い時間のあとで、夜空の星の多さに圧倒されながら飯盒の食事をとるとき交わす言葉の中に、相手の人生観を読み取る一番大切な瞬間を見付ける、そんな付き合い方をしていたように思う。

実際に、旬報社が慰労のために時々われわれを誘ってくれた食事会で雑談した後には独りになると、佐方さんとの会話が一緒に食べた料理の記憶とない交ぜになって、何か忘れられない情景として心に残ったものである。

しかし、すべては過去のものとなった。ここ十何年も会わずに来て、様子を知ることもなかったが、年賀状には相変わらず元気で何事かに取り組んでいるのだなと思わせる文字があった。それを見るだけで、ヤァと肩をたたき合い、握手をしたような気がして、またそれぞれの仕事に戻ってしまっても差し支えないように思っていた。

その彼が今はいないと知って、突然部屋の中に誰もいなくなったような気がして、この文章を書きながらも、「コレどう?」といって見せる相手が消えてしまったような空虚さに襲われる。でも、以前、彼が寅さん映画の中に故郷・鹿児島がいい景色が写っているのを見て、周りの誰彼をつかまえて「どうしても見ろ」といつていたの思い出し、彼はきっとそこに帰っているのだろうと思うことにした。

(元明治大学総長)

佐方さんにお世話になって

早川征一郎

佐方信一さんは、私と同じ一九三八（昭和一三）年生まれで、私と同年であると記憶している。佐方さんと私との交友関係を振り返るとき、大原社会問題研究所、（労働）旬報社を抜きにしては語れない。同時に、大原社研側の私からすれば、出版社側の佐方さんに終始お世話になってきたという印象が残っている。表題はそのことを意味しているが、以下、いくつかの事柄を記して、「お世話になった」佐方さんへの感謝と追悼の言葉としたい。

出合いと『日本労働年鑑』

佐方さんと私が初めて出会ったのは、一九七二年七月末、小平市上水新町の中林賢二郎先生の自宅であった。七月末の暑い折、初対面の挨拶を交わしたことを覚えている。

一九七二年四月、東大社研助手を経て、大原社研専任研究員として採用された私の仕事は、まず『日本労働年鑑』（第四三集、一九七二年版）を分担執筆することであり、翌年（第四四集、一九七三年版）からは中林先生から引き継いで、執筆と編集を担当することになった。佐方さんは当時、労働旬報社で『日本労働年鑑』の編集業務を担っていた。

以後、半世紀近い交友関係が続くことになるが、その中核が『日本労働年鑑』の編集・出版であった。とりわけ手書きの原稿の頃であった七〇～八〇年代、佐方さんは、私以上に丹念に原稿を読み、統計上の整合性を吟味し、原稿の問題点を指摘し、私に「解決」を求めた。大原社研編で『日本労働年鑑』が刊行されることから当然であるとはいえ、自らは決して原稿に手を加えず、初校、再校、三校、そして刊行に至るまで、あくまで「黒衣」に徹していたのが佐方さんであった。

出版人としての佐方さんのそうした基本姿勢は、あるいは佐方さんの「生き方」そのものであったのではないかと密かに推測しているが、その点はこの追悼集のほかの方々の回想文を待つしかない。

佐方さんとの共同の仕事

『日本労働年鑑』以外にも、とくに組合史でいくつかの共同作業がある。そのうち、私が執筆・編纂側の責任者となっているものとして、阪急電鉄労組編『阪急電鉄労働組合三十年史』（一九七六年）、全国金属史編纂委員会編『全国金属三十年史』（一九七七年）、法政大学教職員組合四〇年史編纂委員会編『全法政四〇年の歩み』（一九九四年）などがある。そのほか私が執筆したものとして、川崎忠文さん（元労働旬報社）との分担執筆による大阪府職員労働組合編『大阪府職労三五年史』（一九八二年）や、川崎さん他による国鉄労働組合編『国鉄労働組合五〇年史』（一九九六年）がある。

それらの総決算ともいえる仕事で、定年退職前の数年間、法政大学大原社研編『日本労働運動資料集成』（全二三巻＋別巻、二〇〇五～〇七年、旬報社刊）であった。その出版社側の担当者も佐方さんであった。

もともと組合史の執筆・編纂では、私自身はその本の「著者」ではないので、これまで自分の研究業績だと名乗ったことはない。ただ、私の社会政策Ⅱ労働問題研究者としての人間形成過程において不可欠な部分であるのは確かである。

それ故、ここで確認できることは、そうした組合史執筆・編纂のメインな部分において、私自身はひとかたならず佐方さんのお世話になってきたことである。この追悼文

を書きながら、改めて私にとつての佐方さんの存在の大きさを再確認しているしだいである。組合史執筆・編纂で、ほとんど知られていない話を一つ付け加えておこう。私の亡き妻・カツ子が書記をしていた全国電気通信共済会労働組合の編纂によるものとして、『電済労三〇年史』（一九八四年、労働旬報社刊）がある。この編纂過程で、初めに私が組合史編纂の在り方について組合の担当者アドバイスしているが、執筆は川崎さん、出版社側の担当は佐方さんであった。その三人とも、もうあの世へ旅立ってしまった。

青梅・御岳の「紅葉」とかれらとの「歓談」

佐方さん、川崎さんらとの会合として忘れられないのは、毎年十一月の紅葉の頃、御岳の「ままごと屋」で清酒・澤之井を酌み交わし、談笑したことである。最初は二〇〇七年か翌年の一月であった。それに、芹澤寿良さん（元鉄鋼労連書記、高知短大名誉教授）が加わり四人となった。二〇〇九年十二月、川崎さんが急逝し、やがて大原社研の五十嵐仁・明子夫妻が加わった。四〇五年続いた集まりだったが、「松戸から四時間近くかかる」とばやきながら出席していた佐方さんを想い出す。いまは私にとつて懐かしい一コマである。謹んで、ご冥福をお祈りすることにしよう。

（法政大学名誉教授・大原社会問題研究所名誉研究員）

大学院時代からの付き合い

五十嵐 仁

「会えるのは、これが最後かもしれない」と思いながら、話をしました。三カ月前に大腸がんの手術を受け、人工肛門をつけていると聞いたからです。二〇一六年一〇月一七日のことでした。場所はJR松戸駅近くの喫茶店です。水戸での講演の帰りに立ち寄るという電話で、ここまで出て来てくれました。実際、私が生前の佐方さんにお会いしたのは、この時が最後になりました。

初めて会ったのは大学院生の時でしたから、もう四〇年ほど昔になります。佐方さんは労働旬報社の社員で、労働運動史研究会が出していた雑誌『労働運動史研究』の編集を担当していました。

この『労働運動史研究』に私の書いた論文が載ることになり、その作業を通じて知り合うようになりました。統一戦線に関して私が書いた論文について、「このマヌー

バーというのは何とかなりませんか」と注文をつけられたことを覚えています。当時、共産党の論客の一人だった榊利夫さんを批判するニュアンスがあったからだと思います。

大学院を出た後、私は法政大学大原社会問題研究所の兼任研究員となり、『社会・労働運動大年表』の制作グループの一員となりました。編集を担当していた佐方さんと急速に親しくなったのはこのころからです。仕事が済むと飲みに行きますが、ほとんど皆勤したのは私と佐方さんだったと思います。「ちよつとしゃべりすぎですかねー」と言い訳しながら、文学論や地元での活動の様子など良く話をされていました。

私が研究所の業務として『日本労働年鑑』を担当するようになってからは、まさにコンビを組む「戦友」のような間柄になりました。校正は厳格で、再校まで赤が入ってきます。「ここまでやるか」というほど、念の入った指摘が続きました。『日本の労働組合一〇〇年』の刊行では、印刷所まで行って一緒に作業をしたものです。

ほぼ二月から四月まで、毎週水曜日に『日本労働年鑑』の編集会議があり、激論を交わしてから西八王子の「金太郎」に飲みに行きました。研究所は町田と八王子の境にある多摩キャンパスですから、松戸からよく通ったものだと感じます。付き合いも良く、帰れなくなつてわが家に泊まったこともありました。カラオケにも付き合い、歌う

のは決まって「坊がつる讃歌」です。

一緒に山にも行きました。奥多摩の山に行ったり高尾山に登ったりしたものです。「景信山はいいですよ。あそこの天ぶらとなめこ汁は最高ですね」と教えられたのも、佐方さんからでした。たいていは川崎忠文さんも一緒に、私の息子もつれて仙丈ヶ岳に登ったことは忘れられません。「いつでも出かけられるように、リュックに登山用具一式を詰めておくんですよ」といっほど山好きでした。

研究所の仲間と一緒に出かけるバスツアーにも行きました。企画を立てるのは私で、サロンのバスを予約したりお金を集めたりという事務作業は佐方さんの役目です。笹一酒造に行ったとき、たまたま新酒祭りの抽選会で当選し一升瓶をゲットしたこともありました。

山中湖近くの温泉「紅富士の湯」では、故郷・鹿児島県の弁護士さんからもらったという貴重な焼酎「森伊蔵」を持参し、忍野八海で汲んで来た名水で水割りにして飲んだこともあります。お湯割りにするとき、「まず、お湯を入れてから焼酎を入れるんですよ」と教えてくれたのも佐方さんでした。我が家の新年会で、同級生の蔵元だと言って焼酎「佐藤の黒」をいただいたこともあります。

親しみやすい性格もあって各地に友人や知己がいました。大分大学での学会に行った

とき、自治労の組合史作成でお世話になったという佐藤さんを紹介していただき、湯布院を訪問したことがあります。佐藤正人さんのオープンカーで自衛隊の日出生台演習場を案内してもらったことも忘れがたい思い出です。

このような付き合いは退職したあとも続けました。私ども夫婦と芹澤寿良先生を交えた四人で、河津桜や昭和記念公園の花見にも行きました。「日の出つるつる温泉」や「湯楽の里」などの温泉に入り、わが家で飲み会などをやりました。クラシック音楽が好きで、芹澤先生の招待でコンサートも一緒にしました。その時は奥様も一緒にです。

そんなお付き合いをこれからもできると楽しみにしていたのに、それがかなわなくなってしまうしました。あの人懐こい笑顔にも、もう会えません。淋しさに打ちのめされ、ただ呆然とするばかりです。

(法政大学名誉教授・大原社会問題研究所名誉研究員)

佐方さんからの最後の電話

鈴木 玲

佐方信一さんと最後に話したのは、二〇一九年の二月末だったと思います。私の研究室に電話があり、自宅の部屋を整理していたら以前、大原社会問題研究所から借りた本が出てきたので、宅急便で送り返したいと話しました。私が、体調のこと、三月二〇日に予定されている研究所創立一〇〇周年のシンポジウムに参加できるのかと尋ねたところ、「すでに抗がん剤を使用しておらずあまり長くないだろう」、「シンポジウム参加は難しいだろう」と言っていました。私は、体調がよかったらシンポジウムに参加してくださいと伝え、電話を切りました。電話があった翌日か翌々日に、本が宅急便で大原社研に送られてきました。

シンポジウムの二日前、旬報社の木内社長から電話があり、佐方さんが三月一日に亡くなったことを知りました。佐方さんもシンポジウムに参加して、研究所の懐かしい

人々と久しぶりに会いたかったのではないかと思います。しかし、それは叶いませんでした。

私は一九九九年に大原社研の専任研究員になりました。この年、『日本の労働組合一〇〇年』の刊行準備が佳境に入っており、私は一九五〇年代後半の労働運動の動向についての原稿を書きました。佐方さんから、かなり細かく同時に厳しいコメントが返ってきたことを記憶しています。佐方さんにコメントを読んで「怒りませんでしたか」と聞かれましたが、私は編集者とはそういうものと思っていたため、彼のコメントを素直に受け入れて原稿を修正しました。

佐方さんとは『日本労働年鑑』の編集でも大変お世話になり、毎回原稿が赤くなって返ってきたことを思い出します。彼は、私にとって文章の書き方の先生であつたと思います。また、年鑑の編集会議後、佐方さんと研究所のメンバーで西八王子の「金太郎」などに飲みに行ったこともいい思い出です。

佐方さん、安らかに眠りください。

（法政大学大原社会問題研究所所長）

佐方さんと『大年表』

佐伯 哲朗

佐方さんのお付き合いで最初に思い出されるのは、労働旬報社から出版された『社会・労働運動大年表』（以下、『大年表』と略）の編集作業の過程での様々なことである。一九八三年四月に私が『大年表』の編集委員会に加えていたとき、労働旬報社の側では佐方さんが担当されていた。『大年表』の編集作業は、一九八六年三月くらいまで、法政大学市ヶ谷キャンパスの八〇年館三階にあった大原社会問題研究所で行われていたが、当時の佐方さんはグレーか紺の背広を着て、ある意味大変懇慫で、お人柄が現れた人への接し方をされていた。

『大年表』の編集作業は、編集委員会の側では、一九八七年の年明けくらいまで続いていたように思うが、労働旬報社サイドとしては一九八七年三月くらいまで続いていたようである。一九八三年当時、ワープロやパソコンがまだ普及しておらず、『大年表』

編集委員会の決定事項などをまとめた『編集ニュース』は、佐方さんの几帳面な字による手書きであった。

一九八三年正月、栗田健先生の大学院の授業に出ていた何人かで栗田先生のご自宅に伺ったときに、年表出版の話聞いたように記憶するので、話が具体化してから、四年と何ヵ月かで『大年表』は完成にこぎつけたと思われる。六欄構成の年表部分と用語解説の部分とからなる事典としての意味を持つこのような本を編集するのは、かなり手のかかる仕事であったが、佐方さんとしては大変なご苦勞があったのではないかと推測される。

とりわけ、大原社研が東京都町田市にある多摩キャンパスに移転した一九八六年四月くらいからは、われわれと一緒に百周年記念館に時々宿泊されることなどもあって、研究所が市ヶ谷キャンパスにあった時代に比べても大変だったのではないかと思う。この『大年表』の仕事については他の方も書かれるかと思うが、佐方さんの奮闘なくしては『大年表』は世に出ることはなかった。重複することになるかもしれないが、ここに書いて、記憶にとどめておきたい。

（都留文科大学非常勤講師）

「いいじゃないですか」の励まし

木下 武男

佐方さんは私が研究者として独自の道を歩むうえで、それを励まし、支えとなっていた方でした。一九八〇年代の頃、佐方さんは故中林賢二郎先生の書籍や、先生が関わっていた大原社会問題研究所の仕事を手伝っておられました。私も、指導教授は違いますが、先生の労働組合論の影響を強く受けていました。

中林先生はその晩年、私に告げられたことですが、これまでの労働運動研究の仲間とは一線を画し、独自の主張をしたいと思っておられました。それは労働運動研究の大勢に抗う方向でした。その先生が急逝され、私は先生の追悼文に「寂寥たる雪原に立つ思いです」と書きました。

その思いは現実のものとなり、私の主張は荒野に叫ぶが如くでした。その頃、佐方さんは、お会いするたびにこう励ましてくれました。「いいじゃないですか。中林先生の

後を継いでいるんだから。思うようにやればいいんですよ」。にやりと笑い、目を細められました。

その後、研究者として独り立ちしてからも、お会いすると、同じような言葉をいつもかけていただきました。ずーと私の背中を遠くから見つめておられるような、そんな励ましを感じてきました。いまでも「いいじゃないですか」の言葉を忘れることはありません。ありがとうございます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

（労働社会学者・元昭和女子大学教授）

唯一、激論の根底にあったものとは

手島 繁一

一九八〇（昭和五五）年の五月だったと思います。わたしは、大学八年、修士課程五年という破格のスローペースで法政大学大学院博士課程にたどり着いて、緊張感から解放された気持ちであったのです。が、そこに指導教授であった中林賢二郎先生から「修士論文を『労働運動史研究』に掲載し活字になさい。ついては、労働旬報社の佐方君に連絡を取りなさい。ちょっとクセがあるが、ベテランの編集者だから万事良いように取り扱ってくれるからね」との電話がありました。スローペースのわたしにとっては珍しく、直ちに佐方信一さんに電話をしました。なにしろ「クセがあるベテランの編集者」を相手にするわけですから、相当身構えて緊張していたことを覚えています。

ところが、電話口の向こうからは「佐方です。中林先生から承っております。どうぞ、あなたが良いと思われるような論文をお纏めください。お待ちしております」と、

やや甲高くも柔らかな声が返ってきたのでした。肩透かしを食った思いでした。もちろん一言一句までは正確ではないのですが、このやり取りの記憶は今でも鮮明です。

これが以後四〇年にわたる佐方さんとお付き合いの始まりでした。

いま思えば、この初発のなかに佐方さんとわたしの関係のありようがすでに示されていたように思われます。佐方さんとわたしは年齢にして一〇年ほどの差があり、その関係は愚弟執筆者と賢兄編集者のようでありました。一九八六年に中林先生が亡くなられた後は、中林先生から出来の悪いわたしを預かり、励ましたりなだめたりしながら、なんとか一人前の研究者にしようと育成者としての己の責務を自覚していたのかもしれない。

とはいえ、決して先輩風を吹かせるわけでもなく、物腰柔らかかに、常に執筆者や研究者を影から支えるという役割に徹した姿勢は、編集者の鏡ともいえるべきものでした。わたくしなど、まだ修業中の大学院生のころから「先生」と持ち上げられ、ずいぶんこそばゆい思いしたものでしたが、その言い方が「センセ」と聞こえるのがわたしには印象的で、往時も今も佐方さんを偲ぶよすがになっています。

ちなみに、この「センセ」という言い方は先年亡くなったわたしの妻・慶子もお気に入り、夫婦の会話でひとしきり佐方さんの話題で盛り上がった折、「あなたと佐方さ

んって、掛け合い漫才兄弟コンビのようね」と評されたものでした。

思い出は尽きませんが、わたしが賢兄のように慕っていた佐方さんと、唯一激論を交わした場面がありました。二〇〇三年一月頃でしたか、大原社研のなにがしかの会議の後、いつものように西八王子駅前「金太郎」で打ち上げ飲み会があったことです。どういう話の巡りかは覚えていませんが、翌二〇〇四年のNHK総合の大河ドラマが「新選組」になったということが話題になったとき、佐方さんが珍しく声を荒げ、「新選組のとき反革命集団を国民的ドラマの主人公にするとは何事か！」と、憤激の弁をまくしたて始めたのでした。

穏やかで物静かな佐方さんの人柄に慣れ親しんでいた酒宴の場の人々はびっくりして、しばらくは一同じつとその弁を聞いていました。が、おそらくその沈黙を破って最初に反論に出たのはわたしだったと思います。明治維新論、薩長史観など歴史学上の重大論点が含まれる論争の一端ではあったのですが、なにしろ酒宴の席ですから話は奔放にあちこちに駆け巡り、結果としては爽快な対論となったとの記憶があります。

後から考えると、佐方さんの薩摩っ子としての根っ子が良くわかる立論でした。わたしがいち早く反論したのは、これまたわたしの根っ子が「賊軍の子孫」であったからでした。この当時は不明だったのですが、その一〇年後、わたしの縁戚だとする宮城県在

住の方から、手島一族は仙台藩岩出支藩の重職の家系である、との手紙が舞い込みました。わたしの父方の祖父は確かに宮城県から北海道への移住者で、県内有数の大族の流れではあるのですが、何らかの問題を起こして現地におられず渡道したらしい、という情報も添えられていました。

とはいえ、「薩長官軍」に立ち向かった「賊軍・奥羽越列藩同盟」の出であることには違いがないのです。どうやら、「新選組」をめぐる対論は、「薩長官軍」と「賊軍」の子孫のDNAが時空を超えて遭遇したことによるものかもしれません。

佐方さん。

いずれそう遠くない時間、わたしもそちらに参ります。妻・慶子とせいぜいわたしの悪口でも言い合ってお待ちください。

（元法政大学大原社会問題研究所兼任研究員・元法政大学社会学部講師）

「知」をどう編むのか

木内 洋育

私が労働旬報社に入社した一九八一年、佐方さんは前年の十一月から刊行が始まった『大河内二男集』（全八巻）の編集に取り組まれていた。

早稲田大学の修士課程（労働法専攻）を修了し、『労働法律旬報』の編集者として採用されたものの、口だけ達者で生意気なだけの若造にとって、理路整然とした著者との会話や職人さん気質を知悉した印刷所とのやり取り、あいまいなどろろを残さない本づくりに、「これが編集者なのか」と佐方さんに羨望に似た気持ちを抱いたことを覚えてる。

そんな佐方さんから、大河内先生に、月報ゲラだったか記憶が定かではないが、ゲラをお届けするよう命じられた。大河内先生といえば、著書でしかお目にかかったことのない大先生である。私は緊張した。察した佐方さんは、大河内先生の人となり話を話して

くれ、そんなに気張ることはないよと、笑いながら見送ってくれた。気遣いの細やかな人であった。

当時、というか今もそうだが、テレビはクイズ番組が花盛りで、「大阪の『阪』は昔は『坂』だったけど、『土』にかえるのは縁起が悪いから『阪』になったんだって」などとクイズで出た問題の話をしていたら、佐方さんがひと言「つまらないね」と、ボソツといわれたのである。

歴史から切り取られた知識、体系の中に位置づけられない知識に価値はない、という意味でいったのだ、ということの後飲みの時に知ったのだが、「なるほど」と思う反面、ちょっと「疲れるな」と感じた。

そんな佐方さんが編集する企画は、「軽薄短小」が進む世の流れに反して「重厚長大」なものばかりだった。その集大成が、文字通り全身全霊を賭けて取り組まれた法政大学大原社会問題研究所編集『社会・労働運動大年表』（全四巻、一九八六―八七年）であった。出版史に残る刊行である。

私は『労働法律旬報』誌の編集に日々追われていたので、佐方さんの仕事とのかかわりはほとんどなかった。仕事で助力をいただくようになったのは、佐方さんが体調を崩され会社を辞された後、そして私が単行本の編集に移ってからのことだった。

佐方さんほどではないが、「重厚長大」な企画しか頭に浮かばない私にとって、佐方さんの存在は企画の実現にとって不可欠であった。というより、佐方さんに助けていただくことを前提に無謀な企画を立てていた、というのが本当のところだったかもしれない。

『社会保障・社会福祉判例大系』（一九九六年、全三巻）、『21世紀コンピュータ教育事典』（一九九八年）、『日本の労働組合一〇〇年』（一九九九年）、『大系 環境・公害判例』（全九巻、二〇〇一年）、『本田靖春集』（全五巻、二〇〇一年）、『環境問題資料集』（全二三巻＋別巻、二〇〇二～〇三年）、『日本労働運動資料集成』（全二三巻＋別巻、二〇〇五～〇七年）、『新版 社会保障・社会福祉判例大系』（全四巻、二〇〇九年）など、よくお付き合いいただいたものと、改めて感謝の気持ちでいっぱいになる。

こう述べてくると、佐方さんという方は堅物の極みのような感じだが、特にお酒を飲みながらのお話は、すこぶる面白かった。私が早稲田の後輩だったことがあるのかもしれないが、「重厚長大」企画の合間に、よく高田馬場の飲み屋に連れて行っていた。

話題は、花田清輝・吉本隆明論争をはじめとする文学、早稲田小劇場や演劇、芝居の話、とりわけ興味深かったのが浅草の踊り子さんたちの話である。佐方さんは早稲

田大学が好きだったからかどうかかわからないが、四年で卒業せずに留年していたとのこと。その間、踊り子さんたちの地方巡業について回ったこともある、というのである。こちらはいつもと違う世界を垣間見るようで、酒の席とはいえ感心しながらまじめに聞いていたのだが、すべて本当かどうかは謎である。

そして、いつも最後に「ちょっとしゃべり過ぎかな」といって、酒宴を終えるのである。

佐方さんとの思い出を語りつくすことはとてもできないが、「木内さん、ちょっと書き過ぎだよ」と、耳元でささやかれた気がするので、この辺で終わりにしたい。

最後に、労働旬報社Ⅱ旬報社は昨年、創立七〇周年を無事迎えることができた。佐方さんの思いも大切にしながら、少しは「重厚長大」の企画も出しながら、がんばっていきたいと思う。

（旬報社代表取締役）

「兄と弟」を重ねて

平木 豪達

佐方さんと知りあつて、ちょうど五〇年でした。五〇年前、労働旬報社（現・旬報社）に入社以来、先輩というか、兄貴、先生のような存在です。

やわらかい付き合いでは、兄弟関係を重ねる感がありました。佐方さんは私の兄と同年、弟さんは私と同年でした。いろいろな局面で、「しようがないなあ」と支えつづけてもらい、当方も、甘えつばなしの関係でありました。どちらも、わりと質素な教員家庭育ちで、呼吸があつたような気がします。野山にいくつか同行しました。浅間山登山道で大量のアミタケを採集したり、高尾山でアサギマダラを追いかけたり、懐かしい思い出です。私の洗面台のステンレスのコップには、「雲取山荘六〇周年・一九八八年」と印されており、毎朝、同行した佐方さんの眼差しがよみがえります。

私は入社三年目をすぎるところ、もともとは営業部員だったのですが、会社縮小にとも

なう人員不足のため、『季刊・国民教育』（国民教育研究所編集、労働旬報社発行）の編集を手伝うことになりました。佐方さんが労働編集部を代表し、私は助手で原稿運びなどをしました。私は編集仕事のまったくの素人でしたから、一から佐方さんに教えていただきました。

最初に教えられた校正や原稿整理など、なかでも通称「文字統一」には、強烈な印象があります。労働本は文学書ではない、また、専門書でもなく、広い読者に読んでもらう本である。であるなら、論文の主要な概念を表わす用語を見定めること、それはだいたい漢字であるから、それを邪魔しないように、接続詞、助詞、助動詞、場合によっては動詞も、ひらがなにしよう、そうすれば仕上がりは黒っぽくなくなる、と。芥川賞、直木賞受賞作品にはすべて目を通す人が言われることゆえ、ただただ感心していました。

本づくりにには礼儀があると教えていただいたことは、とても語り尽くせませんが、今でも焼きついている場面・事項を二つ。

一つは、「先行類書の一覧表」を作ったこと。書籍名を横軸、諸事項を縦軸にして、巻物風。これで比較・検討はもとより、工程上行き詰まった時でもヒントになりました。時間に追われていても、いつもこういう構えは持て、と。

もう一つは、掲載するかどうか決まっていなくとも、「資料」「年表」「索引」は必ず準備すること、と。資料の存在によって注記などが助けられたこともありました。年表掲載について考えると、本文記述の諸事情が目に見えたりすることもある。索引の目つきがあると、文意も浮かびあがってくる感もありました。

佐方さんが資料探し、図書館活用の達人であったことは、衆目の一致するところ。でも、数回くつついて行ったりしたものの、私には主体的意欲と粘りがなく、とうとう深みを垣間見ることもできませんでした。心残りです。

*

現在、私は再び病院のベッドで、半世紀間を想い起こしながら記しています。この一〇年間は、私のほうが気づかっていたに……。でも、弟ですから、私は治療後の新しい体力を得て、新しいQOL（生活の質）を築いていくことは可能だと思っています。佐方さんから教えられたように、私たちは歴史のリレーランナーですから、バトンをつないでいけたら、と思います。

（旬報社OB）

凜とした生き方

山本 達夫

佐方さんの訃報に接したとき、私は本棚のどこかにあるはずの上下二冊の文庫本を探した。杉本苑子『孤愁の岸』だが、ここで描かれた薩摩藩の勝手方家老平田靄負の凜とした生きざまが、私には佐方さんと重なっていた。三十数年前の埃っぽく色あせた文庫本をとどころ拾い読みしながら、平田靄負が自刃する最後の数頁にきたとき、思わず涙があふれた。

宝暦三（一七五三）年、財政難に苦しむ薩摩藩に突如濃尾平野の治水工事の幕命が下る。幕府が常套手段とした露骨な外様つぶしの「普請手伝い」だが、平田靄負はその工事の総責任を負い、木曾川、長良川、揖斐川の今も残る治水工事を薩摩藩士の多大な犠牲を伴いながらも成し遂げる。

いつのことだったか、そしてどういう話の流れだったか、居酒屋で「佐方さんは平田

靱負のようです」と話したことがある。佐方さんは笑いながら、いつものように髪をかき上げ一笑に付したが、宝暦治水で犠牲となった平田靱負ら薩摩藩士の碑が鶴丸城の一隅の小高い丘に建てられていると教えてくれた。その碑の前に立ってみたい、そのとき強くそう思った。そして薩摩藩による奄美諸島の人びとへのサトウキビ栽培の苛烈な収奪の背景には、宝暦治水で薩摩藩が背負った莫大な借財があったことも話してくれた。

佐方さんは博識だった。私は一昨年、「マスコミ・文化 九条の会 所沢」の機関紙に「戦争の実相に触れる」という小文を書いた。吉田裕『日本軍兵士』で知った、北海道日高地方の海上で起きた日本軍将校らによる凄惨な犯罪についてだが、昨年、佐方さんから届いた賀状にこの事実を「初めて知りました」とあった。所沢周辺にしか知られていない機関紙を、闘病中の佐方さんが読んでくれたことがうれしかった。同時に、博識の佐方さんが知らなかったことに、なぜか私は少しだけ心が弾んだ。

その賀状が最後になってしまった。未だ果たせていない鶴丸城の一隅を訪ねてみても、もう佐方さんに話すことができない。だけど、私のなかで佐方さんはこれからもずっと『平田靱負』でありつづける。

(旬報社OB)

編集者の鑑

口石 利昭

「あそこには佐方君という編集者がいる。労働運動については、そこいらの助教授よりもずっと勉強しているし、詳しい。入ったら、彼に教えてもらおうといい」

これは労働旬報社に就職が決まり報告に行った私に、恩師である沼田稲次郎先生(当時、東京都立大学総長)が開口一番放った言葉である。一九七三年秋のことである。だが、それを実感するのは十数年経ってからであった。

本を読むのは好きだが、作る側になろうとは考えてもいなかった私にとって、出版社に入ったことは偶然の成り行きでしかなかった。入社後『労働法律旬報』の編集者となったものの社員教育などしない当時の社は、編集の何たるかも知らない私には、決して居心地のいいものではなかった。あるとき、『校正の手引き』なる薄い冊子とデラ刷りを渡され、「校正してくれ」といわれても、どう対処していいかわからなかった。

どこに赤字を記入しているのかわからず、行間の余白に小さな字で赤を入れていた私を佐方さんは見かねたのか、左手でゲラの文字を押さえ、右手で原稿を合わせること、決して文字面を読んではいけないこと、赤字は上下左右の余白に読みやすい楷書体で書き入れることなどを、さりげなく教えてくれた。このときから、私は佐方さんを師と仰ぐようになった。

それから一二、三年経ったころ、『社会・労働運動大年表』（全四巻）の編集作業に駆り出され、佐方さんと一緒に仕事をする機会に恵まれた。佐方さんの編集者としての実力と労働運動への深い知識を知悉するのは、この作業の過程であった。

時間に余裕のない中で編集作業は、想像以上に大変なものだった。字数の調整、用語の統一、主観的記述の削除、文章表現の吟味などは当然のことだとしても、出典によつては年月日が異なることも少なからずあり、会議の中で、より正確な出典を確定しては訂正するという作業に忙殺された。午後四時ころに法政大学多摩校舎の大原社会問題研究所に集まり、翌朝六時ころまで会議と作業に没頭し、自宅には仮眠をとり帰るだけ、という過酷な日々が続いた。

佐方さんは、松戸から三時間近くもかけて多摩まで出勤していた。往復の時間を考えると、寝る時間はほとんどない。夕方、再び集合してゲラを持ち寄ったとき、佐方さん

のゲラには、他社の年表や出典との日付の相違、他の書籍との評価の違い等々、鉛筆で細かく指摘してあった。半日にも満たない短時間にそこまでチェックできる人は、そうそういない。よほどの労働運動の知識と執筆者以上の実力がなければ無理である。

これに対し最初こそ、佐方さんの疑問や注文を再検討し調べ直していた責任編集者・教授陣は、その指摘に間違いないことを確認しては、「佐方君もここまで調べていたら、遠慮なく赤字で確定してくれればいいものを」と嘆きつつ赤を入れていたが、やがてノーチェックで、鉛筆をそのまま生かすようになっていた。それほど正確な指摘だったのである。それでも佐方さんは、誤字以外は赤を入れなかった。たとえ執筆者の記述が正確であっても、あくまでも鉛筆で指摘するにとどめるといふのは、佐方さんの編集者としての矜持だったのだろう。

『大年表』完成後ほどなくして、佐方さんは体調を崩し、退職された。佐方さんは命を削つてまで、この編集に賭けていたのだ。とまれ、『社会・労働運動大年表』は、佐方さんという稀代の編集者と二村一夫先生（当時、大原社研所長）という実力コンビなくしては決して生まれることのなかった作品だった。

佐方さんは謙虚な人だった。そして、編集者の鑑であった。

前田寿男さん、川崎忠文さん、佐方さんの「山登り三人衆」に誘われて富士山や奥多

摩の峰々を縦走したことがあるが、三人とも鬼籍に入られた。おそらく今頃は、天国の山々を三人仲良く散策されていることだろう。

私もそのうち参加させてもらうつもりだ。

(旬報社OB)

鹿児島県人の佐方信一さん

永山 誠

「電話がなったら必ずとつてね」。労働旬報社編集部に入り数日後、佐方信一さんから最初に教えられたことです。昼飯は「おけい」に行くと「餃子とタンメン！」が定番。タンメンの熱いスープをすすりながら、「仕事をしながら食べるのはダメ」と。人をよく観察されておられました。仕事が上がると「ビールでも飲むか」と誘われますが、二時間ほどで「さあ、これでおしまい」と気合をかけて「お勘定」。これが佐方流です。

労旬退職後、高知県に転職しますが、来高された佐方さん、芹澤さん、川崎さんの大

先輩と何年かぶりで、はりまや橋の小料理屋でカツオを食べながら談笑。これも三時間未満でした。佐方さんは自分の生活リズムをうまくつかんでおられた。

労旬の方々は皆大変な勉強家で、事象には様々な解釈があることを承知しており、話にもゆとりがあったのが、大変魅力でした。私の知る限り校正ゲラで佐方さんは不明な点を疑問符だけではなく、黒鉛筆で選択肢を示し、「著者に考えさせる」作業をしました。よほど勉強していないとこんな作業はできない。院生の論文指導と同じです。こんなところに教育者・佐方さんの素顔がありました。文献チェックでは編集者の仕事は何かを考えさせられました。

一番ヶ瀬康子先生と津曲裕次先生の勧めで、一九九八年私は高知女子大学の社会福祉学部開設準備に関わります。驚いたことに、佐方さんは津曲先生をよくご存知だった。東京の鹿児島奨学会学生寮で一緒だったそうで、佐方さんはゆつくりと「いい先生に出会いましたね」といわれた。

津曲先生は特殊教育を出発点にした福祉研究の大御所で、アメリカで生理学を学んだからか徹底した実証主義にもとづく論文指導をされ、筑波大学では日本最初の社会人大学院を立ち上げます。津曲先生の下で大学運営や学位論文の指導を受けましたが、指導の舵取り名人芸です。

偶然にも私は、鹿児島県人に伴走されながら育てられました。佐方信一さん、ありがとうございました。

（現・長崎純心大学大学院非常勤講師、元昭和女子大学・高知女子大学教授）

佐方さん いっぱい いっぱいありがとう

江森百合子

佐方さん、逢いたくて、なつかしくて、おしゃべりしたくて、でも、もういらっしやらないんだと思うと、寂しさでいっぱいになります。

労働旬報社時代、仕事では編集と営業で日常的にはあまり接点がなかったのですが、私にとつての佐方さんは一番の悩み相談相手だった気がします。

ちよっと年上だった私にも、いつでも「百合ちゃん、それはね」ってあのやさしい語り口でいろいろ教えて下さいました。もう何十年も昔のことなので具体的なことは思い出せないのですが、佐方さんとお話するといつも安心できて落ちつけた、その繰り返しでした。

しでした。

また、会社以外での活動でもその当時相談しなければならなかったことがしばしばあり、よく佐方さんと加藤好雄さん（故・元編集部）と三人で帰り際に喫茶店で何時間もかけて討議し相談し合ったりしました。そんなときも、佐方さんは何事にも真正面に真剣に向き合い、誠実で一生懸命で決して感情的になることはなく、すぐムキになる私には頼りになり尊敬できる先輩でもありました。そんな佐方さんに私は甘えていたのかも知れません。今更ながら「ごめんなさい」。

それと楽しかった思い出の一つ、いつかの社員旅行でのこと。長いバス旅行中、佐方さんも入っていつしよに「花かるた」をしてワイワイとみんなで笑い合った日のことを忘れられません。というのは私が小学生時代、父の故郷・雪深い新潟へ疎開して、くる日もくる日も雪、雪、冬に青空をみることはないような日々、子ども達の遊びはコタツに入って「花かるた」をすることが何よりの楽しみだったのです。私もいとこや姉妹たちと毎日のように「花かるた」をして遊んでいました。それでなつかしくて喜ん中で中に入れてもらったのですが、会社の人々には何故か意外だったらしく「エッエー？ 百合ちゃんも出来るのー？」って面白がられて、今は旅先がどこだったかは忘れましたが、みんなで笑い合った大切な思い出となっています。

仕事ひとすじのような旬報社でしたけど、何回かの社員旅行は編集も営業も心許し合って、仲良くなれるチャンスだった気がします。私ももう仕事を離れて二〇年以上になりますが、このごろになって思うのは、二〇代から今日まで少しでも成長できたと思えば、それは佐方さん達とご一緒できた旬報社時代の生活と、その後の「うたごえ運動」にたずさわってきて、たくさんのすてきな方々との出会いがあったからこそ、と思っています。佐方さん「ありがとう、みなさんありがとう」と、心から伝えたいです。佐方さんは今は天国で照れながら「何の、何の」って、笑って受け止めて下さっていることでしょう。

もう少ししたらまたお逢いできますね。それまでね。さようなら。

（元労働旬報社同僚）

「坊がつる讃歌」をデュエットして

隅井 郁子

人みな花に 酔うときも
残雪恋し 山に入り
涙をながす 山男
雪解ゆきげの水に 春を知る

佐方さんは鹿児島、私は佐賀と同じ九州出身でしたので、会社の忘年会や仲間同士の酒席、カラオケなどで、よく一緒にこの「坊がつる讃歌」を歌った懐かしい思い出が、いまでも脳裏に焼き付いております。

佐方さんとの出会いは、一年遅れて労働旬報社に入社したときでした。同じ九州出身ということで、すぐに意気投合しました。私は営業部に配属されましたが、小さな会社

なので社の近くの西久保巴町界限で昼食をご一緒したものです。入社後、間もなく七〇年安保闘争が繰り広げられ、国会前のデモ行進では、一組合員としてドキドキしながら佐方さんたちのあとに続いたことが、昨日のことに思い出されます。

佐方さんは文学や映画・音楽・山登りにも造詣が深く、気さくな博学の人でした。机の上には、『広辞苑』をはじめいくつもの辞書が並んでおり、何か解らないことがあったら「佐方に聞け!」と、まさに生き字引でした。

労働旬報社はこれまでも組合運動史をたくさん手がけてきました。そして、佐方さんが入社してからは『総評二十年史』をはじめ、国労・日教組や炭労、私鉄、全金など、北海道から沖縄まで各地の単産の組合運動史を何十冊もつくりました。おそらく日本の編集者で、これほどの組合運動史を手がけられた人は、皆無なのではないでしょうか。また、『社会・労働運動大年表』が大学生協でも話題となり、大変誇らしい思いもしました。しかし、佐方さんは、決してうぬぼれず、とても謙虚な方で、常に「黒衣」に徹しておられるようでした。

無理が重なって身体を壊し、フリーの編集者になってからも旬報社とのご縁は続き、たくさんのお本を刊行していただきました。こうして、かつて同僚だった私たちも定年を迎え、定年まで頑張った者同士八人で「OB会」なる「飲み会」を結成し、この会に

佐方さんも参加していただきました。会の運営は、なぜか女性一人の私が幹事になり、三カ月に一度ほど場所探し、時には一泊旅行も計画し、春は桜、夏は暑気払い、秋は紅葉、冬は雪見酒と、楽しい思い出を重ねてきました。

最後に佐方さんが参加されたのは、手術から八カ月後の二〇一七年の春でした。体調が良いとのことで、療養中ということもあって松戸のお寺を散策し、伊勢丹の「銀座アスター」で中華料理と老酒をいただきました。とてもお元気でした。

この会も二人の方が他界され、消滅しそうです。佐方さん、たくさん・たくさんのお出でありがとうございました。

三俣^{みつまた}の尾根に 霧飛びて

平治に厚き 雲は来ぬ

峰を仰ぎて 山男

今草原の 草に伏す

近いうちに、みなでお墓参りに行きます。

何でも知っていた大先輩

飯島 信吾

医療生協さいたまの現場で

佐方さんは、五〇年近く教わった私の先輩編集者ですが、数年間、離れていても相談に乗ってくれる人でした。私（シーアンドシー出版）が「医療生協さいたまの広報関係」の新聞・小雑誌を受託して、東浦和の埼玉協同病院内に机をもらって編集作業を始めたのが二〇〇〇年六月。

一〇万部のタブロイド新聞（「けんこうと平和」月刊、八頁）の校正・校閲は「松風いさ子さん（校正者）に頼むこと」、医療生協支部役員向けの小雑誌（「健康ネットワーク」、B5判三段組み、一六頁）は、「自分がやるから」と言ってくれて、毎月一回、JR武蔵野線を使って通ってくれた。

この仕事は、MAC（QuarkXPress）を使ったDTP版下を現場で作り、組合員参加

の広報委員会には完全版下で討論するというやり方だった。タブロイド新聞はライターさん、カメラマンさんの参加を得た。

小雑誌は、組合員さんからの投稿を受けて、日本語として完璧な文章を要求されていたので、「てにをは」はもとより、地名や組合員さんの年代（当時の人たちは五〇代後半から六〇代前半の人が中心）が持つ時代の雰囲気醸し出す文章を生かす作業は、並大抵ではなかったと思うが、ほぼ一日で再校まで行き、翌朝、広報担当役員に提出するレベルになった。

松風さんと佐方さんが参加してくれたおかげで、誤植があったり、事実誤認があると「延々」とぶつぶつ言われる仕事にならず、「受託仕事」にはなくてはならない作業を「校正者」として担ってくれた。

その佐方さんが、あるとき、DTP作業メンバー（元「しんぶん赤旗」の整理部員）に加わった（株）埼玉総合宣伝センターのKさんと気が合ったようで、毎回、少ない校正費にも関わらず、「一杯飲み会」を必ず行い、「あーだ、こーだ」と政治論議（地域での活動から社会全体の取り組みについて）するのをそばにいて、「若い時代に戻っているのかなー」と思ったことがあった。

聞き手がいいと、歴史の流れと現実について、あふれんばかりの「論」が出たよ

うだ。

大先輩との『歴史小史』

私が二〇歳前後の時代、佐方さんの下で仕事を手伝ったことがあった（『ベトナムへの手紙』など）。その折、一杯飲んだとき、どうしても自分で解けなかった「毛沢東の文化大革命」（一九六六年～一九七六年）、「プラハの春（ソ連のチェコスロバキア侵攻）」（一九六八年）について、佐方さんはどう見ているのか聞いてみたいと思ったので、質問した。佐方さんは一〇歳も若い私がどんな思いで聞いているのか「？」、少し戸惑ったようで、「もう少し経てば分かるよ」と、ポツリと語った。

その佐方さんが、私たちが中林賢二郎先生（法政大学社会学部教授）に頼んで開いていた「どうどうめぐり研究会」（二週間に一回か毎週か？）の自主ゼミのメンバー・大橋三千枝さんと結婚することになった、と中林先生から聞いたときはびっくりしたが、「いいんじゃない」とすぐに思った。

その後——一九七〇年代後半から八〇年代初頭まで——『花田清輝』『堀田善衛』『宇野弘蔵』（あと数人）の本を、時間をおいて話してくれた。

一番困ったのは、「宇野経済学」だった。最初は岩波書店の『経済原論』、少し下がっ

て『資本論の経済学』（岩波新書）、『資本論五十年（上・下）』（法政大学出版局）などを読んだが、なかなか難しかった。

私は一九七〇年代後半に総評・中立労連など傘下の「単産研究」を早川誠一郎先生、永山利和先生、高木郁朗先生にお願いして始めた。

当時、単産・企業連合組合の情報誌・機関紙には、宇野経済学系のさまざまなメンバーが闊歩していた。やむを得ず、東大経済学者関係の氏原正治郎先生・戸塚秀夫先生・兵藤釗先生・中西洋先生などをベースに、向坂逸郎先生を中心とする「社会主義協会」のメンバーの鎌倉孝夫さん、新田俊三さん、大内秀明さん、高木郁朗さんの論文（または本）や『月刊労働問題』（日本評論社）などの雑誌論文を読み、懸命に学んだことがあった。このきっかけがなければ、総評、国労、全電通、鉄鋼労連、電機労連、全国金属などの組合の方針・進路を学ぶことはなかったはずだ。

さて五〇年近くも付き合ってくれた人などいるのかと自分では思うが、二〇〇二年ごろ、大原社会問題研究所の五十嵐仁先生を先頭にバス旅行が計画され、佐方さんから「桃の里方面に行くので〇月〇日、西八王子駅、朝七時に来ませんか」とメールが送られてきた。早速、参加したら旧知の川崎忠文さん（元労働旬報社編集部）、芹澤寿良さ

ん（高知短期大学名誉教授）、手島繁一さん（大原社研兼任研究員）など久しぶりに会いました。

そのつながりから、数年後、芹澤寿良さん、石井次雄さん（元旬報社社長）、佐方さんたちが、「福生の酒造に行くので来ないか」と、これまた佐方さんからメールが来たのでホイホイと参加して、続けて箱根の出版健保への泊まり込み旅行や桜見学のために六義園へ、鎌倉の開高健さんのお墓訪問、横浜ブラブラ歩きなどを楽しんだ。

このグループの最後は、二〇一七年秋の「芹澤先生訪問」だったが、杖をつかないで西武新宿線下落合駅にたたずんでいたもので、「大丈夫ですか」と聞くと、「SHINGOがいるから」とカッコをつけて歩いていった。

その後、高田馬場の飲み屋では、「焼酎がダメなんだ」（あれほど好きなものが飲めなくなっていた）といいながらビールを一口ちよつと飲み、今読んでいる本で『現代史とスターリン』（渡辺治・不破哲三対談、二〇一七年六月）は「面白い本」と、石井さんと私に語りかけた。

なにか五〇年以上前の私の「疑問」を解いているような、気がした。

（元労働旬報社編集部、シーアンドシー出版・インターネット事業団）

間近に接し、あらためてわかったこと

真田聡一郎

いま思い返してみても気づいたのは、一九八四年の秋に労働旬報社（当時）へ途中入社した私が、佐方さんと机を並べて仕事をさせていただいた年月は、わずか三年に過ぎなかったことだ。その後、佐方さんはご病氣により仕事を続けるのが困難になり、惜しまれながら退社される。しかし、私の佐方さんとお付き合いはそこで終わったわけではなかった。

幸いにも徐々に健康を回復されていた佐方さんは、その幅広い知識とキャリアを生かし、社運をかけて取り組む大きな企画には、編集部の強力な助っ人として、常に深い関わりを持たれていくことになる。そうしたこともあって、私は最後まで佐方さんを、古くからずっと旬報社にいる社員のように、とても身近な存在に感じることができた。

二〇〇九年、それまで長年にわたって佐方さんが担当されてきた『日本労働年鑑』

（法政大学大原社会問題研究所）の編集実務を私が引き継ぐことになった。戦時にしばらくの休刊期があったとはいえ、当時ですでに創刊八九年を迎えていた歴史ある年鑑である。

まだ目白台にあった社屋の四階会議室でのことだ。重責に身の引き締まる思いで、翌年の二〇一〇年版・第八〇集の刊行に向け、佐方さんから諸々の編集業務を引き継いだのをよく憶えている。それからしばらく佐方さんにも同席いただきながら、法政大学多摩キャンパスで開かれる定例の『日本労働年鑑』編集会議に出ることになるのだが、そこで初めて佐方さんの仕事ぶりとは人間関係を間近に知る機会を得た。

あの頃は会議が終わると、大原社会問題研究所の編集委員の先生がたを交えての打ち上げ会がもたれるのがならわしで、行き先は京王線「めじろ台」駅近くにある「あまのじゃく」か、そうでなければ西八王子駅前の「金太郎」と決まっていた。ここで出る話題が、会議の場とは違った意味でいろいろ勉強になった。そして何度か行くうちにわかったのは、その「飲み会」が毎回、佐方さんを「囲む会」と言えるものになっていたことだ。

編集実務の正確さと内容面での的確なアドバイスは研究所内でも定評がある佐方さんだったが、同時に人間味豊かな人でもあり、研究者ばかりでなく職員にも慕われてい

た。鹿児島県産の焼酎を美味しそうに飲んで、磊落に笑う。その様子に、誰もが親しみを感じたのである。

出来上がった『日本労働年鑑』を佐方さんに献本する際、毎年欠かさずやったことが一つある。それは本に一文を添えることだ。「おかげさまで、今年も無事刊行できました」「今年は御覧のような特集を組みました。お時間があれば感想などお聞かせ願います」。そんなたあいのない中身だったけれど、佐方さんはいつも必ず丁寧な返信メールを送って下さった。そのなかには、本文中の表現や表記についての誤りをやんわりと正されたものもあった。ところが、今年からはもうそれも叶わない。寂しい限りだ。

佐方さん、長いあいだお疲れ様でした。そして、多くのことを学ばせていただき、ありがとうございました。

（旬報社編集部）

佐方さんのご指導で本ができた

橋爪 七臣

私たちの地域が伊那市へ合併する前は、西春近という村でした。その村の生い立ちや歴史に関して纏めたものがありませんでした。当時、公民館長であった有賀千篤氏から、役場に保管されている書類の整理をしようではないかと提案があり、佐方さんと親交のあった吉原富夫氏が中心となって、平沢、吉原、橋爪、菊島、春日の五人で取り組みました。

平成一〇（一九九八）年一月から三月にかけて、一通り目を通して終わりました。そこで、これらの資料を生かして歴史らしい本を作ることができないものか、と頭をひねりました。問題は、本づくりに経験のないメンバーの集まりであり、かつ、出版費用をどうするかということでした。かつて本づくりに取り組んで、予算措置までしたが実現に至りませんでした。そのときの残り積立金を当面の出費に充て、予定している一冊

五〇〇〇円を超える印刷代の工面は、今後の課題としてスタートすることになりました。た。

この年の四月から担当を決めて記事に必要な文書をコピーすることにしました。本の内容について議論し、村の歴史として総合的に、しかも学術的に記述することは、いろいろの面から不可能と結論し、したがって、記述の内容はコピー文書や、他の文献で間に合う範囲で記述することにしました。当初からのメンバーのほかに、適任者に依頼して執筆作業に取り掛かりました。

平成一二年八月に入り出版について助言と指導をお願いしてあった松戸市の佐方信一さんが来られ、それぞれの原稿に目を通された結果の報告がありました。ホテル青木で個人指導を受けた結果、訂正・加筆する部分が多く出て、予定した発刊日は不可能となりました。委員会では仕上げ原稿とする前段で何回か集まりを持ち、佐方さんのご指導のおかげで『西春近を振り返る——平成から明治・そして原始』が出来上がりました。

吉原編集委員長の編集後記に、「とくに佐方氏には遠方から数回にわたってご足労いただき、本づくりのポイントについてご指導いただくとともに、原稿に自ら手を入れ文体を整えて、作文に慣れない編集委員一同を勇気付けていただいたことに対して、感謝の意を表する次第である」と記されています。本当に有難うございました。

佐方さんが伊那市へ来ていただいたとき、四方の山を眺めて「山はいいなあー」といわれていたのが、昨日のことに思い出されます。本当に山が好きだったのだと思います。初めから関わって来た有賀公民館長、吉原編集委員長、平沢、菊島、春日の皆さんは、すでに亡くなってしまいました。残された未熟な私が、亡くなった皆さんの思いを伝えたいと思って拙い筆を取りました。

（元西春近公民館館長）

アルプスの風に乗って

原　ます美

一九八八（昭和六三）年六月三〇日、『小出土地改良区とその周辺』が発刊されました。それから三〇年、当時の編集委員一〇名の方々が次々と他界されました。

編集委員長の吉原氏は佐方さんを特別信頼していて、「佐方信一氏からは終始編集作

業への助言をいただいた」と言っておりました。この出版にかかわった方々は大変お世話になりましたのに、皆様ご逝去され残念でなりません。

実は私も、現在闘病中で、佐方さんの信州での思い出を書くことはままならず申しわけありませんが、佐方さんはいつも伊那の風景が気に入っている様子で、南アルプスや中央アルプスの山々を、「いいなあー」と見ていらつしました。

そんななかで、仲間が元氣だった一九九四（平成六）年八月八日の北岳登山の思い出を記したいと思います。

北岳（三一九三メートル）登山は、ベテランの山岳家でも難易度が高いのに、本刊行の「周辺の会」一行七名で一九九四年の夏、登ったのです。

一日目は、北岳肩ノ小屋までの行程、山梨県広河原から入り、一步一步……猛暑渇水の夏はきつく、肩ノ小屋まで七時間かけて登りました。山小屋はベッドが連なるのが当たり前の中、知り合いだった山岳写真家の白簾史朗さんのお世話もあって、一室を確保することができ、夕食のカレーは顔を見ながら歓談しつつ美味しくいただきました。

翌朝は暗いうちに登り始め、全員無事に北岳山頂に立つことができました。そのとき、ブロッケン現象を見ることができ、皆で感動しました。

「心臓の病気だけと登れたよ」と、佐方さんはとても嬉しそうでした。よく頑張られ

たな—と思います。この北岳登山で自信をつけられたのか、その後も高尾山とか他の山にも登っているとかおっしゃっていました。南アルプス仙丈ヶ岳、北岳にはどこかに私たちの足跡があると信じております。

佐方さん、風に乗ってアルプスを駆け巡ってくださいね。

（元アナウンサー）

『大分県労評三十年史』刊行に感謝して

佐藤 正人

今年も残り少なくなった一〇月初旬、信一さんの奥様から信一さんが他界したとの電話をいただき、その後、時を待たずに五十嵐先生からも電話があり、追悼集出版についてのお知らせがありました。

この年齢になるとその気になっても手足、とくに頭の働きの衰え、筆を手にするのも遅くなり、この非礼、失礼をお許し下さい。

一九七八年年末、一二年余の指名解雇と闘っていた私に、退職が条件の和解が成立、失業者になったと思っていたとき、大分県の労働運動三十年史発行に私がその任にあたる事が決定され、労働旬報社と佐方信一さんとの繋がりができ、指導を受けながら、B5版二段九八〇頁の年史を発行することができました。そして、一〇年余の年月が流れたとき、『十年史』の発行が決まり、また私が担当になり、佐方さんの指導を受けることになりました。

この一〇年余りは、医療生協の設立、診療所、病院の設立に関わってきましたが、六〇歳を前に退職して、以後の生活を考えていたときでした。私の生まれ故郷、湯布院は全国的な温泉観光地として脚光を浴びているときであり、その中にあっても一番の通りに面していたので、そこでの老後を考えていたのです。しかし、『十年史』の声がかかりましたので、二足のワラジの気持ちで引き受け、また、佐方さんの指導を受けることになりました。

そして二年半後、湯布院に『宿坊 はうら』という宿を開業し、すべて一人で運営、食事は囲炉裏を使った鍋料理のみ、その他持ち込み持ち帰り原則の宿でした。

そこで考えたのが、日本中の自由なドライブ旅で、毎年六月の雨季をその旅日程とし、

そのとき関東を通過する度に、千葉県八千代市在住の中学時同級生工宅を宿にしましたので、佐方さんに声をかけ、何度か浦安方面で杯を交わしました。佐方さんからも、故郷・鹿兒島の銘酒「佐藤」をいただき、盃を交わしたりしました。

そして、二〇一一年の東日本大震災で、自分の浮わついた旅を止めようと考え、今日に至りました。私の性格からか、細々としたことは忘却の彼方に……か、佐方さんとの関わりも遠い、遠い夢の中の夢みたいになりました。

楽しかったことを忘れないために、残り少ない人生を楽しみたいと思います。

（湯布院「はうら」）

もっと若い頃にお会いしたかった

徳住 堅治

佐方さんにお会いし、仕事を一緒にさせていただいたのは、佐方さんの晩年である。二〇〇四年『旬報法律事務所の半世紀』、二〇〇七年『日本労働弁護団の五〇年』（全四

巻）の出版を手伝ってもらったときである。私が編集責任者となり、故川崎忠文さんと一緒に佐方さんに編集・校正を担当してもらった。

私は、両書を通じて、戦後労働運動の中で誕生した労働弁護士の生き様や誕生秘話ができるだけ豊富に書き残し、若い弁護士に引き継ぐ励ましにしたいと強く思っていた。当時、労働弁護士の誕生に関与した弁護士のうち少なくない方が鬼籍に入り、また、弁護士稼業から引退される時期と重なっていた。最後のチャンスともいえる時期であった。

『旬報法律事務所の半世紀』では、第一部として「証言による草創期の旬報法律事務所」として東城守一、鈴木紀男、上田誠吉、佐伯静治弁護士らの証言録を集め、鎌形寛之、久保田昭夫弁護士らの座談録を収録した。『日本労働弁護団の五〇年』では、第一巻第一部「語り継がれる歴史」、第二部「権利闘争小史」、第二巻以下で「雇用と労働条件・人権の確立」の歴史や資料を掲載した。浩瀚の書だった。

この両書の出版の過程で、佐方さんとは頻繁にお会いすることになった。本の構成、編集方法、記録の収集方法、装丁などいろいろな議論をし、教えてもらった。佐方さんが社会科学の書物や理論に造詣が深いことはお会いして直ぐに感得できた。そのことが佐方さんの頭の中にも存在するのではなく、心の中にも、生き方にも自然に住み着

いていることには驚いた。穏やかで、優しさがあっても、ピシッと一本通った姿が何ともいえず素敵だった。酒好きな川崎さんを交えた酒の席も、何だかふんわりしていて気持ち良かった。私は、佐方さんをもっと若い時から存じ上げていたら、もっといろいろな本と一緒に出せたのにと悔やまれてならない。

日本労働弁護団は、『労働相談実践マニュアル』など多くのマニュアル本を出版している。表紙も弁護士が自己流でデザインし、装丁もただ原稿を並べただけの素人本であるが、このマニュアルがよく売れる。佐方さんに見てもらったら、表紙や装丁に手を加えて見栄えを良くすればもっと売れるよ、と太鼓判を押された。私は佐方さんに頼んでマニュアル本の見栄えを良くして、一儲けを夢見たが、忙しさにかまけているうちにかなわぬ夢となった。

佐方さんとはもっと若い頃から一緒に仕事をして出版しなかった。私の悔悟である。

佐方さん、長い間ご苦勞様でした。安らかにお眠り下さい。

(弁護士・旬報法律事務所)

信念の人——出会いと別れと

石井 次雄

暑さ寒さも彼岸までというが、あの三月一九日はまだ寒く、感傷的になるまいと思いつつも、重い足取りで通夜へと向かった。

葬儀場に着くと、外の寒さとは打って変わって温かく、祭壇に飾られた白い花々に囲まれ微笑んでいる佐方さんが目に飛び込んできた。かくして式が始まり、彼が好きだったクラシックの生演奏が静かに流れる中、かつての同僚や学友・友人らの心のこもった「佐方信一像」が次々に語られると、哀しみはいつしか潰えていった。そして、運動とともに「を信念に生きた佐方信一さんの姿が、徐々に甦ってきた。

出会いとその仕事

佐方さんと初めて会ったのは、一九六六年の一月末頃だった。木曾哲夫代表から正月

明けに、「君同様に、わが社に入りたいという青年が近々訪ねてくるよ」、といわれていた。だが、柳澤明朗編集長と二人で月三回刊の『労働法律旬報』を発行する傍ら、『ドライヤー報告』の刊行をめざし、印刷所にカンヅメ状態だった。そのため、渡辺良夫弁護士と一緒に来社した折には、会うことはできなかった。

後日、印刷所へひょっこり現れ、このたび、編集部に入ることにしました佐方ですと、挨拶された。そして、自己紹介もそこそこに、この仕事に動員されたので、仕事しますと、いつて、翻訳本特有の赤字の多いゲラの校正にとりかかった。

佐方さんは、この『ドライヤー報告』がどのような本であるか、説明するまでもなくご存じであった。入社される前年、日本社会党・鶴園哲夫代議士（鹿児島県出身・元全農林委員長）の秘書をしており、公務員の労働基本権回復闘争をめぐってILOのドライヤー委員長らが来日し、公務員の実情調査について知っておられた。

早速、仕事に取りかかった佐方さんは、この赤字の多いゲラを赤ペンと鉛筆を持ってテキパキと照合し、綺麗な字で朱を入れていったのには、驚いた。実は在学中、『子どもたちのあわせ』（日本子どもを守る会編）の編集を手伝っており、エディターとしての技能も存分に習得されていた。

なお、友人である井之脇寿一さんによると、朝日訴訟や恵庭事件で有名な弁護士の渡

辺良夫先生や日本子どもを守る会の田辺徹さんらとの出会いは、一九六二年の「ナースの声を国会へ」をスローガンにたたかった選挙応援中のことであったという。

佐方さんとの初めての共同作業であった片岡昇・中山和久編訳『ドライヤー報告』は、お陰で予定通り刊行することができた。

佐方さんは在学中にこうした貴重な実践を積み重ねて、入社早々からベテラン編集者の如く活躍された。その活躍の程は、「Ⅵ 主な仕事」に掲載した。この膨大な仕事のなかで、五〇冊は優に超える組合運動史は燦然と輝いている。

労働運動とともに歩んできたわが社は、『英雄なき一三日の闘い』や『みいけ十年』『総評十年史』などを刊行してきた。この伝統を引き継いだのも佐方さんだった。『日本労働年鑑』を刊行しながら、ナショナルセンターや単産、単組、各地方の運動史を手がけられた。北海道から九州まで各地に赴き、執筆の指導から原稿のチェック・校閲、制作までを担当された。どの組合運動史もA5版・一〇〇〇頁を超える大部なものであり、『二〇年史』『三〇年史』『四〇年史』『五〇年史』と、貴重な記録を積み上げてこられた。

佐方さんがフリーの編集者になってからも、教育・環境・福祉などさまざまな事典や医療・社会福祉の分野などで協力していただいた。これらの仕事についても書きたいこ

とは山ほどあるが、同僚の方々に譲って、最後に一言しておこう。それは、何といっても、移りゆく時代状況の中で、いま、何をなすべきかを、佐方さんは常に探求しつづけてきたことである。

企画に取り組むにあたって、その意気込みを次のように書き残されている。

「戦後四〇年を迎えるにあたり、出版界・マスコミ界は昭和史、戦後史の企画が準備され、刊行され始めている。こうした状況の中で、労働旬報社は何をなすべきなのか――。春闘の連敗、社会党、共産党の後退、全民労協の結成という運動の困難な状況下で、『運動のなかの出版社』として何かをなさねばならないこと、運動の状況からみて、営業的見通しよりも社の使命感にウエイトをおいて『社会・労働運動大年表』の企画を提案するものである」。

読書家・佐方さんとの別れ

佐方さんも私も、あの戦争中に生まれ育つたため、戦争と平和について語り合うことが多かった。佐方さんの故郷・坊津をめぐって梅崎春生の『桜島』を論じ合ったのを皮切りに、『ガダルカナル戦詩集』や『真空地帯』、果ては『人間の条件』など多岐に及んだことが思い出される。また、入社された頃は、アメリカによるベトナム戦争がすすま

す激化し、安保・沖縄問題についてお互い企画を競い合った仲だった。

こうした縁もあって、私が横浜大空襲で焼け出され北海道へと集団疎開した体験（『拓北農兵隊』を纏める際にも、途中で挫折そうになる私を叱咤激励しつづけてくれた。なお、三千枝夫人も東京大空襲により両親が「拓北農兵隊」として音更村に入植した体験記、「開拓者の娘としての十三年」を纏められており、佐方さんはそれを送ってくれた。お陰でなんとか自費出版することができたが、佐方さんは入院する日まで原稿を見て下さったが、半分は手術後落ち着いてからだだったようだ。

二〇一八年五月ごろ岩波ホールで上映中の映画『マルクス・エンゲルス』と一緒に観にいったあと、神保町のランチオンで生ビールを飲みながら映画批評など楽しいひとときを過ごした。その頃は元気だったので、猛暑が去り涼しくなったら、また、逢いましょうと約束して別れた。こうして秋口にもなり、また、生ビールでも飲みましょうと誘っても、まあ、ちょっととって、お会いすることは叶わなかった。そこで、いまは何を読んでもおられるのかと伺ったところ珍しく、これはという本がないといわれたので、佐方さんが学生時代によく読んだという堀田善衛について書かれた『堀田善衛を読む』が刊行されたばかりでしたので、お送りした。

程なくしてパソコンで出力したB5版三枚、二〇〇字原稿用紙にして約二〇枚にもな

る長文の手紙をいただいた。文面の最後のほうには、担当医からもう抗がん剤の治療は体力的にできないといわれたと書かれており、病状がそこまで進んでいるのかという驚きとともに、そのような病状にもかかわらず、よくこのような文章を書かれるものだと、大変感銘を受けた。

堀田善衛の代表作である『広場の孤独』は、一五年にわたるアジア・太平洋戦争が終わって、戦後に漂っていた平和と自由の雰囲気を一挙に吹き飛ばし、海峡をひとつ隔てたとなりの国で起こった朝鮮戦争について書かれたものである。ある新聞社を舞台に、そこで働く主人公が歴史の歯車に巻き込まれ、いやおうなくコミットしてしまう中で、どう生きるか苦しむ姿を描いている。

佐方さんも在学中、六〇年安保闘争の真っ直中で、自分はどう生きるのかを悩みつづ、卒業論文を書くにあたっては、この『広場の孤独』に果敢に挑戦したという。

手術後、同僚の小林佑氏と入院先へお見舞いに伺った折、「先生の言うことを聞いて治療に専念すれば、あと、二、三年は生きられる。そうすれば、八〇年を生きたことになり、いい人生だったと言えるのでは」と、語っておられた。

この人生八〇年を見事クリアされて、佐方さんは旅立った。

(元旬報社社長)



久志中学校卒業記念のクラス写真 1954 年
前から4列目の学生の左から2人目(本人)、最前列左から4人目川畑壽先生(担任)、5人目佐方直校長、右から2人目まり子先生

Ⅱ ある日ある時——学生時代

三月一五日に逝つたわが親友

井之脇寿一

佐方さん、お別れの時がきたんですね。

昨年三月、両国界隈の散策、その後の隅田川畔駒形、前川のうなぎは美味でした。翌日の銀座のすしも同様で、この次は天ぷらを食べようということになっていたはずなのに残念です。その時の残り五人で君の追悼ができたらいと思います。

君と出会ったのは一九五九年、六〇年も前のことで、鹿児島奨学会の学生寮（同学生舎）に大学二年生で入ったときでした。君は高校で一緒だった森山君と毛沢東に由来する矛盾研究会を立ち上げ、小生も入れてもらいました。舍生から矛盾が歩いているといわれたのを憶えていましたか。

翌年四月から九月まで二人で寮の自治会の執行部を担うなか同室で起居し反安保を闘いましたね。君には実に多くのことを教えてもらいました。花田清輝、吉本隆明、本多



秋五等がほんの一例です。上田耕一郎、不破哲三ほどのビッグネームではありませんが、ストイックな思想家津田道夫について語ることでできるほとんど唯一の友人が佐方さんでした。

頑健とは決していいない君が八〇歳まで永らえることができたのは三千枝さんの献身のおかげだと思っています。

それにしても共産党が九一年前に大弾圧された（『南日本新聞』「きょうの歴史」

（一九二八年）同じ日、三月一五日に逝くとは、佐方さんも粹なことをすると思いました。

彼岸の存在を信じているわけではありませんが、もしあるとしたら近いうちにお会いできるでしょう。

安らかにお休みください。

二〇一九年三月二〇日

追記

弔辞にしては短く電報では長すぎるので、告別式の会場にファックスしたものです。短時間で書いたにしては、小生の思いのたけが表現されていると思います。後知恵で本多秋五の次に大西巨人を入れるべきでした。二〇年後『神聖喜劇』全五巻上下二段組一八〇〇頁超との格闘を強いられることになったからです。第五巻は八〇年四月二五日一刷、十一月一日六刷となっており、そこそこ読まれているのにほっとしています。

編集の方でつけた肩書は名ばかりで、三年前から高齢で廃業同様です。昨年は胃の手術で現在ひたすら病を養っておりです。弔電で近いうちにお会いできるとしたのは、そういう意味です。昨日（二〇一九年十一月二四日投票）の香港の区議選について、真っ先に佐方さんと話をしたかったのに残念です。

（鹿兒島奨学会学生寮同学舎、弁護士）

同学舎から神田川へ流れた青春

永山 義高

佐方信一君、あなたとは甲南高校で同期だったけれど、言葉を交わすようになったのは、僕が駒場から本郷追分町の同学舎（鹿兒島奨学会学生寮）に引っ越した一九六一年、六〇年安保闘争の翌年からでしたね。

僕らはいわゆる「挫折世代」。岸首相が退陣し池田内閣が所得倍增計画を打ち出すと、あれほど高揚した（と僕には思えた）戦後民主主義は急速に退潮した。街頭デモに参加する程度だった僕でも、大いに戸惑い、悩んだ。民主主義とは何か。歴史に参画するとはどういうことか。労働者とは、市民とは、サラリーマンとは――。

そんな生硬な問いを引きずった学生生活。同学舎生はほとんどが学資不足を家庭教師のバイトで補う中、君は日本看護連盟で参議院の選挙運動のアルバイトをしていた。やがてそこに甲南同期のギシヨ（山下義昭）ら早稲田族が繰り込み、下馬評では

「泡沫」だった看護婦代表の女性候補を、みごと中位当選させた。本部のオルグとなつて全国の支部を駆け巡つた君たちは、実社会の大人の組織や指導者の欠点を目の当たりにして、鋭く批判もしていたが、同時に選挙の実態に嫌気がさした風でもあった。

そんなある日、「論理明快な美しい日本語を読みたい」という君に、僕はわが聖書だった丸山眞男先生の『現代政治の思想と行動』を渡すと、君は完全読破して「感動した」といひながら批判も展開して、丸山教徒だった僕はタジタジとなった。舎生の卒論（東洋史）の清書を、みんなで手伝つたこともあったね。

そんな同学舎に別れを告げたのは東京五輪の前年。君は戸塚警察署に近い神田川沿いのギシヨのアパートに引越し、二人で早稲田卒業の単位を揃えにかかる。

神田川のアパートには先輩後輩の出入りが多かった。ギシヨは客に豚汁をふるまつたが、野菜ゴミは二階の窓から神田川にポイと投げ込む大らかな時代。自分への仕送りを惜しげもなく友のために用立てし、金がないとキリストの如くコタツを背負つて質屋に持ち込み、急場の友を助けたこともあった。

有楽町の朝日新聞本社で週刊朝日記者となつた僕は、給料が出ると神田川に寄つた。君やギシヨを誘つて学生時代は行けなかつたバーで飲み、遅くなると銭湯の終わり風呂に駆け込み、八畳一間に雑魚寝もした。君は僕が担当し始めた作家たち、とりわけ開

高健の素顔を喜んで聞いてくれた。「慰問」のつもりだったけど、結局は君たちの邪魔をしただけなのかも知れない。

神田川暮らしは二年後に幕が下りた。フォークソング「神田川」が大ヒットしたのはその七、八年後。学生時代の同棲の切ない思い出の歌だが、我らの神田川は男所帯の貧乏な長びいた青春——。でも僕はこの曲を聴くたびに、希望と不安がない交ぜになった神田川時代への、強烈な郷愁に誘われる。

へ何も怖くなかつたあの頃　ただ貴方のやさしさだけが怖かつた——と歌詞にある。謙虚な君は「怠けていただけだよ」と笑い飛ばすだろうが、僕はそう思わない。君たちグループは互いに限りなく優しくかつたのだ。家庭問題や経済問題で苦境に立つた友を、君たちは親身になって助け合つたことを僕は知っている。

タフでなければ生きて行けない、優しくなければ生きる資格がない。ギシヨは早稲田大学をウラとオモテ八年やつて退学。ハム会社のサラリーマンになり、子供二人は大学を卒業させ、囲碁を生涯の趣味にゴルフも楽しんだ。むろん佐方君、君も仕事を通じて労働者の側に立ち、誠実にタフに生きた。ギシヨが先に逝つたとき、君の悲しみの深さを僕は垣間見た気がする。自分が卒業してしまつたことに、心優しい君は一抹の負い目を感じていたのではないか。

僕はスランプに陥ると、よく君に長電話をした。ここ数年に限れば、二人にとつての根本問題は、この世界で普遍の理想が見失われていることだった。テレビの時事放談ふうに、安倍総理とトランプ米大統領の未成熟な人格と傲慢を、そして資本主義経済に狂奔する社会主義国の現実を、痛罵、慨嘆して気分を晴らした。

君に誘われて安保法制反対のデモにも参加した。その翌年の夏、がんがステージ4であることを君から聴いて僕は耳を疑った。なんとか甲南高校同期会の傘寿記念大会までは元気でいてほしい。よし、記念DVDを作ろう。高校同期会の六〇年を収録して君に見せたい。そう思い立った僕は、映像資料の収集からバックに流す音楽の選定までの相談を持ちかけた。君は完成したDVDを見て、「ほんとうにいい高校だった、いい仲間だったと思うよ」と喜んでくれた。その一言で僕は全てが報われた気がする。その五ヵ月後に君は旅立った。

やがて、存分に語り合える日が来るだろう。そう信じていた。

(甲南高校八期生、元週刊朝日編集長、公益財団法人開高健記念会理事長)

青春残照——同学舎前後

森山慶四郎

昭和三三年師走も押し詰まったある晩、早稲田大学第一文学部国文学科の一年生となっていた佐方信一が、焼酎一本ぶら下げて私の勉強部屋を訪ねて来た。

私達は三二年春に甲南高校を卒業、佐方をはじめ数人の仲間達と上京、皆早稲田を受験した。そして、全員不合格。まあ、想定の結果ではあったが。佐方を除いて皆東京に残り来年を目指して東京での予備校生活を始めた。

佐方は独り鹿児島予備校に通り努力し翌年春には見事難関を突破、初期の目的を果たした。私は東京残留組の世話役みたいなことをしながら、予備校には登録したもののほとんど出席せず、しかし無謀にも、見栄？　またもや早稲田を受けたものの見事不合格。鹿児島の実家に戻った。

実家では、親父が一攫千金を夢見て新規事業に手を出しうまくゆかず、破産寸前の

状況であることを知り愕然となった。家計の苦しさを察知し、費用のかからない国立を

90

目指すこととし、理数と描き方はいくらか自信もあったので、建築科を目標とし猛勉強を始めた。独りでの受験勉強は、これも佐方から盗み取った方法を全ての科目に適用した。一科目一参考書全ページ丸暗記（余白小文字注記まで全て）。一日の勉強時間一四時間。四月から八月まで五ヵ月間、一日の時間割通り実行した。座りつづけでやっているとな方には腰がいたくなり、伏せた状態でやる。さすがに、秋口の模擬テストなどはいい結果がでるようになった。一二月頃はもうかなり自信が湧いていた。しかし、一方では我が家の家計が日増しに苦しくなっていることも察しながら。

そこに佐方君が焼酎下げてやってきたのだ。二人で飲みながら彼の東京報告を聞く。当時、警職法反対闘争が学生運動を触発している状況で、彼はそのことについて滔々と話す。私は余り強くない焼酎を飲みながら、その弁舌に酔いしれてゆく。どのくらいなを話して酔いつぶれたのか、記憶は定かでない。

翌日、私は天文館の春苑堂書店の大学入試過去五年間問題集の並んでいる書架の前に立っていた。「経済学」を目指すべく東京の国立大学で経済学科のある大学。しかも、マルクス経済学だ。私の能力で合格しそうな、この条件に合う大学学科が一つだけあった。東京教育大学文学部経済学科。教授連は錚々たるマル経の俊英揃い。私の目的に

びつたりだった。翌三月受験。首尾よく合格を果たした。

あの夜、佐方となにを話したのかよく覚えていない。しかし、彼の東京状況の報告を聞くうちに、さらに我が家の経済状況を垣間見る中で、世の中の仕組みを知るには「お金」のことを知らねばならない。この不平等を解決するには経済を学ばねばならないという、極めて短絡的な発想のもとに一夜にして進路を転換した。受験終了翌日から早稲田鶴巻町の佐方の下宿に転がり込み、佐方の紹介だったか京橋の国分商店の缶詰荷造り作業のアルバイトに就いた。自活するしかなかった。

さらに、鹿児島奨学会が運営する「同学舎」に佐方を誘って入舎した。一ヵ月の寮費約三〇〇〇円（二食付き）。鉄筋コンクリート造り三階建て。二人部屋。佐方との同居を希望して寮生活が始まった。マルクス関係の本を読み始めていた私は「盲目蛇におじず」、二人で語らい部屋のドアに「矛盾研究会」なる看板を掲げた。先輩達が珍しそうにドアを開け、部屋を覗く。まもなく、数人の有志で「読書会」が始まった。

読み始めたのが「マル・エン選集」初期マルクスの論文。議論の本身は全く覚えていない。佐方は地道に丁寧に読むが、私は自分に都合のいいところだけを盗み取り、解ったような顔をしていた。その年の秋ごろから「安保闘争」が学生運動の中心に座り、我々も急速に巻き込まれてゆく。私はその年の十一月二七日の国会正門突入を

契機に、急速に左傾化していく。佐方は私の言動に巻き込まれることなく冷静に、しかし、それとなく危惧の言葉をかける。安保闘争は翌年六月に収束。

三井三池争議に参加後鹿兒島に帰り、夏休み中栄養失調の心身症を癒す。九月によく同学舎に戻るが、佐方や同室であった井之脇寿一君とも別れ退舎した。私の憔悴しきった様子に声も出ない表情であった。以後も私を見守ってくれる永遠の友人である。

伝道者は言う。空の空、空の空、一切は空である。（旧約・「伝道の書」より）

（甲南高校八期生、同学舎、採石業）

テレビに映った穏やかな姿

松窪 尉雄

二〇一九年一月のことだったと思う。

どの番組を見ようかとアチコチ、チャンネルを切り替えているうちに、「あれは佐方ではないか？」という顔がテレビに映ったのでした。例の森田先生解説のBS日本テレ

ビの「ゲノム医療とAI」という番組だったと思います。そのうち佐方信一（八〇）と名前が出たので、やっぱりと思って見ていました。具合が悪くて手術を受けたのだと共通の友人より聞いていたので、治験を受けたのだと理解して見ていました。

佐方君とは同じ高校を同期に卒業しましたが、余り接点がなく、彼の高校二年、三年の担任が小生の一年のときの担任で、尊敬してやまない国語の故橋口先生であったということと、太っ腹な彼には友人が多く、彼の大学時代の友人と小生の中学・高校時代の友人達と共通していたことくらいしか思い浮かばないのです。彼を知っている人は同じだと思いますが、一目置くような気分で付き合っていました。

同窓会などで会々と、激しい言葉の応酬があったことを特に思い出します。それが最後の同窓会ときには穏やかな語り口で、「こんな佐方がいたのか」と思うくらい良い表情をしている彼を初めて見たような気がして、「喧嘩にならない佐方も良いものだ」と思ったものでした。

テレビで見た佐方信一君は、あのときのような爽やかな、穏やかな語り口、表情で、これが彼の本質だと思いました。そこで、すぐ手紙を出し、良い機会、良い医療機関、良い医療者に恵まれたことを書きました。それから間もなく訃報を聞いたのでした。

奥様からの原稿依頼の手紙で、最期の様子がよくわかりました。あるいはテレビの取

材に応じた時点では、覚悟はしていたのかとも思います。

(甲南高校八期生、外科医)

気合いの入った友情

竹下 昌勝

昭和三〇年、甲南高校二年生の四月、日本史班に入り初めてクラス違いの佐方を知りました。強い正義感と偏見・差別を極端に嫌う、その性格に惹かれ、すぐに親しくなりました。

昭和三十三年、彼は早稲田大学第一文学部国文学科に入学しました。私は進学しなかったのですが、東京での生活を始めたので、彼とは三日にあげず、毎日のように会っておりしました。彼は大変な本好きで、会うと最近出た注目の新刊書、過去に出版された本で今のこの時期に読んでおくべきものを良く紹介してくれました。私にとって彼は、最高の読書の案内人でした。

一方、民芸、俳優座の公演に行ったり、東宝名人会に落語を聴きに誘ってくれました(志ん生、文楽、圓生、三木助などの名人の咄を聞く幸運に恵まれました)。さらに、上野の美術館や鎌倉の寺院などもよく歩きました。ある年の大晦日、上野の寛永寺の除夜の鐘を一緒に突いたのも、懐かしい思い出の一つです。

昭和四〇年、彼は早稲田大学を卒業し、職に就きました。私も同じ時期に静岡の旧清水市に移り、五年住んだのち鹿児島へ帰り、今日まで鹿児島で生活しています。彼の住む千葉とは離れてしまいましたので、私が上京するか、彼が帰省する折にしか会えなくなりましたが、それでも会えばすぐに元に戻り、大いに飲み、語り合いました。

平成三〇年三月、井之脇寿一君から通院治療中の佐方君を見舞いに行こうと話があり、三年ぶりに上京しました。会った感じでは治療がうまくゆき、順調に回復しているようで、一応、安心しました。そして、三月七日には谷根千を散策し、日暮里駅でまたの再会を約し、固い握手をして別れたのですが、それが佐方との最後になってしまいました。

一年後の三月一五日、永山義高君の電話でその死を知りました。

思えば、初めて会ったときから六四年、彼の深い思いやり、行き届いた親切心、その気合いの入った暖かい友情を思い、感謝の気持ちでいっぱいです。

畏友 佐方信一兄 有難うございました。

（甲南高校八期生）

トロツキストと呼ばれて——ひとこと

皆倉 宣之

私にとって、文京区追分町（当時）にあった鹿児島奨学会「同学舎」は、生涯の中で最も記憶されるべき場所であり、生活の場でありました。それは一九六〇年四月からまるまる四年間過ごした学生時代の全てであり、同時に最も刺激的な学びに溢れていた期間でもありました。当時の同学舎には総勢八四人の学生が居住し、法的には奨学会が管理者となっていました。選挙で選ばれた舎生六人で構成する「委員会」を軸にした、ほぼ完全な自治寮（根幹は「舎自治」）でした。

このような同学舎に入舎するわけですが、そのときの委員会が委員長・井之脇寿一さん、庶務・佐方さんという布陣でした。井之脇さんは大学での自治会活動で忙しくほと

んど舎にいなかったたので、委員会の仕事はほとんど佐方さんが担っていました。まさに黒子役です。

私が佐方さんと親しくなったのは、高校の先輩の井之脇さんと親しかったのが縁で、よく委員会室に出入りするようになったことからでした。それからの付き合い合いと言うことになります。第一印象は、腰が低くて誰とでも気安く話しをする人でした。第二は、煙草をよく吸う人です（深夜に煙草が切れるとあちこちの部屋を「モク、モク」と言いながら探し回っている姿が、いまでも目に浮かびます）。

同学舎での生活において最も印象に残っていることと言えば、六〇年安保闘争時のことです。当時全学連はマスコミの言葉を借りれば、主流派と反主流派（代々木派）とに分裂していて、同学舎内でもそれぞれが二派に分かれていました。

早稲田系は反主流派でしたが、私は森山慶四郎さんと同じ主流派に属していました（入舎時、森山さんと同じ二一七号室でしたが、当時森山さんは、井之脇・佐方派からは半分愛称を込めてトロツキストと呼ばれていて、そのこともあって私もトロツキストと呼ばれることに）。このこととときどき腹をたてて、佐方さんに文句をいうために議論を仕掛けたりするのですが、佐方さんはいつもにこにこしながら強いて反論も持論を押し付けるようなこともなく、じつくりと私の話を聞きながら煙草を燻らせていまし

た。

当時の同学舎は、保守王国鹿児島からすれば対極にあるような村でした。多様な大学の、多様な専門分野の、多様な考え（思想）を持つ、多様な年齢構成の大学生が共同生活をしているので、そのいい側面が満ちていたように思います。とくに文化的側面において刺激が多かったようです。文学を論じたり、演劇論を展開したり、もちろん政治を論じることもありました。その特徴は時間無制限と言うことです。徹夜するというのが学生の特権だったからです。あるとき、佐方さんから井上光晴の『虚構のクレール』を薦められ、読んだことがありました。これを機に、谷川雁や野間宏などへと近づいてゆきました。文学と異なり、演劇はみんなでわいわい言いながら楽しんだ感じがします。一番印象に残っているのは、一九六一年の夏、劇団民芸の創立一〇周年記念公演・宇野重吉演出の久保栄原作「火山灰地」を渋谷の東横ホールまで観に行ったことです。帰りの電車の中でも、同学舎へ帰ってから徹夜でその観劇評やら感想やらを続けました。卒業後も同学舎関係の何かのきっかけがあることにお会いしたりしていましたが、インターネットを使うようになってからは、メールのやりとりで連絡をしあうようになりました。私が仕事の関係で関わっているいくつかの団体や、（図書館に関する）市民運動の団体などへ向けてMLに書いたり、いろいろな情報（ネット上の記事や、テレビ番

組など）や資料を送ったりすることが多かったので、そのついでに同じものをBCCで佐方さんにも送りつけていました。興味がとおりだろうと勝手に私が推測したものを添付で送信するといった形式でした。

するるときどき、「メールは読んでいるよ。ありがとう」という返信が来ることもありました。メールのやり取りの中で深く印象に残っているやり取りがあります。音楽家の吉田隆子についてのものです。二〇一二年の秋、NHKのETV特集『吉田隆子を知っていますか』戦争・音楽・女性』を観て、こんな女性がいたのか、伴侶が久保栄？と、とても驚き、そのことについてメールをしたのです。するととても簡単に彼女のことに関する情報が返って来ました。自分の知識不足を痛感したことでした。

佐方さんの体調が悪くなったことを知ったのは、いつものように濱島敦俊さんの上京に合わせて、本郷か駒込周辺で集まりました（野田・黒田・森山・佐方・皆倉が常連）かという案内の返事に、「ご案内ありがとうございます。当方、夏に大腸がんが発覚し、抗がん剤生活で酒席に耐えられなくなりましたので、欠席させていただきます」という返信によってでした。

それを心配した私からのメールに、「皆倉さん、お見舞いありがとうございます。手術してから半年以上経過し、病気との付き合いもようやく勘どころがつかめるように

なりました。最初は味覚障害で、飯がうまくない、酒がまずい、という状態でしたが、食事は食えるものが身につき不自由しなくなりました。人工肛門ですから面倒ではありませんが、都内に出かけることもあります。(中略)戦後史やら、国民の意識を勉強しています。井之脇さんと戦後史について振り返る機会を持つと先日電話で話したことでした」(二〇一七年二月二十四日)との返信。

これを聞いて徐々に快方へ向かわれているのだなどの感触を得て、安堵の念を抱いていたところでした。しかし、その後の病状の顛末を知り複雑な気持ちでなりません。元気になってまた会おうというメッセージと同時に、先に挙げた二月二十四日付けのメールの末尾の文面、「貴兄も体に気を付けつつ、若いときに身についた社会とのかかわりを続けてください。(佐方拝)」は、私への叱咤激励の遺言だったのではないかと思われるからです。

さぞかし佐方さんはいまの安倍政権の驕り高ぶった政権運営に、危機感を抱かれていたことでしょう。残された者の義務として、あなたの最後のことをばを噛みしめながら、微力ながら社会への厳しい眼差しを持って、歩み続けたいと思います。ありがとうございます。

(同学舎、塾教育研究会代表)

「こずかた」って何のこと

吉田 節子

甲南高校八期生の永山義高さんの合唱コンサートがあるので、同学舎でも一緒だった佐方さんはじめ同窓生一〇人ほどが聴きに行きました。永山さんがニューヨーク赴任中から参加したこの合唱団の名は「紐育男声東京合唱団」ですが、佐方さんに聞いて「紐育」はニューヨークと読むことを知り、七〇人の迫力とハーモニーに感動。その日の演目には石川啄木の短歌を合唱にした曲があり、素敵でした。

「こずかたの お城の草に寝ころびて——」と私は記憶したのですが、印象に残ったのは、出だしの「こずかた」という快い響き。その意味が分かりません。「こずかた、って何のこと」と帰りの電車の中で周りの女性に聞いたのですが、誰もわからない。さすがに佐方さんは、「啄木だから盛岡のお城だと思うよ。でもどんな字を書くのかな」というので、「じゃあ、宿題にしておくね」と、私は冗談っぽく言っただけでした。

驚いたのは二、三日してから葉書が届いたことです。そこには、「不来方の お城の草に寝ころびて 空に吸はれし 十五の心」(第一歌集『一握の砂』に収められている)、と分かち書きされていました。「こずかた」は「不来方」で、盛岡城の別名だったのです。勝手に出した宿題に、律儀に答えて下さったことに私はびっくり。きつと周りの女性たちにも葉書を出したのだろうと、佐方さんの心優しさに感動しました。

上野・不忍池の北に広がる谷中・根津・千駄木、通称「ヤネセン」に、佐方さんのガイドで、いろんなグループで何度か出かけたのも楽しい思い出です。下町風物を訪ねる人気コースより、文学青年・佐方さんが熱心に案内してくれたのは、根津神社を振り出したどる「文学散歩の道」でした。

夏目漱石が『吾輩は猫である』を書いた漱石旧宅跡に近い塀の上には猫の銅像が歩いていました。森鷗外の旧宅は区立の立派な記念館になっていますが、芥川龍之介なども集った文学サロン「観潮楼」跡では、佐方さんの目が輝いていました。そのほか高村光太郎、平塚らいてう、宮本百合子などなど。

不勉強な私を、いつも導いて下さった佐方さん、本当に有難うございました。

(甲南高校九期生)

「三九会」の山歩き・街歩き

成田 勝代

三九会というのは、甲南高校時代、三年九組だったことから名付けたクラス会のことです。関東の三九会は、一九九二年の卒業三五周年同期会の折、男子のクラス幹事だった新保さんが提案し、佐方さんがお世話して、神保町の中華料理店「揚子江菜館」で一九九三年三月九日、鹿児島と同時刻に開くことでスタートしました。

山歩きは一足早く

「同期会でのそれとなしの話の実って、奥多摩にハイキングをしようではないかということになりました。日時は一〇月一八日(日)と、中谷、成田、馬場、古川の四姉が話し合って決めてくれました。歩くコースは鎌倉散策での経験から、なによりも無理をしないことを旨とし、下記のように決まりました。電車の吊り広告を

みていましたら、〈秋を見つげに途中下車〉とのJ.Rの広告が目につきました。いわば小さな秋というわけでしょうが、私たちのハイキングはこれよりひと月後ですから、広告とはちがって、山も川も水の色も、そして空も雲も、秋真つ盛りに違いありません。なるたけたくさんの人に呼びかけて、一日を賑やかに過そうというのが、中谷さんの提案です。ぜひ、都合をつけてご参加ください。」

佐方さんのこの呼びかけから始まりました。

卒業三五周年の同期会は八月横浜で開かれ、二〇〇名を超す同期生が集まりました。私たちのクラスは、先生でただ一人、担任の橋口先生が出席下さり、各地から二四名が参加という盛況でした。

翌日はクラス独自の計画で、鎌倉を散策しました。一日中行動をともした帰りの江ノ電で、長身ですらりとしていた馬場さんの重たそうな姿を口実にして、これからも交流を続けていこう、ただ逢って食べておしゃべりというのではなく、健康維持もかねて山歩きをしないかと、佐方さんから提案があり、みんな賛同して始まりました。

佐方さんは、この頃まではこうした集まりにはそれほど関心をもっていなかったように思います。まだみんな現役で忙しい時期でしたし、現に、この同期会も総会だけの参加申し込みでした。

しかし、敬愛していた先生の出席や、閉会後も去りやらず、会場前の山下公園に繰り出して、深夜まで楽しんだことで、予定を変更して、私が予約していた馬車道のホテルに、同じく予定変更した数人と宿泊し、翌日の鎌倉散策に参加したのでした。

この同期会の会場は「ザ・ホテルヨコハマ」でしたが、参加希望者が初期の予定を超えたため、となりの「ホテルニューグランド」も手配したのですが、地元でどうにかなる人はよろしくということで、私は近くの馬車道のビジネスホテルに宿をとっていたのでした。

こうして始まった山歩き（登山）を改めて振り返ってみて相当なものだと感慨もひとしおです。第一回の御岳・日の出山を皮切りに、奥多摩、奥武蔵、近郊の山々をはじめ、泊まりがけで雲取山や南アルプス、北アルプス、八ヶ岳にも足を延ばしました。そんなときの星空や早朝の景色は忘れられません。

はじめの頃、大貫健介さんが何回かビデオに記録してくれました。たまに大貫さんや八組の昇和美さんが、また鎌倉歩きでは二宮ルミ子さんや私が計画したことがありましたが、ほとんどの山行は、佐方さんが豊富な知識と経験で計画してくれました。

今回改めて案内文を読み返してみると、何度か同じ山に登っていますが、そんなときはコースを変えて、山の魅力を感じてほしい、山っていいよ、一緒に登ろうという思い

が伝わってきて、今更ながらグツとききました。

桜のころは高尾山や浅間嶺、斜面いっぱいにかたくりが群生した御前山、五月は新緑、浅緑、濃緑、薄緑、深緑、黄緑、さ緑と言った表現で、山の素晴らしさを伝えたい気持ちで溢れているのです。

浅間嶺の峠の茶屋で、おじさんに揚げてもらった〈落の臺のてんぷら〉は格別でした。下山時の乾杯は、お酒の飲めない人たちも一緒につき合いました。お風呂や温泉のあるところは入浴し、時には山に登らなかつた人も合流して楽しみました。「佐方さんはこのために山に登っているんじゃないの」と、塩宦和子さんからかわれてしまったっけ……。

鎌倉小町の滑川近くに住んでいた二宮さんの案内で、鎌倉を隈無くといえる程に歩きました。好意にあまえてお酒好きのご主人も交えて食べて飲んでの歓談も恒例になりました。

三九会は当初一三名でスタートしましたが、現在、連絡が取れなくなった人もあり、佐方さんも逝かれて五名となつてしまいました。発足以来三九会は、会場近くの散策をセツトにして街歩きを楽しみながら、何曜日であっても、天気が悪くても関係なく、鹿児島三九会と交信しながら、佐方さんの発病、入院まで一度も中断することなく三月

九日に続けてきました。

この間、三月九日を挟んで、鹿児島関順一郎さんが、大島紬の展示会などで上京することが重なり、彼の人脈で他のクラスの人も参加するようになりました。佐方さんは人を排除することのない人でしたから、クラスという枠を超えて集う会になっていました。

八〇歳を過ぎたこの年齢まで、このような交流が続けられたことは嬉しく、卒業の頃は想像もできないことでした。山歩き、街歩きだけでなく、佐方さんの人脈から広がつた人との交流や出来事、ご一緒したクラシックコンサートなど、私の人生はどれほど豊かになったか知れません（なお、三九会山歩き日程表は「V 遺稿・書簡・その他」に掲載）。

ただただ感謝あるのみです。ありがとうございました。

（甲南高校八期三九会）

青年佐方信一の夢

木場 茂

佐方君とは、鹿児島県立甲南高校に入学した昭和二九年四月の一年生からの学友であります。高校に入学したときから席順がアイウエオ順になっており、前の方の机から井上、木場、佐方、佐藤と続くわけです。

二年生になると選択科目によってクラスの組み替えがあり、二年九組になりました。佐方君も一緒でしたから、席の順も一緒で、こうして三年生まで同じクラスで、席順も木場の次が佐方と呼ばれていたのであります。

実は、私は佐方君の容体がこのように急変するとは、全く予想していなかったのです。彼が大腸がんの手術をして、人工肛門・ストーマを付けていたということは、当初から聞いておりました。しかし、最近では医学が進歩して、「ストーマを付けても元気で活躍している人は何人もいるよ。俳優の渡哲也さんも五〇歳でストーマになり、今

でも元気で活躍しているのだから、頑張っていこう」と、話しておりました。

私たちは高校を卒業した後の集まりを「甲南三九会」と呼ぶようにしました。単純に三年九組の仲間の集まりという名残りで、今でも「三九会」（サンキュー）で通しているのであります。

佐方君は手術をした後も「三九会」を企画してくれ、その集まりでもまったく弱音を吐かない人でした。暫くしてから、「柏の葉のがん研で治療の体験をすることになった」と聞き、詳しいことは知りませんでしたので、「それは良かったね」と安心したのでした。その後も毎年、一回以上は会っていたと思います。

平成三〇年一〇月一三日には、母校甲南高校の「八〇歳・傘寿記念同窓会」があり、約九〇名近く集まり、佐方君も出席し二次会まで付き合いました。私は佐方君が疲れていると思う、二次会の途中で退席し、帰る車中でも治療に前向きな話をして帰ったことを思い出します。

その折、BS日本テレビで「ゲノム・がん治療の現状」という番組から取材され、翌年の一月二三日に放送されると聞きました。テレビでは少し痩せたようでしたが、病状などをしっかり話されていました。がん研の先生の説明では、ゲノム治療の実験で佐方

君のがんには女性の乳がん治療の抗がん剤が効果を發揮し、がんの影が小さくなっていくと説明しておりました。そこで、学友にも快方に向かっていくようで良かったねと、話していたのであります。

ですから、三月一日に電話をして、「今年の〈三九会〉は三月九日にこだわらず、暖かくなってからにしよう」と、相談したのでした。僅か二週間前のことで、このように容体が急変するとは全く考えていませんでした。残念でなりません。

佐方君は高校時代から頭脳明晰で、よく教科担任の先生に質問をして、困らせたことがあります。とくに、西洋史の先生にはきつい質問をして、睨まれていた記憶があります。佐方君は正義感が強いこともありましたが、反面、人懐っこさがありましたから、誰とでも仲良くなれる明るさがありました。それがリーダーシップになっていました。ですから、クラスの皆は良いことにつけ、ややはみ出したことにつけ、佐方君に賛同するのです。

その一例を申し上げます。クラスに野球部の主力選手がおり、夏の甲子園を目指す県大会の、勝てば準決勝に進めるという試合がありました。この試合を皆で応援しようと呼びかけたのが佐方君で、クラスの男子生徒のほぼ全員が昼休み時間から教室を抜け出

し、三キロほど離れた鹿児島鴨池球場に歩いて行っただけです。

しかし、みんなの応援の甲斐もなく敗れてしまい、しかも、学校では大騒ぎになっていました。担任の橋口先生（国文学専攻の真面目な優しい先生）が本気で怒り、大目玉を喰らったのが言い出しっぺの佐方君でした。勿論、男子生徒はみんな担任に絞られましたが……。

佐方君には将来の夢がありました。顔は童顔でしたがオマセなところがあり、三年の夏休み明け頃、「俺は早稲田大学の暉峻康隆教授の西鶴に興味がある。暉峻教授は西鶴の『好色一代女』『好色五人女』など、江戸文学を一番研究しているんだ……」という話をして、私たちを煙に巻いていたことがあります。後でわかったことですが、暉峻教授は鹿児島県の大隅半島・志布志町のお寺の息子さんだとわかり、同じ薩摩ということから、尚更、親近感が湧いたのだと思います。

昭和三十三年、佐方君は早稲田大学第一文学部国文学科に入学したのであります。こうして念願の井原西鶴『好色一代女』の研究に励むはずでした。しかし、私たちが入学した当時は、所謂六〇年安保改定反対闘争の真只中で、大学構内はバリケードで埋め尽くされていました。

そして、翌三五年には国会議事堂にデモをかけた東京大学の樺美智子さんが警官隊に追われて亡くなった事件により、反対闘争は全国的な国民運動になりました。早稲田大学でも学部毎に自治会があり、いろいろな派閥が路線闘争、理論闘争をしている時期でしたから、佐方君もまさにその渦中にありました。

もともと正義感が強く、また、リーダーシップのある佐方君でしたから、黙っているはずはありません。文学部のリーダーの一人として活動することになっていましたから、『好色一代女』とか『好色五人女』なんて甘っちょろい井原西鶴などどこかに吹っ飛んじゃったのが、早稲田大学時代の佐方君ではなかったかと思います。

佐方君の夢の話を続けてみます。

世が世なら佐方君には暉峻教授の弟子となり、その跡を継ぎ、早稲田大学で井原西鶴の研究や江戸文学を学生たちに語り、教えて欲しかった。また、暉峻教授は瀬戸内寂聴さんとも酒飲み友だちだったので、先生が寂聴さんから呼ばれて京都・嵯峨野の「寂庵」に出かけるときに、教授の鞆を持って同行し、一緒に酒を飲んでいたかもしれない。そういう夢を、見ているような今の気持ちです。

でも、時代は佐方君を大変現実的な方向に引きずりこんでしまったのです。今になれ

ば、人の生き方、人それぞれといいますが、もう少し、ほんの少し時代が早いかな、遅いかな違っていったならば、高校時代の夢であつた早稲田大学の暉峻康隆教授の跡を追って、「井原西鶴の研究」を全うできたのではないかと、私は高校時代の夢を佐方君に見ているのであります。

大学卒業後、佐方君は井原西鶴を超越して労働旬報社で活躍してきました。また、大原社会問題研究所を中心に出版編集など大きな課題に取り組み、その活躍、功績は多くの方々から称賛されているところであります。

私は佐方君が高校時代に話した夢のことを、存命中に確かめたことはありません。私も佐方君と同じく八〇歳を越えました。もう少しで彼が飛び立った次の世界に行けると思っています。その次の世界、あちらに行ったときに、「佐方君が高校時代に見ていた夢」のことを、確かめたいと思っています。

ご冥福をお祈りいたします。

(甲南高校八期三九会)

橋口先生の『某月某日』出版のあとさき

大貫 健介

私は佐方君とは甲南高校の入学一年から卒業の三年まで同じクラスでした。高校時代、佐方君は私の住まい（鹿児島市武町）のすぐ近くに下宿していて、よく行き来し、市内を散策したりしていました。とくに城山は、何回も歩き回ったものでした。後年、佐方君が主導して始めた「関東三九会」の登山活動には、当初から参加して、大変楽しい思い出が残っております。

佐方君は五〇歳頃に心臓の病で手術をしていて、障害者でもありましたが、山登りで健康を取り戻し、ほとんど健常者と言っても良いくらいに元気になっていました。

その佐方君がわれわれより先に旅立つとは、本当に考えられなかったことですし、大切な級友を早くに失くしたことは、残念でなりません。

佐方君との思い出は、本当にたくさんありますが、彼の級友に対する細やかな気遣

いや行動は、在京・関東に限らず、故郷・鹿児島在住のクラスメイトに対しても、分け隔てなく接していました。同輩には、ほとんど「君」ではなく「〇〇」と呼びかけ、病気で留年した年長者には、「〇〇さん」とけじめをつけていました。また、三年九組の仲間に限らず、学年の他のクラスにも友達が多いので、私は羨ましく思っていました。また、佐方君は在校時代には学友を誘い、担任の橋口胖先生（高校二年から三年までの担任。旧制京城帝国大学卒・国文学専攻）のご自宅に伺い、奥様やご母堂にもお世話になったことがありました。

佐方君のご尊父は、校長先生を経て（鹿児島県）溝辺町の教育長をなされていたので教師と生徒の関係が、より近くに見えていたのかもしれませんが、それもあってか、佐方君は高校卒業後も橋口先生との交流が続いていました。先生のご母堂が亡くなられたときも弔問に参じたり、折に触れ橋口先生とは情報交換を続けておりました。

甲南高校卒業同期の三五周年同期会が横浜市で開催され、全国から馳せ参じた仲間は二〇五名にもなりました。その同期会に橋口先生も招かれ、三年九組のクラスの懇談会の中で、「先生の個人文書を一冊の本に仕上げましょう」ということになりました。発案の発端はクラスの中谷綾野さんで、この話を引き継いだのが編集のプロである佐方君でした。

橋口先生は、教師時代から「拓本」収集で旅をされたり、若いときから、時、折々の短文・長文を書き留めておられました。佐方君はそのことを聞き及んでいました。彼が中心になって、橋口先生が書き留められた短文・長文を預かり、刊行することになりました。佐方君は手書きの文章を編集するにあたり、ワープロ変換が必要だったので、クラスの間にお願ひし、一部他のクラスメイトにも手伝ってもらい、平成八年二月には先生が付されたタイトルの『某月某日』が上梓となり、佐方君が鹿児島先生の宅にお届けしたのでした。先生は大変喜ばれ、感謝されたことは言うまでもありません。

とくに、佐方君の専門分野であったとはいえ、仕事の合間を縫って立派な本に仕上げられたことは、われわれのクラスのみならず他のクラスからも、羨望の快事として話題になりました。製作費はクラス員に分担を募り、橋口先生のご負担が無くなるよう段取りしてくれたのも、佐方君でした。

橋口先生は他のクラスの間でも、清廉・公平・思いやりのある教師として、尊敬されておりました。佐方君なしでは完成しなかったにも関わらず、先生は本の完成にあたり、佐方君のことには一切触れず、「三年九組の仲間に感謝」とされていたのです。私は先生のお気持ちからして、これはありえないと思ったのです。

おそらく、橋口先生は『某月某日』の後書きの末尾に、「この私本の上梓にあたり、

三年九組・佐方信一君のご尽力があつたことを明記し、衷心より深甚の謝意を表するものであります」と記されてあつたものを、佐方君が自ら削除・編集したとしか、考えられないのです。

橋口先生は、『某月某日』の本が完成したお礼に、佐方君に一幅の表装された「拓本」を贈られました。その拓本は、今も佐方君のご自宅の玄関に掲示されています。この拓本は高浜虚子の俳句で「広ごれる 春曙の 水輪かな」という有名な句です。橋口先生は同じ甲南高校で国語担任の亀之園先生（後に甲南高校の校長になりました）に誘われ、しばしば拓本旅行を共にされていました。しかし、亀之園先生はある時期から拓本旅行に参加されなくなったため、橋口先生単独で拓本旅行を続けられていました。

この拓本は、福岡県柳川市の城址堀大木門の畔^{ほとり}に建てられた「高浜虚子の句碑」（昭和三〇年五月に虚子が柳川を訪れたときに詠んだ句）からとられたもので、虚子が自ら揮毫し、自署したものが石碑となっており、これを先生が拓本にしたものでした。ですから、先生にとっては大変貴重な作品で、橋口先生の佐方君に対する感謝の気持ちが、よくわかるのです。

橋口先生が亡くなられたときも、奥様からの知らせで、佐方君は故郷・鹿児島での葬儀にも参列しました。在郷・鹿児島のごく一部の級友だけしか知らないことでした。

橋口先生との厚い親交は、私たちクラスの人たちが、ないがしろにして忘れていたものを、彼が一人で背負い、皆を代表して引き継いでくれたものとして、感謝の気持ちで一杯です。彼は自分のなしたこと、人にしてあげたことを自慢するようなことは、全く無かったという思いがして、このことを思い出の一番にした次第です。

（甲南高校八期三九会）

（拓本についての補足 木場茂）

一本の焼酎

佐藤 学

佐方君とは高校二年からの付き合いで、卒業してから折にふれてなんとなく交流が続いていたように思います。佐方、佐藤と席順も前後でしたし、彼のやり方につられて良くも悪くも何やかやとやってきましたが、どこか考え方に同じ方向性があったのだろうと思います。

「焼酎佐藤」が二〇〇二年の秋に日本経済新聞の土曜版「NIKKEIプラス1（ワシ）の専門家が薦める焼酎何でもランキング」で一位に選ばれたときのジャーナリストに山同さんという人がいたのですが、その方と佐方君が同業者ということで、よく話をされていたようです。

そのとき「焼酎佐藤」の話が出たみたいで、自分の友人の焼酎だという話になったようです。そのときのことを、さも嬉しそうに私に話してくれました。私は初めて彼が人にいろいろ焼酎のことを話していることを知りました。せっかく良い話をしてくれたので、話だけでなく、ひとつ飲んでもらいたいと思って彼のところに自社商品を送りました。山同さんにも彼から品物が行ったのではないかと思います。

でも、彼からは焼酎を欲しいという話は一度もありませんでした。彼は無心をするような人ではなかったのです。わが社もたくさん品物があるわけではなかったもので、彼の飲む分ぐらいいはあげたいと思いましたが、品薄な状態でしたので、実行できませんでした。

そういう彼が平成三〇年の東京での同期会に一本何とかならないかといって来たのですが、一回は断りました。でも、また電話が来ました。彼も皆に頼まれて仕方がなかったのではないかと思いました。家にあまり品物の余裕が無いのは山同さんあた

りから、聞いていたのではないかと思います。彼は無心をするのはいやだったのではないかと思います。彼はそういう性格だったように思います。そういうふうには思ったので、たった一本でしたが同期会の会場宛に送りました。そのことを彼は本当に喜んでくれて、無理をした甲斐があったと思っています。

彼が亡くなったと聞いて、あのとき無理をして同期会に出てきてくれたのだと思いました。彼はそんな男でした。こんなに早く亡くなるのが分かっていたら、自分のものを減らしてでも何とかして飲んでもらいたかったと、今では思っています。

（甲南高校八期三九会、佐藤酒造社長）

宝物のような体験

中谷 綾野

佐方さんとの出会いは昭和三〇年の高二のときである。進学校の文科コースは女子の多いのんきな組で、授業を抜け出して野球、ラグビーの応援、女子と一緒の妙円寺

詣りなど、校則を破って厄介な組とマークされた。卒業後も、佐方さんの存在が九組の面目を保ってくれたとは、新保さんの口癖だった。

共学とはいえ、男女間の交流は余りなく、中年にさしかかった私たちの体形を見て、山登りをして、おしゃべりしようと提案され、以来、奥多摩をはじめ幾つ登っただろうか。まったくの素人五、六名を率いての大変さを知る故もなく、同級の誼で甘えた至らなさを詫びたい。

一度の事故もなく、ただ楽しかった思い出のみの宝物のような体験であった。佐方さんを喪い、消滅しようとしている「三九会」を惜しみつつ、彼を偲ぶ今日の頃である。

合 掌

山の彼方 先立つ人の 臍にて
水のごと 方円に生き 今日のみ

（甲南高校八期三九会）

久志の海を望む校舎で

鈴山 泰弘

信一君とは久志中学の同級生で、一年から三年生まで同じ組で学びました。久志は、薩摩半島西南の太平洋を望む地で、当時、鹿児島県川邊郡西南方村久志といい、現在は南さつま市坊津町久志となりました。

その久志中学校での担任の先生が川畑壽先生で、科目は英語でした。信一君は頭脳明晰で、テストは一二〇人中、いつもトップの成績で、また、スポーツはテニス部で鍛錬し、川邊郡大会ではダブルスを組んで準優勝するような万能な生徒でした。

三年生のとき高校受験の準備のため、川畑先生の下宿先に、信一君と三窪君（旧姓中迎、久志小学校校長の娘）と三人で通い、午後六時から八時頃まで先生の指導を受けて、成績をあげ、それぞれの希望校へ進学することができ、先生には感謝しております。

高校二年生のときに、鹿児島市内で三人で会って、将来の夢を語らって以来、それぞれの環境が離れ音信不通になりました。しばらく経って、久志に在住している同級生の尾辻孝一君に依頼し、信一君の父上が当時久志中学の校長先生だったことから、本籍を頼りに探して貰い、二〇〇三年二月に松戸の住所が判明しました。それ以来、「久志中七期卒業生旅行」、「関東坊津会」、「南さつま市ふるさと会」等に誘い合って、楽しくお付き合いをさせていただきました。

二〇〇四年五月、中学の修学旅行先であった霧島温泉の国際ホテルで、半世紀ぶりに川畑塾三人が再会できました。

また、信一君の発案で、恩師川畑壽先生をしのび、奥様のまり子先生（中学生時代は音楽担当教師）を囲む会を関東地区在住の久志中七期卒業生六人で、二〇一七年一〇月と二〇一八年五月に実施することができました。

私が二〇一八年一〇月に入院手術を受け、退院した後も、度々信一君からは気遣いの電話で励ましていただきました。手術後の経緯を話したときだったと思いますが、これまで、信一君の主治医はがん細胞をアメリカに送りゲノム検査の結果、有効な抗がん剤がわかり、国立がん研究センターで治療を続けているとの話を聞き、回復を願っておりました。

再会後一六年余りの短い期間でしたが、親しくお付き合いしていただき、すばらしい友でした。来年の東京オリンピックを元気に観ましょう！それが最後の電話となりました。

（久志中学七期生、坊津会）

同期生つていいな

尾辻 孝一

霧島で、横浜で、そして指宿でお会いしたのはついこの間のようで、元気な信一君の姿しか思い浮かびません。全てのものは常ではなく、会ったものはいつかはお別れするとはいえ、寂しい限りで謹んで哀悼の意を表するものです。

信一君との出会いは、お父様が久志中学校長として赴任されたのが縁となりました。慣れない土地ながら、すぐに馴染んでクラスの誰からも好かれていたと思います。当時は一学年三学級あり、信一君とは三年間同じクラスでした。勉強はよく出来たし、

テニスは選手として地区の大会に出場していました。卒業後は高校、就職へとそれぞれの道へ進み、お互いが会う機会はありませんでした。

そして卒業から四五年、還暦を迎え関西在住の同期生から、三重県鳥羽市での同窓会への誘いがあり、参加しました。二年後には大阪の天王寺であり、次回は鹿児島ですることになりました。多くの人に参加してもらいたくて、住所調べをしているなかで同級生の鈴山泰弘君から、佐方信一君の住所を調べてほしいという依頼があり、電話帳の佐方姓に順番に電話していききました。すると妹さんの所在がわかり、妹さんから信一君の住所を教えてくださいました。その後しばらくして、信一君から東京在住の同期生四人と新宿で会い、懐かしい少年時代の記憶がよみがえり嬉しかった、というお礼の手紙が届きました。

鹿児島での同窓会は、「中学卒業五〇周年記念 修学旅行に行こう！」との呼びかけで、中学三年生時に修学旅行で行った霧島に集いました。信一君もはるばる千葉から参加しました。五〇年前と同じ場所集合写真を撮りました。五〇年ぶりに会う同期生も多数いましたが、時間の隙間は一瞬のうちに埋まり、所作や表情は当時の顔に戻っていて、同期生つていいなあと思いました。

後日、信一君から届いた手紙の一部を紹介します。

「(前略) 修学旅行と同じ霧島神宮の鳥居の写真はみんな笑っているではありませんか。気持ちが開放されて外に向かつて交流しあつて、五〇年ぶりとはとても思えない写真だなあと思っています。(中略) 正直に言うとうと五〇年も不義理した皆さまにお会いするのは、心の片隅に少し重いものがあつたのですが、あるいは構えがあつたのですが、この心づかいのおかげで、一五の春までの一生の貴重な経験をたどる糸口を与えてくださったのだなあと思っております。(後略)」

手紙には心のこもったお礼の言葉などが綴られていて、読みながら元氣と励ましをいただきました。

その後の横浜での同窓会、そして最後となった鹿児島指宿温泉での開催にも、仕事で多忙だったと思いますが信一君の参加がありました。指宿では温泉を楽しみ、校歌を全員で合唱し、そのあとの宴会も盛り上がりました。翌日は閉校となっている母校の久志中学校跡地を訪れ、当時を懐かしみました。いずれの開催地でも、夜の宴会での酒類はビールか焼酎で、私もよく知らない鹿児島焼酎の銘柄を信一君から教わり、酒は少しいける口かなあとと思い、嬉しくなりました。

鹿児島での同窓会の後にも、楽しい思い出になったというお礼のハガキをいただきました。信一君からのお手紙は、ボールペンではなく、青いインクの万年筆で書かれ

たと思われるもので、温かみがあり、そこには信一君の人柄がにじみ出っていて、感銘を受けました。

そのうちそちらに行きます。そこでまた、焼酎でも飲みながら思い出話をしましょう。

合 掌

(久志中学七期生、元校長)

「川畑塾」の三人

三窪 良子

佐方信一さんとは、久志中学校二三年の二年間を同級生として、多感な青春時代を過ごさせていただきました。私の父が久志小学校長として赴任したとき、佐方さんのお父上も久志中学校長として着任しておられました。

佐方さんとは、生徒会役員として学校行事でさまざまな出会いがあり、ピアノの購

入資金として学校全体で海藻を採りに海に行き、気分を害し倒れた私を氣遣う優しい方でした。高校受験が迫り佐方さん、鈴山さん、私の三人で川畑先生に英語を習いに下宿先に押しかけて川畑塾を作ってしまう、ヤンチャな面もありました。

川畑先生はその後航空会社の管制官になられ、私たち塾生を鴨池空港（現在は溝辺空港へ移転）でヘリコプターに乗せて下さり、感激したのを思い出します。中学卒業後それぞれの道に進み、長いこと音信不通になってしまいました。

鈴山さんは建築関係へ進まれ、私は幼い頃から慣れ親しんだ邦楽の世界に進み、未だに生徒さん達に囲まれた人生を送っています。佐方さんにお会いしたのは、久志中卒五〇周年記念の霧島での同窓会のときだったと記憶しています。

私は僅か二年間の久志中での生活でしたので、なかなか名前を思い出せず四苦八苦の会話でしたが、二次会翌日のバス旅行と懐かしい久志のことなどを語り合いながら、とても楽しい同窓会として記憶に残っております。二次会で、塾生三人、肩を組んで歌ったことが、昨日のことにように思い出されます。あのときの笑顔が目には浮かびます。

ご冥福をお祈りいたします

（久志中学七期生、錦翔流大正琴代表 錦翔雅紫苑）

テニスで準優勝

小原 道夫

共に八〇歳の道を歩いていたのに突然、君がこの世にいなくなったことは非常に残念でならない。人は早かれ遅かれ私の導きでいかねばならない道がある。今や人生百年時代、君にはもう少しのんびりしてほしかった。

後で話を聞いて、二度の悲しみを受けた。

生きていくには通らなければならぬ、四つの苦しい道程があるといわれているが、しかし、仏には背は向けられない、自分も右か左かそれとも中道か、日々の悩みで生きている。

君との出会いは今から六五年前であろうか、当時一四歳だった。君の両親が教職で転勤されて久志にこられたときだ。現在の鹿児島県南さつま市坊津町久志である。山と海に囲まれた、美しい地で中学の三年間を一緒に学んだ仲間で、芯のしっかりした、

口数が少なく、うまく物事を自分で処理できる人物であった、との思いがある。一年から学校初の軟式テニス部の六人で遊び、活動した仲でもあった。夕方遅くまで部員はコート一面を代わる代わる練習で、道具すべてが学校の部品であった時代でした。

古里にはこれといった娯楽もなく、放課後は、地元の役場の職員や分校の高校生が相手でしたが、おかげで技術も向上し川邊郡の中学校の大会への出場権をとり、君の粘りの戦いで勝利もあり、敗北もあったが、ついに準優勝したのだった。試合後は、恩師の劳いで桜島を目の前にして三人でボートを漕いだ姿を想い出す。その後、君は県内の高校に進学されたと聞いた。久志中学からみれば最高の進学でした。

今や自分も年齢感覚を味わいながら右か左か迷い道。あの頃、古里の同期も夢を抱えて、関西と関東に散っていった。元氣であろうが、昔の話は次の世界で会って話そう。楽しみだ。そのときは昔の名ではなく法名で呼びかけよう、手を合わせ祈っているよ。

想い出を甦らせてくれてありがとう。

昭和一三生まれの古里の友へ。

（久志中学七期生）

Ⅲ ある日ある時——地域から



地域後援会のバス旅行 湯西川温泉の平家の庄
2011年 本人が一番後ろの中央あたり

「共同の子育て」を通して

広瀬 靖子

道路より子どもの背丈ほど高い原っぱのようなところに、プレハブ造りの大きな一室の、上本郷学童保育所がありました（今は上本郷小学校の一隅に移転）。

東側の畑だった運動場に続く明るい部屋は、窓の下、壁一面にランドセルや着替えが入るロッカーが設置され、一年生から三年生までと、OB・OGを含む学童つ子たちが、目の前の小学校から帰ってくる場所としてありました。

昭和五五年、生まれて六年目になったばかりのこの学童保育に、男の子七人、女の子八人の計一五人の一年生が入所し、その中に佐方隆くんがいました。すでに上級生が四〇人ほど居りましたから、働く親が迎えに来る時間までのほぼ半日を、おやつを含めて子どもたちが楽しく安心して過ごすためには、指導員二人ではどうにもならない状態でした。

実は私も八年前から、長女を預けたいばかりに学童保育所を作る運動を続けた母親の一人で、この時期は鈴木のはる先生と二人で、どんな保育内容にすべきか、体当たりしていた時期でした。運営委員会で討議し、とりあえず、アルバイトの若い先生に来ていただきました。が、保育所の運営と、子どもの保育内容のさらなる向上のためには、安定した指導員を考える必要がありました。

保育内容は、他の学童保育の指導員との交流等で得たドッジボール大会や風の子祭などとともに、竹馬、ざりがに捕り、合宿、餅つきなど屋外を中心の多彩な行事と、百人一首や竹細工、けん玉、イナゴの佃煮づくりやクリスマスケーキ作りなど、部屋の中で出来る実用を兼ねた遊びを編み出し、子どもたちと、ときには父母も加わって、夢中になって楽しみました。

竹馬は地主からいただいた手頃の孟宗竹を、子どもたちそれぞれの背丈に合わせて切り、足場は、子どもの背丈と上達度に合わせて位置を決める方法を取り入れ、上達すると段々高くなりました。ある日全国版の「子ども新聞」に写真入りで紹介され、前日まで乗れなかった子もしっかり乗って写っていました。

百人一首は、当時小学校でも取り組んでおり、クラス対抗競技会などでは、学童つ子が上位を占めることもままありました。それには訳が二つありました。一つは、入

所すると、子どもの持ち歌を決め、ひらがなで短冊に書き渡しました。例えば隆くんの場合、

おとにきくた、かしのはまのあだなみはかけじやそでのぬれもこそすれ

です。「高師の浜」を含む歌の意味はわからなくても響きから自分の歌になり、卒所るときはあらためて短冊に書き記念品のひとつにしました。もう一つは、持ち歌があると、これだけは誰にも取らせないとする気持ちが湧き、中には、百首全部を暗記する子もいました。自分の札だけではなく、好きな歌をどれだけ取れるかと目を輝かせたものです。

こういう学童保育にも悩みは尽きませんでした。財政難から、指導員探しや土地の契約更新等々難しい問題がたくさん生まれました。そんなとき、地域ごとに班を作った父母会でも課題となりましたが、簡単には結論が出るものでもありません。討議にならないほどシーンとした日もありました。それでも、家庭からの報告などでは、家族ぐるみでの百人一首の取り組みなどが話題となり、段々口を開き、目が輝く父母が出てきました。

この頃、いろいろな行事に静かに参加し、合宿に仕事場から飛び入り参加したのが、佐方信一さんでした。

難しい課題などで議論が分かれると、独特の笑顔で、シニカルな話題を提供して場を和ませてくださいました。私たち指導員の立場も理解して下さり、父母ともども信頼が生まれ、和気藹々のうちに皆でひとつの行事を執り行うことが出来ました。

すぐに、運営委員長と父母会長に推され受けていただけました。仕事疲れの父母の眠っているエネルギーを、子どもたちのために出来ることで生かし、学童のテーマである「共同の子育て」という形で、精一杯、楽しい子育て、親育て、指導員育てとなっていました。

佐方さんには、子どもたちも親たちもいっしょによく山に連れて行ってもらいました。今もどこかにニコニコ立って、山行きの旗を振っているのではないのでしょうか？ 佐方さん、ほんとうにありがとうございました。

（上本郷学童保育所元指導員）

学童で楽しかったよ

鈴木のぼる

私は「学童はいくは大きき」という童話を書いたことがある。その中で、「小川先生がそつと『今ね、天使をのせた馬車が虹をわたつているところよ。馬車が虹の橋をわたり終えると虹は消えてしまうの。天使が通り過ぎないうちに願いごとをすとなうのよ』、といった。はなたれ小僧のタカシが何かお願いしたあと、大きな声で『ああ、ぼくは生まれてきてよかった』、といった」がある。この日は大きな二重の虹が出たのだった。

このタカシは勿論、佐方さんのご子息の隆君である。これは隆君が小学一年生のときの実話を童話にした部分である。

先日のお葬儀のとき、隆君は忙しそうにしていた。話をする機会がなかったことが残念だったが、立派な大人になられていた。

佐方さんは、学童保育所の役員を長年務めてくださった。とても楽しかった記憶が残っている。子どもたちと行く合宿のための実踏（下見）を一緒に行ったことだ。奥多摩、鳩ノ巣、秋川など学童っ子を楽しませるために奮闘した。あの頃の父母会（保護者会）の皆さんは、どうしておられるのだろうか。

佐方さんとの一番の思い出は、上本郷学童保育所創立一五周年記念文集『風の子』の編集をしてくださったことだ。二七二頁にもなる文集が完成したのだ。佐方さんのご指導なしでは、この『風の子』は誕生しなかった。いま、この文集を手元に置きながら書いている。この文集に載る三千枝さんの文を紹介して終わりにしよう。

「苦しい時、困ったとき声をかけあうというあたたかい行動と励ましがなかったら、学童の本当の素晴らしさを知らないまま、味気ない人生を過ごしたかも知れない。このことは一人の親子の問題にとどまらず『共同の子育て』の課題となった。学童は指導員も親も子も一緒になっての、みんなの真剣な知恵と努力で息づいていった。さすが上本郷学童！」

佐方さん天国でお会いしましょう。

（上本郷学童保育所元指導員、オカリナ作家）

学童ばかりの追憶

深山しげみ

今から三十数年前の昭和五七年春に佐方さんが会長になられたとき、副会長の役を引き受けることになりました。そのときのことや、三役会議のことをつづった文を、上本郷学童保育所創立一五周年記念文集『風の子』に載せていただきました。

昭和五七年三月のある日、佐方夫人が、当時、私たち家族が住んでいたアパートにみえました。そして、「折り入ってお願いがあるんだけど、次期の副会長を引き受けていただけないかしら。会長はうちのお父さんがやることになったのだけれど、今までの流れを知っている人が一緒にいてくれたほうがいいと思うので」とのこと。その一年前、私は運営委員の一員として合宿実行委員として、主に学童保育の父母活動にかかわってきたからでした。

それがきっかけで佐方さんと一緒に、上本郷学童保育所の運営委員会の役員として活動することになり、月一回程度開かれる運営委員会定例会議でお会いすることになりました。そして、さらに運営委員会の一週間程前には、会長、副会長、事務局長の方たちと三役会議が開かれました。この三役会議は、主に佐方家をお借りして、仕事を終わらせて帰宅後の夜に開かれ、仕事の疲れが残っていても、こと学童のことになると、熱の入る「学童ばかり」が集まっていたのかもしれない。

検討する議題は毎回数項目あり、一つの項目に時間をかけすぎても他の項目を端折ることはなく、誰も途中で「もう終わりにしましょう」とはいい出ませんでした。翌日の仕事のことが脳裏をかすめても、それは瞬時のことで、学童保育を通じて、会議の折々には、社会情勢やいろいろなことを教えていただきました。

また、奥多摩の山にもよく連れて行っていただきました。子どもたちに、一つのことをやり遂げるということと、やり遂げたときの達成感を教えるのにはいい機会でした。子どもたちが大きくなってからは大人だけの登山で、少し肩の荷を下ろして束の間に味わう解放感でした。

このようにして、学童保育の活動を離れても、いつのまにか、OB会と称して佐方さんを中心に飲み会ができていました。「そろそろみんなで集まらない？」という掛け

声がかかると、仲間に電話で呼びかけをするのが私の役目でした。もうそれもこれからはないのでしょいか。寂しくなります。

佐方さんのことだから、おいしいお酒を飲みながらみんなのことをみていてくださることでしょう。お酒はほどほどにしてくださいね。

（上本郷学童保育所元運営会副委員長・父母会副会長）

心臓病を抱えながら

草野 文喜

佐方さんとの出会いは、学童保育（小学校低学年の放課後の保育をする所）でした。すでに佐方家の隆君は卒所しOBとなっていて、私の子どもが一年生に入所した夏の合宿のときでした。夜の父母交流会でお話しました。

学童保育の活動そのものは一緒にしたことはなかったのですが、その後の記念誌等の編集などに協力、アドバイスを受けました。本職でもあり貴重な意見、方法と大変

助かったことでした。

また、奥多摩には何回か誘っていただき学童仲間と楽しい山登りをしたものです。それから数年に一度くらい学童仲間の飲み会があり、呼んでいただきました。そのときは鹿児島本場の焼酎を持参してこられ、鹿児島での正しい焼酎の作り方を教わったものです。

普通はあまり行き来がありませんでしたが、さらに近付けたのは「病氣」です。私は四七歳のとき心筋梗塞になり、大変な思いをしました。佐方さんは人生の先輩ですが、この病氣は私が先輩でした。あるとき佐方さんから電話があり、体が少しおかしいということいろいろ話をしていると、その病状に思い当たり「すぐ病院に行かないとだめだよ」と強くいいました。

結果は、私と同じ心筋梗塞ということでした。

当時、私も何度か入院を繰り返しており、あるときは偶然にも同じ病室になり、お互いに励まし合い、楽しい入院生活（？）でした。退院してからも一緒に散歩をしたり、図書館に行ったり、リハビリに励みました。

私も佐方さんも仕事についてはあまり多く語りませんでした。後でいろいろお聞きし、労働運動に関し相当勉強されたのではないかと、自宅にある相当数の資料等か

らも実感しました。もしかしたら大学に残り、学者になっていたのかなと思ったりしました。

博学で物事を冷静に見つめ、広い視野からの話には多いに共感するところがあり、まだまだ長生きし、いろいろと話をしてみたかったです。

今までのお付き合いありがとうございました。

（上本郷学童保育所元運営委員長・父母会会長）

地域における「暮らしの相談会」

伊藤 猛

私は六〇歳で定年を迎えてから、地元で活動するようになり、佐方さんとの交流がはじまりました。三〇年間、中小企業の営業と生活を守る「民主商工会」の仕事に就いていたこともあり、佐方さんと相談して、地元でいろいろなことで悩んでいる人があるのではと、「暮らしの相談会」を定期的に開こうと思ったのです。

仲間に協力を求め、毎月第三土曜日に、地域の市民センターを借りて、毎回一〇〇〇枚のチラシを配り、実行しました。相談の内容は、医療問題、ヤミ金対策、相続、借地借家問題、子どもの保育、労働問題、介護、道路問題、国保の分割納付等多岐にわたりました。

当初の相談数は四〜五件と多忙を極めました。とはいっても、行列が出来るわけではなく、相談者ゼロの日もあり、そんなときは、粗茶を飲みながら交流を深め、相談会の思い入れなどについて、互いの理解を深めることが出来ました。

こんなこともありました。

持ち家のある方が生活保護を受けることになり、市役所への交渉に何度も丁寧に対応した佐方さんに、「私も仲間に入れてほしい」という嬉しい申し入れがあり、仲間に迎え入れた事例もありました。

佐方さんの温厚な対応と、反権力をつらぬく一途さは、解決をリードしてくれた上に、相手の方にも喜ばれたことを知り、正直良かったと思いました。

この相談会は九年、九三回を数え、地域の悩み解決に役立って来ました。今、佐方さんの参加が失われ、この相談会が終了したのが、何とも残念に思います。

（元民主商工会勤務・地域後援会員）

安心感をいただきました

野口 靖子

佐方さんには馬橋八ヶ崎後援会の活動の中で大変お世話になりました。後援会の役員会ではいつも、にこにこ前向きで楽しそうでした。新年会、花見、旅行など計画しました。役員会の話し合いで私が最も感心し、その後の私の信条にもなっていることがあります。それは、総会の原案についての考え方です。「今年の目標なんて、そんな難しい会じゃないんだから簡単でいいのよ」「後からどうにでも肉付け出来るでしょう」と柔軟性のある内容にしていきました。「なるほど！ 緩やかな組織では緩やかな決めでいいんだ」と納得しました。

また、地域の住民相談会を月一回開くことになりました。私は教育関係の相談者に対応するという事で毎回準備していました。馬橋地域にチラシをまき、佐方さん、伊藤さん、私と三人で相談者を待ちました。しかし、残念ながら相談者はほとんどあ

りませんでした。お茶を飲みながら談笑したことが懐かしく思い出されます。

もう一つ、私たちがお世話になったことがあります。一〇年ほど前に地域に「しなやか」という女性の親睦会を作りました。編み物をしたり、お出かけしたりしていたのですが、あるとき「谷根千」の見学ツアーのガイドを引き受けてくださいました。根津神社をスタートして、このあたりの文豪の旧宅など詳しく、楽しく案内してくださいました。

そして、さらにある時はバスをチャーターして奥多摩に出かけました。奥多摩の山には何度も訪れたことがあるようで、懐かしそうに車窓から見える山並みを眺めながら、山の話を聞かせてくれました。こうして、出来たばかりの女性の会を盛り上げてくださいました。

佐方さんは周りの人に安心感を与えてくれた方でした。どれだけ精神的に助けられたかわかりません。今でも何かに悩んだとき、ニコニコ顔で「そんな風に考えなくても、大丈夫よ、ハ、ハ、ハ」といわれている気がします。もつと、もつと教わりたいことが沢山ありましたが、残念です。ありがとうございました。

（地域後援会員）

「国道に信号」を

生方ヤス子

二〇一三年六月に、地元の人から共産党の山口正子松戸市議会議員に、「国道六号線馬橋弁天歩道橋は急な階段で高齢者には大変で、自転車やベビーカーも渡れる設備がなく、そのため車の通る隙間をぬって渡る人も多く、事故も多発しているので信号設置に協力してほしい」、との相談がきました。

早速、現場を見て地元の方々から生の声を聞き、「馬橋弁天歩道橋下に信号と横断歩道の設置を求める会」を発足させました。

地元町会の方と市議、県議を含めた世話人会で取り組み、事務局を佐方信一氏が受け持つことになりました。

地元の町会が回覧板を通じて集めた署名を持って、皆で松戸市議会、警察署、交通課と千葉県や県警への要請活動を行い、また、一月末には寒風について、交通量調

査を朝六時から夕方六時まで実施し、佐方さんも道路際の椅子に座り、危険な実態を明らかにしました。

年が明けてから、松戸市の担当課長に現場調査にきてもらい、集まった四〇名以上の住民が直に訴えました。こうして、数年かかるといわれた信号機の設置は、一年たらずに実現することができました。

三月二六日にはその祝勝報告会を開き、事務局を担った佐方信一氏の一〇頁にわたる資料をもとにした報告に、参加者一同喜びあいました。

佐方信一氏は縁の下の方の力持ちの役割を果たしました。住民の気持ちを大切にしながら、しかも面倒な細かい九回にわたる世話人会の議事録をつくり、活動がスムーズにいくように配慮しながら、この運動を進めてくれました。この活動は、いま交通不便地域にコミュニティ・バスを走らせる会につながっています。

病気後も、「動けないのにこんなこと言うのは悪いけど」といいつつ、的確なアドバイスをいつもしてくれました。いま難しいとき、佐方氏ならどんなアドバイスしてくれるかなと思います。偲んでいます。

（地域後援会員）

ま、やってみるか

吉田 成助

ずいぶん昔のこと。

東京から松戸に移ってきて驚いた。三人の中年活動家が朝から深夜まで駆け回っている。この頑張りで歴代県議・市議を連続当選させてきたという。すごいと思った。だが、僕にはやれそうもない。困って相談した相手が佐方さんたちだった。

「皆で少しずつ手分けしたら」と提案したがムリムリという。では、全員から「アンケート」をとってみてはと提案したが、完全無視。最後にやっと佐方さんの「ま、やってみるか」、の一言で救われた。アンケートは、

「私がやれること・やれないこと」

「都合のいい日・悪い日」

「その理由」

という超簡単なもの。

集約したら、本人病氣、寝たきり両親の介護、深夜勤務、パートのかけ持ちなど、厳しい生活事情が浮かんできた。やる気はあってもやれない「事情」があったのだ。

早速、都合のいい日・いい時間を軸に「班」を組み替えたら、とたんに出席率が跳ね上がった。「みんなに会えて元気をもらった」「話を聞いてくれてありがとう」と返事がきた。

これをステップに、ビラ配布区域・担当の再編、電話台帳、詳細地図、後援会ニュース、拡大訪問など、手分けしての組織的活動がすすみはじめた。

佐方さんの「ま、やってみるか」の一言が、すべての出発点だった。

佐方さんは酒を愛し、よく一緒に飲んだが、困ったクセがあった。意見一致で嬉しくなると、「お前はほんとに馬鹿タレだ」と頭をボカリと殴り、ハグをするのだ。

はじめは面食らったが、繰り返されるうちに、これが佐方流「薩摩男子友情表現」だとわかった。

僕は八七歳。もうすぐ佐方さんに会う。二人はまっすぐに生き、頑張ってきた。不満はないが、ひとつだけやり残したことがある。

それは佐方さんに、「お前さんの方こそホントの大馬鹿タレだぜ」とボカリ一発食ら

わせ、力一杯ハグすることだ。

（元東京地評常任幹事・東京国公共闘副議長・地域後援会員）

本当の知識人に会えてよかった

澤田 勝雄

二〇年前、松戸市八ヶ崎に引っ越して初めて佐方信一さんに会った。その後、様々な集まりで顔を合わせる中で、「この人はホンモノのインテリだ」と思い、ずーと続した。その合わせ鏡になったのが、「決してえばらず」の姿だった。

私が団体の新聞記者として、各界の方に取材し記事にした。その仕事をいつも、「大切な行為です。人の心を打つことで社会変革の力を引き出す」と、語ってくれた。有馬頼底（京都・相国寺住職）、ドナルド・キーン（日本文学者）、金子兜太（俳人）、内田康夫（推理作家）、野村万作（狂言師）ら著名人が登場する毎に、「いい仕事しているね」と励ましの言葉をかけてくれた。

また、私が手伝っていた雑誌『治安維持法と現代』（年二回刊）が発行される毎に、購入され、感想を述べてくれた。

地域の後援会メンバーと関東近県を一泊旅行したときも、「旬報社で出版・編集する折、この旅館にカンヅメにして大学の先生に原稿を書いていただいた」とか、「わが社もいまでは子育て・教育書がかせぎ頭になってね。かつての労働組合教科書づくりは後退して……、時勢かね」と、つぶやくような回顧話も聞くことがあった。

私が詩吟を習い、「新年のつどい」で漢詩「京都東山」や「楓橋夜泊」を披露したとき、つぶやくように、「何か違うんだが……」と口にした。私にもいつもこの一言がついてまわった。

そして、ついに「民衆の心、平和をうたう」民主的な詩吟団体「新興吟詠会」を知り、一九九八年一〇月、東京支部を旗揚げした。発会式そして例会で、「憲法九条」を大合唱できた。その吟を佐方さんに聞いていただく機会がないままになった。実に残念だった。ぜひ、感想を聞きたかったが……。いまでは「原爆行」や峠三吉「人間をかせせ」を加えて、首都の空に響かせようとしている。

佐方さんの口惜しさを胸に前進します。

（ジャーナリスト）

IV
ある日ある時——うからの一言



佐方家の甥と姪たち 1995年 重富の実家で



見舞いに来た妹と弟 2017年 枇杷亭

兄との想い出

加藤 明子

遠い昔の記憶です。兄も私も少年少女と呼ばれる年頃になった頃のこと。兄は小さな村を仲間と飛び回って遊んでいました。庭に雀が集まると、ザルで罌を作って巧みに捕まえたり、みんなで風揚げをしたりして楽しんでいました。

風は当然自分たちで作っていました。冬になると竹を切ってきて、小刀で削り、骨組みを作り、それに障子紙を張り、さらにバランスを考えながら糸を付け、いよいよ風揚げです。

あるとき、風があまりにも上がりすぎ、糸が切れてどこかへ飛んで行ってしまいました。兄たちは、「こっち、こっち」と叫びながらどこまでも風を追いかけていきました。しばらくして戻ってくると、「あの木は高いから取れなかった」と残念そうに話していました。それでも、「また、作ればいいが」といつていた姿が、懐かしく思い出

されます。

丁度この頃、末っ子が生まれました。寒い頃でした。床に臥せていた母が、私に「ご飯を食べさせて」といいました。いつもと様子の異なる母にびっくりしてしまった私は首を横に振り、動くことができませんでした。それを見ていた兄は、黙って立ち上がり、茶碗をもって母のもとへ行き、母にゆっくりとおかゆを食べさせ始めました。私は、ただ見ていることしかできませんでした。今になって思うと、母は生まれたばかりの妹にお乳をやらねばならないという一心だったのでしょうか。母に申し訳ないことをしたなあと思います。そして、頼りになる兄だったなあと感謝する思いです。

そんなことがあつてしばらくして、兄は高校進学のため鹿児島市で下宿生活を始めました。休みになると帰省し、下宿生活のことや学校での出来事などを楽しそうに話してくれました。友人と楽しい学校生活を過ごしていたことが伺えました。兄の葬儀のときに、別れの挨拶をしてくださった方々の中に、兄から聞いていた友人の方の名前を見つけたときは、感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。

大腸がんの発病以来、三千枝さん、隆君、由紀子さんをはじめそばにいてくださった方々は、いろいろな心配し大変だったことでしょう。

主治医の先生を信頼し笑顔で元気で病氣していますとの心境になってくれたこと、心から尊敬します。じたばたするなというのは、お父さんの教えだったものね。

兄ちゃん、いろいろとありがとうございます。

(妹)

一四歳年上の兄

白石 京子

長男の信一兄と五番目末子の私とは、一四歳の年齢差があります。物心がついた頃には家に兄の姿はなく、私は、信一兄がどんな兄であるかほぼ知らない妹でした。そんな私を見かねた亡き母が、兄について話してくれたことがありました。それは私が生まれて間もないころの出来事でした。当時家族は、鹿児島県の南端枕崎のさらに南端の久志に住んでいました。当時は、台風の通り道になりやすい地域でした。台風が接近し、父は学校へ見回りに。残された家族で台風対策をすることに。風雨が激しさを

増し、いよいよ家族で避難せざるを得ない状況になってしまいました。信一兄、明子姉、弘一兄、寛行兄、そして母と乳飲み子の私。中学生の信一兄は、父に代わり家族を避難所に先導してくれたとのこと。

これは兄に対して、ドラクロアの自由の女神の如くのイメージを私に抱かせるエピソードとなりました。

とはいえ、兄と会う機会はほとんどなく、会っても話すチャンスもなく、生身の兄を理解することはできませんでした。兄にとっても、私は理解不能の妹だったらしく、私を「新人類」と呼び、あきれたり、怒ったりと手に負えない様子でした。それでも、高校の修学旅行のときは、自由時間に帝劇でマノンレスコーの舞台を見せてくれたり、大学のときは、長野の宝剣岳に連れて行ってくれたりしました。

就職試験は、鹿児島県の教職のほかに、神戸市と東京都も受け、兄の家にお世話になりました。現実認識の甘い妹の言動に不安を覚えたのでしょう。都会の厳しい現実を話す兄の厳しい目が怖かったのを覚えています。

二三歳で結婚したときは、もうそんな齢になったのかと驚かれ、長女を出産したときは、子どもが子どもを産んだなど笑われました。兄にとって私は、いくつになっても一四歳年下の幼い妹だったのだと思います。

隆君の結婚式の後で、姉と私は、箱根や鎌倉、横浜中華街、東京の銀座へと連れて行ってもらいました。寛行兄も同行してくれて、兄妹での楽しい思い出となりました。この頃になると、兄に怒られることは少なくなっていました。

信一兄は、鹿児島での慶事や法事には欠かさず来てくれました。そのたびに、姉と私に「申し訳ない」と口にしていました。長男として思うところがあったのだなあ、信一兄らしいなあと思うことでした。この頃には、怒られるどころか、感謝の言葉をもたらすことが増えました。

三千枝姉さんから、信一兄の容態が芳しくないことを聞き、姉と上京しました。病院から一時帰宅していた兄は、小さくなった感じでしたが、笑顔で迎えてくれました。兄の枕もとにいたとき、兄はじつと私を見つめ、「京子ちゃん、大きくなったね」と、突然の一言に一瞬沈黙が。やがてみんなから、笑い声が起りました。私にとつては、最大限の賛辞でした。

命の最後の一瞬まで誠実に生きた信一兄。ともに過ごした時間は少なかったけれど、大切なことをたくさん教えてもらいました。信一兄ちゃん、有難うございました。

(妹、教員)

信チャン、ありがとう

菅沼チイ子

信チャンとの三度の出逢いは、どれもとても幸せな時間でした。たくさんさんの想い出をありがとう。どうか安らかに……。

従兄弟の信チャンと初めて出会ったのは、私が五歳、信チャンが三歳の頃でした。祖母の家で「エイ、エイ、エイ」と大きな声で叫びながら刀を振り回し、元氣よく部屋の中を駆け回っていた姿をとて鮮明に記憶しています。ですから、信チャンを思い出すときは、真っ先に刀を振り回していた姿が頭に浮かんできます。

それから大分時間が経った頃、私が坊津高校に入学した年に、信チャンのお父さんが中学校の校長になられて隣の久志中学校に赴任してこられたんですね。このとき信チャンのお父さんは四二歳で、鹿児島県で一番若い年齢で校長先生になられたと聞いて、私にとつても自慢の叔父さんでした。

久志にある玉川高校と坊津高校が年に何回か野球やバレーボールなどの対抗戦をしていた関係で、私が玉川高校に行ったときは、久志にある信チャンの家に寄らせてもらって、叔母さんにお昼御飯を御馳走になったものでした。でも、残念ながら信チャンは学校に行っている時間だったので、会うことはできませんでしたよね。

高校卒業後上京して何年か経った頃、何がきっかけで再会したのか全く覚えてはいません。ただ、信チャンが早稲田大学に通っていた頃は、学生運動がとても盛んな時期で、信チャンも理想に燃えて、とても輝いて見えました。そんな信チャンを見ると、頼もしく幸せな気持ちになりました。その後、何回か会うこともありましたが、いつの間にか疎遠になっていきましたね。

私の方も、結婚、出産、育児に追われ、夢中で生きてきました。中年になった頃、関東坊津会を立ち上げてくださった方たちから声をかけていただき、やっと故郷へ関心が向くようになりました。両親や兄弟をはじめ、ご縁のあった方々のことを思い出す機会が増え、「信チャンはどうしているかな」。信チャンに会いたいなあ」と、再会を切望するようになりました。

そのうち、関東坊津会の役員に推薦していただき、今まで面識のなかった同郷の方々とは知り合う機会が増えました。久志出身の方にお会いしたときは、信ちゃんのお父さ

んに当たる久志中学校の「佐方校長」の消息を尋ねていましたが、一向にわかりませんでした。消息がつかめないまま何年も経ち、もう諦めかけていた頃、たまたま役員会で鈴山泰弘さんと出会い、いつものように「佐方校長」のことを尋ねると、「知っていますよ。息子の信一君は僕の幼馴染なんですよ」という返事が返ってきたのです。そのときの感激は、今でも忘れることができません。会議が終わり、部屋を出るとすぐに鈴山さんが信チャンに電話をかけてくださり、信チャンと何十年ぶりか話したのですが、第一声を聞いた途端すぐに「ああ、信チャンだ」と、一瞬で昔に戻ったように感じ、嬉しさがこみ上げてきました。

さっそく、福岡に住む私の妹へ連絡し、次の「関東坊津会」のときに三人で落ち合う約束をしました。当日、信チャンと再会した時、何故か初めて祖母の家で会ったときのことが思い出され、とても懐かしく、幸せな気持ちでいっぱいになったことを、昨日のことのように思い出します。

そして数日後、信チャンが私と妹を連れて横浜の観光名所を案内して廻ってくれました。三人とも会えなかった何十年というブランクを埋めるかのようにさまざまなことをたくさん話しましたが、話が尽きることはありませんでした。いま思い返してみても、本当に楽しい時間でした。

その後も折に触れ、音楽会や映画へ一緒に行ったり、食事をしたり、「関東坊津会」で会ったりして、たくさんのお出をもらいました。

再会後にまたこんなにも仲良くなれたのは、信チャンが優しく、少しも威張らない尊敬できる人格の持ち主だったことも、大きかったと思います。早稲田大学を出て、物書きをしていましたが、私たち姉妹に接する態度はずっと変わらないままでした。私はそんな信チャンが本当に大好きで、自慢の従兄弟でした。

もっともつと長生きをしてもらいたかったという想いは、いまでも消えることはありません。信チャンに貰った素敵な想い出は、私にとって大切な宝物です。

信チャン、本当にありがとう。

どうか安らかに眠りください。

（母方の従姉妹、関東坊津会）

優しかった、いとこの信ちゃん

村上久美子

お互いが七〇歳のときに東京における鹿児島県人会で、四八年ぶりに再会できて何よりでした。姉が県人会の役員をしていたので、忙しい信ちゃんに頼んでくれたらしく、私が泊まっているホテルまで迎えに来てくれました。

四八年ぶりだったのでお互いに顔も分からず、やっと分かったときは、懐かしくてとても嬉しかったです。ずっと前から会っていたかのように話が弾み、会っていなかった年月は全然感じられないほどでした。やっぱり、いとこだなあと実感しました。

県人会では席も一緒に、いろんな話をたくさんしました。東京に行ったとき、姉にどこか行きたい所があるかと聞かれ、横浜へ行ってみたいと話したところ、思いがけず信ちゃんも一緒につきあってくれて、私が大好きな「赤い靴をはいた女の子」の像にも案内していただき、感激しました。その他にも、信ちゃんが下調べをしてくれて、

いろんなところを見させていただき、とても楽しい忘れられない一日でした。

今度は鎌倉を案内してあげるよといってくれたのに、私の都合で実現しなかったことが、とても心残りです。もう一度、お会いしたかった。

七〇歳から八〇歳までの一〇年間は、お互いに年賀状やお歳暮を贈り合い、その都度電話で話をしたりして、楽しかったですね。一昨年の一二月末に電話で話したのが最後になるとは、夢にも思いませんでした。とても悲しいです。信ちゃんのこととは絶対に忘れません。

信ちゃんの優しさに心から感謝しております。

(母方の従姉妹、鹿児島県人会)

おじさんの置き土産

黒永 智子

「智子ちゃん がんばってる」。会うたびにそういつてニーツと笑う信一おじさん。数年毎に彼は家族を伴って、鹿児島に帰ってきた。彼は「これは智子ちゃんに」といつて、ニーツと笑った。私は「おじちゃん、ありがとう」と満面の笑顔で受け取り、包みをとると、それは絵本『モチモチの木』だった。

鹿児島島の田舎町で生活していた私にとって、初めての東京土産に心躍るくらい期待していた。しかし、あの切り絵の雰囲気はテンションが下がるものだった。その後も帰郷する度に、彼は読み応えある本をお土産にくれた。あのニーツとした笑顔とともに。読書家とはほど遠い私の「おじちゃん、ありがとう」のお礼の言葉は義務的になっていったような……。

私が社会に出ると自分のことばかりになり、親戚付き合いもだんだん減り、彼の家

族と会うことも少なくなっていたが、たまに会うと、私の仕事の愚痴を酒のツマミ

にとりとめもなく話をしたものだ。若い私の仕事の失敗や不満、ひねくれた私の考え方を常に面白そうに聞き、彼なりの考え方を話してくれた。彼と話していると不思議なもので、どんな不満も解決はしないのだが、すべてを受け入れて明日からまた頑張ろう、という気持ちになったものだ。

彼の病気のことを母に聞いて以降、彼のあのニーツと笑う顔が頭から離れなくなつた。千葉まで行けたらと思いつつ、彼が元気になるようなものときどき鹿児島から送った。彼はいつもの声で「智子ちゃん　がんばってる？」とお礼の電話をくれた。顔は見えないのに、なぜかあのニーツとした笑顔が見えた気がした。電話を切ると、ちよつと明るい気持ちになったものだ。

姪っ子である私は彼の仕事の顔を知らないが、きつと彼はどんな小さな仕事も心を込めて取り組んできたのだろう。自分より自分以外の人のことを優先して生きてきた人だと思う。彼から教えてもらったことを心にとめて、どんな困難も笑って乗り越えていく人になりたいと思う。

「おじちゃん、ありがとう」　ニーツ。

（姪・旧姓加藤、教師）

信一おじさん

羽原　章子

子供の頃、母の実家である重富の家によく親戚で集まった。

母のきょうだいは、大変仲が良く、祖父は私の生まれる前に亡くなっていたが、祖母と、母の兄で信一おじさんの弟である弘一おじさん・道子おばさん夫婦の住む重富が、折々にみんなが集う場所だった。

母は、信一おじさんとは大変年の離れた妹であった。

母がものごろついたところには、信一おじさんはもう大学に行っていた、と良く聞かされていた。それで私にとつても、信一おじさんは、おじさんたちの中で一番偉い、少し近寄りがたい存在であった。しかも、東京に住んでおり、編集者という何だかいンテリな職業で、話すときにも少し緊張した。

しかし、信一おじさんは長く東京に住んでいるのに、話すと鹿児島弁で、焼酎を飲

み真っ赤になってちっとも都会風ではないので、しばらくすると緊張もとけた。話すいつも優しく、文学青年のようだった。

私の結婚式のときにも来てくださり、また、きょうだい五人で中華料理を食べたり前日に集まっていたそうだ。おじさんががんになってからも、母と明子おばさんは数回東京に出かけた。

お葬式のとき、おじさんの友人の方がた、とくに甲南高校時代の友人とずっと繋がって一緒に仕事をしたり、影響を与えあったりしていたことに驚かされた。やはり、私の子供の頃の印象のままの文学青年のような優しいおじさんだったのだなあ。本当に素敵なお葬式だった。仲良しのきょうだいなので、天国でも弘一おじさんとお焼酎を飲んでいるかなあ。

おじさん、母や私たちのこと、見守っていてくださいね。

(姪・旧姓白石、医師)

オヤジ・佐方信一

佐方 隆

この本を作るにあたり、親父の友人の方々、旬報社の方々が大勢関係してくださっている中で、息子の俺よりは親父のことを理解していると思います。

そんな中で覚えていることを書いてみたいと思う。

〈ヘンシユウシヤ〉という仕事柄、親父の帰宅は遅くて、不規則で（子どもの生活リズムと合わないだけで、規則正しかったのかもしれないけれど）、基本的に俺が学校に行く時間は寝ていて、夜寝ているときに帰ってくるが多かった。正直、小学生までは普段あまり会わないし、何をしているんだろうと思っていた。中学生になると、俺の寝るのも遅くなって、起きているうちに帰って来たが、なにか鬱陶しい存在だった。

保育園の卒園のとき、将来になりたい職業の欄に、皆が警察官、消防士、プロ野球選

手と書くのに混じって、俺は（ヘンシュウシヤ）と書いたが、保母さんがつけてくれた押し絵が、特徴が無くて、結局、何をする人か分からなかったことがあった。そのためか、親父はアルバイトという名目で、原稿のようなものを、ブロックごとに切りわけ、白紙に貼り付ける手伝いをさせてくれた。普通に小遣いをくれてもいいタイミングだったので、正直、面倒くさいと思い、あのアルバイトは嫌いだった。

親父放棄みたいなことを書いてきたが、その分、日曜日が休めるときは、よく山登りに連れて行ってくれた。高尾山から城山、景信山、陣馬山というコースや、高水三山、御岳山などへ行き、泊りがけで大菩薩峠にも行った。当初は家族で行くことが多かったが、親父の友達とか、俺が行っていた学童保育の父母会やその子ども達などとも一緒のこともあった。正月に、鹿児島島のバーちゃん家に帰ったとき、韓国岳、霧島、高千穂峰などに行き、寒風に煽られて、すごく寒かったのを覚えている。

こんなこともあった。親父の友人で平木さんという方だったと思うが、三人で山に行き、蝶を採るところから標本作りまで教えていただいた。こうして、夏休みの自由研究が完成し、たいへん助かった思い出がある。

山登りと言えば、御岳山から大岳山というコースへ行きたいと言っても、親父はもう少し大きくなってからと言って連れて行ってくれなかった。後に、初めて大岳山に

行ったときは、とても嬉しかったのを記憶している。この後、雲取山へ行こうと誘われたときは、俺も年頃になっていて、親父に付き合わなかった。したがって、山登りの想い出は、ここまでである。

この後、親父は友達と北岳に登ったりと、山登りの趣味は続いていた。国立がん研究センター東病院の治験の対象になり、テレビ出演をしたときの紹介写真に、この北岳の写真を使いたくて探したが見つからず、放送後に見つかって悔しがってみせるなど、オチャメなところも垣間見た。

高三の終わりの受験期に親父は狭心症で倒れ、手術後は家に居るようになった。私学の高校に入ったが、俺だけ学費が異常に安かった。授業料免除だったが、当時、理由は分からなくて、先生ともども友達には特待生だからと冗談言っていたが、実は、おちこぼれだった（？）のだ。

高二のとき、親の職業調査があり、会社を辞めてフリーという形で編集者を続けていた親父の身分がわからなくて、困った。サッカー部の顧問をしていた担任が、「お前の親父は、自由業だ」と教えてくれたが、俺をふくめて友達は何じゃそれ」という顔をしていたら、「佐方ん家はこれだこれ」と顔を引っ掻く真似をする一部のクラスメイトもいて、誤解を受けた。

この時期の想い出というのは、こんな間接的なものになってしまふ。

これまでのオヤジ・佐方信一は息子からすると、随分、影の薄い存在だったと思う。次は、大人になって働き出し、酒を飲むようになってからの思い出に移る。

話の中でよく覚えているのが、正義についてである。

一昨年、二〇一八年暮のことである。親父の本だらけの書斎を整理するのを手伝って欲しいと頼まれた。介護ベッドを入れるためという。その片付けをしながら聞いたことだが、親父は本来、井原西鶴の『好色一代男』や『世間胸算用』など江戸の庶民の生活を勉強したくて鹿児島から東京へ出てきたという。同郷の志布志出身の有名な方が早稲田大学にいて、その後釜を狙って早稲田を受験したのだと言っていた。

ところが、時代は六〇年安保をどうするかというときだったため、当初の目的はどこへやら、いつの間にか、学生運動にどっぷり浸かって、その後の人生が生まれたと。因みに、親父の弟も鹿児島大学で学生運動をしていたようで、その叔父も同じがんで親父より先に亡くなった。奥さんにあたる叔母は、「うちの人は鹿児島では毎日、新聞やテレビに出るくらい有名な人だったんだよ」と話していたくらいだから、血筋なのか、兄弟のコミュニケーションなのか、そんなものがあつたのかもしれない。

親父なりの正義感について、思い出すことがある。

一緒に酒を飲んでいるときに、ニュースなどで各々の意見がぶつかったりすることがあつた。そんなときにいつも言っていたことは、まず俺から見て、「弱く見える側の立場に立って、自分なりの正義感で物事をみなさい」、ということだった。

例えば、ある人が国や役所を相手に裁判をしたとして、「いくら何でもわがままだろう」と俺が言ったとする。そんなとき、親父は「行政を相手に個人が戦うのは大変なことだから、まず、何で裁判になったのか、その人の事情を考えてから『やっぱり、コイツはおかしい』と思ったらしょうがないけど、直感でこんなわがままはおかしいみたいに判断をしないで、立場の弱いであろう人の側に立ってみてから判断するように」というふうに、親父の中には強いものの弱いものの線引きがあつて、その上にある独特な正義感があるように思った。

選挙のときに必死になるのもこのルールなのだろうか。酒については、焼酎や日本酒を中心にウイスキーも美味しそうに飲んでいた。

三年ちよっと経つけれど、手術をする連絡が来て実際はがんだとわかり、治療に入った。退院するとき、大腸がんの肝臓への転移があるということなので、酒は飲まないと思う（俺は飲み会以外ほとんど飲まない）、家の酒を持って帰るつもりでいると、

主治医に酒はどのくらい飲んで良いか聞いて、許可を貰って来たという。また、別の入院のとき、渡してきた携帯の使い方が分からないから教えに来てくれという。仕事が終わって大宮から駆けつけると、一応聞いてくれたが、今日は辛いから帰れと（抗がん剤が辛かったのだとは思うけど）、五分もしないうちに言われた。治療まで含めての治療中は、俺の方も親父の体調が読めず、見舞いを控えてしまったこともあった。

この距離感についてのエピソードが、もう一つある。俺はいま指圧師の仕事をしているが、国家試験に受かって無事に指圧師として働き出すとき、先生から「とにかく、いろいろな人の身体を触るのが上達の近道だから、家族を含めて沢山、圧して上達して下さい」と言われた。病気の前だったが、家に帰ったとき親父に痛いところはないかと聞くと、腰が痛いというから、「横になつて」と言う、「息子の前で、横になつて指圧されるのは照れくさい」と断られたことがある。親父と俺との関係は、こういう微妙な関係なのだと言付かされた。

去年の秋、夏が長くて一〇月でもまだ短パンを穿いていた時期だったが、柏の葉の国立がん研究センター東病院に入院中の親父に呼ばれてかみさんと訪ねると、治療の薬は大いに効果があり、がんが小さくなってきたが、三〇年前に進行性狭心症の手術をした心臓が、抗がん剤の副作用に耐えられないため、治療を中止することになっ

たという。要は、緩和ケアに移ることになったため、いろいろな手伝って欲しいと言う。

手始めに、御岳の紅葉を見に行きたいので、澤乃井で食事をしようということになった。食事をしながら、今後のことをいろいろ伝えられた。この後、前にも書いたが、本だらけの書斎の掃除をしたり、井原西鶴の話の聞いたりしつつ、指圧もさせてくれるようになった。寿司屋に行ったり、親父は子どもの頃からバーちゃんが誕生日などに作る特別な料理のちらし寿司が好きだったのでちらし寿司を買って行ったら、とても喜んでくれたのだった。

Mike + The Mechanic's the living years じゃないけれど、ここでやっと人間関係が変化して俺を頼るようになったのは凄く嬉しかったし、親父も良かったと思う。

最期は、本人がもう会えないと思っていた弟、妹にも会って、お土産の鹿児島豚骨ラーメンを食べて病院に戻った次の日、朝食を待ちながら逝ってしまった。俺が病院に駆けつけたときの顔は、緩んで穏やかだったのが救いだった

これが、俺から見た「オヤジ・佐方信一」です。

（息子・指圧師）

いつも微笑んでいたお義父さん

佐方由紀子

私たちの結婚式では、皆さん全員にお言葉をもらいました。思えばそのときのお義父さんの言葉は、ニコニコしながらゆっくり、じつくり「隆、良かったね」、こんな簡単で短いものでした。にもかかわらず、会場がその瞬間温かさに包まれたのです。

お義父さんが具合が悪くなって、お部屋にベッドを入れたいと、私たちは片付けを頼まれました。身体が悪くて仕方なく頼んだけれど、自分の部屋がどうなってしまうか不安なのと、申し訳ないのとで、たまに顔を出すお義父さんに指示を出してもらったり、聞いたりしながら、私たちはいつもの感じでテキパキと進めていると、ついつい言いたいことを言い、ケンカ腰になっていき、そうすると必ずこう言います。

「それは何も言えませんか」って遠くから笑ってる。「二人でやんなさいねー」って、優しく眺めてる。途中、図書カードや昔のお金、懐かしい写真や手紙、山のグッズな

ども出てきたりして、過去をちよっぴり覗けたり、とつても不思議なひとときでした。なぜなら、お部屋が、その中のモノが、本が、そこにいる本人より多くのことを語ってくれたのです。

あー、お義父さんってこういう人だったんだ。わかったようで、わかっていないのかもしれないが、そんな中、数カ月後にお義父さんに四字熟語を出した。時期でいうと亡くなる一カ月前くらい。これはあるテレビ番組でやっていた心理テストで、四字熟語と言えば何と聞かれて、パッーと思いつくものをまず一つ、そしてもう一つ、合計で二つ答えてもらうと言うもの。その番組によると、一つ目が人生観、二つ目が恋愛観らしい。これを見て以来、私は面白がって、思い出すと家族やまわりの友だち、職場でもチラホラやってみている。それがまた、バカにできないぐらい当たっているのだ。

いつもならこんな質問なかなかできないけれど、ベッドで横になっているお義父さんへの浮腫んでしまっている足のマッサージ中、どこか相手が無防備なのを良いことに距離がいつもより縮まっているこの隙に。今だ！ って、四字熟語をやってみた。

「ちよっと全然関係ないんですけど、思い付く四字熟語ひとつ言ってみて下さい」

「もう一個言ってみて下さい」

マッサージの中盤、突然の質問。こんなことは初めてで、びっくりしていた。そりゃそうだ。こっちも若干ドキドキだ。言葉のストックが沢山あるからか、うーん、うーんとしてしばらく考え、そして答えてくれた。

一個目は、刻苦勉励

二個目は、得意冷然

もちろん音だけでは分からず、二つとも今まで聞いたこともない四字熟語だった。すぐに漢字と意味を説明してもらった。スゴイのが出てきた。そして、当たってる。

多くを語らないお義父さんから、遊び半分の心理テストで、こんなにステキな気持ちを見せてもらいました。

いつだって言葉は必要以上に少なく、言葉以上のものを空気や表情、口調で語っているお義父さん。笑っているカメラ目線の写真はそんなにないけれど、思い出すのは、いつも微笑んでいる顔ばかりなのです。

「隆とお義母さんって顔似てますよね、特に笑った顔!」と、いつか聞いた。

そのときの微笑んで、黙って大きく頷いていた顔が、一番忘れられません。

(隆の妻、指圧師)



前列左より中林賢二郎、二村一夫、塩田庄兵衛 後列
松尾洋の名先生と本人

多賀夫人に学んだこと

佐方 信一

三〇年前、小さな出版社に就職したとき、著者のうちの台所に入れてもらえる付き合いができる編集者になれと教えてくれた先輩がいた。いま考えてみると、松尾洋先生と多賀夫人には、そんな扱いをしてもらったのに気付くのである。

お宅にうかがうと、応接間は季節に応じて、暖められたり、涼しくされており、そこで完成した原稿をいただけるのが普通だった。しかし、時にはでき上がりを待つこともあった。大宮市仲町のお宅では二階にお二人の仕事場である書斎があり、先生の大きな机と多賀夫人の簡素なすっきりとした机が並んでおり、いつも協同して仕事をされていた。私は一階の応接間ですでにでき上がっている原稿を読みながら、最後の数枚を待つこともあった。『労働運動史研究』『栃木県労働運動史』『産別会議・全労

連機関紙』（復刻版）『都職労の歴史』などの仕事でお世話になった際のことである。雑誌『労働法律旬報』にお二人で「婦人労働者の歴史」を連載していただいたこともあった。

そんな折、多賀夫人は「これから料理するのは大変だからつきあって」と近くの中料理店で御馳走してくださったり、寿司や弁当をとってくださった。そして、旅行の写真を見ながらの話や今後の旅行の計画などを楽しく話された。時には、産別会議本部での青春の話を聞くことができた。素敵な姪の方との交流を話されたこともあった。

あるときは、多賀夫人が四時間ぐらいかけて腕をふるった本物のカレーを御馳走になった。また、松尾先生に徹夜していただいて原稿を仕上げてもらうために応接間に入り込んで朝を迎えるという失礼をしたこともあった。こんな折には、食卓で大麦入りの朝ごはんを御馳走になった。暮れには、特別に取り寄せられた味噌やつけものをつつんで持たせてくださり、これは我が家の正月に深みを与えてくれた。

もう一つとてもお世話になったのは、『大河内一男集』の編集である。この著作集の第八巻には、六三頁に及ぶ大河内一男著作目録が付されている。この目録について、大河内先生はこの本の序に「松尾さんは令夫人と共同で私の論文一点一点につき、そ

れが書かれた当初どこへ発表され、その後題名が若干変更されて私の著作集に収録されている場合には、その経過が一つ一つ丹念に追跡されている。松尾さんご夫妻に心からお礼を申上げたい」と謝辞とともにその仕事の成り立ちを紹介されている。この目録は、それまで作られていた目録等を参照しながら、国会図書館にお二人で通われて、すべて原物にあたったうえで作成されたものである。そのため、お二人は夜七時まで図書館を利用できる一般研究室利用の手続きをわざわざとられたのであった。静かな一般研究室で二人並んで仕事をなさっていた姿がいまでも目に浮かぶ。

本当に私はずいぶんお世話になったし、迷惑をかけたと思う。

しかし、私は多賀夫人にそれ以上にお世話になり、大きなことを教えられたことがある。私は、二二年間勤めた出版社を行き詰まりを感じて辞めさせてもらった。一九八七年暮れである。その折、私の今後を心配された大原社会問題研究所の二村一夫先生が「法政大学出版局に電話するように」と、出版局の平川さんを紹介してくださった。法政大学に伺うと、平川さんは「この索引の割付と校正をしてください。松尾多賀先生の仕事です」と大きな包みをくださったのだった。それは、労農党の機関紙『労働農民新聞』の記事索引の原稿で、記事見出しが多賀夫人の手で原稿用紙に清書されていた。

この仕事は私にとっては、自分を立て直し将来への自信を掴むためにも、素浪人になって初めてもらった仕事であることから大変ありがたかった。平川さんが貸してくださった『無産者新聞』の索引（これも多賀夫人の仕事である）を手本にしながら、厳粛な気持ちで割り付けていった。充実感を味わいながら自分が編集の仕事が好きだということをもう一度素直に実感したのだった。こうした気持ちになれたのは、実は多賀夫人の仕事の仕方に教えられたことが大きかった。たとえば、岡山県の農民運動の記事中に香川県の運動が少しでも書かれていると、見出しに香川県を表す言葉がなくとも、岡山県の欄にはもとより、「第何行目より」と注記して香川県の欄にも分類されていた。多賀夫人は記事の見出しやリードだけでなくすみずみまで読んで記事索引を作成されていることが分かった。この復刻版の索引を利用する場合どこから入っても必要な記事に行き当たるように細心の注意が払われていた。言葉では簡単だが、誰もができることではない。当時、思い屈していた私は多賀夫人の仕事に対する態度と心くばりに感じ入りながら割付をすることができた。

ちょうどその頃、洋先生がワープロからパソコンに代えられ、見に来ないかとのお誘いがあったので伺ったとき、いつもの軽率さから、私は「奥様もこれをお使いになったら仕事が早いですよ」と申し上げた。そうしたら、多賀夫人はいつになく強い言

葉で、「私の仕事はそんなものでできる仕事ではない」という趣旨のことをいわれた。一つ一つをどこに分類するか読みつくし、調べつくして原稿用紙に一枚一枚記事見出しを書き込む姿が見える多賀夫人の言葉であった。

このときも御馳走になり、お土産をもらったと当時の手帳にメモがある。いまも私はフリーの編集者を続けているが、ときどきこの仕事で感じた厳粛な気持ちを思い出すことがある。

（出典：『松尾多賀をおくる』一九九五年五月二七日）

組合運動史執筆者の誕生

佐方 信一

川崎さんの仕事のひとつは、単組や単産などの労働組合運動史の執筆であった。その最初が『栃木県労働運動史』で、一九七六年一月の発刊である。組合運動史ではないが、最後の『共に歩む——第一経理の50年』（二〇〇四年六月刊）まで二九年間にわたって、民主的団体の歴史も含めて執筆生活を送ったことになる（執筆した組合史の詳細は本書巻末の「川崎忠文の主な仕事」を参照）。

こうした仕事を川崎さんが始めたのは、次の事情があった。『栃木県労働運動史』は栃木県労働組合会議が中心になって組織された「栃木県労働運動史編集委員会編」で労働旬報社刊である。この本への発刊協力が労働旬報社に依頼されて、松尾洋先生に相談したところ、先生は自分は栃木にまんざら関係がないわけではないから、監修と

戦前の執筆は私が引き受けるが、戦後部分を執筆する人はいないだろうかということになり、ちょうど会社を辞めたばかりの川崎さんに打診してみることにしたのだった。川崎さんは、後で聞いたところによると、初井常喜先生に相談したうえでこの執筆を引き受けてくださったという。

当時、川崎さんは井の頭公園の近くにあった初井先生の旧居に住んでいたが、この仕事を引き受けてから、自分なりの戦後史の全体像を作り上げ、栃木県労働組合会議の小山田さんが集めた資料と日夜格闘しながら、全精力をこの仕事に打ち込んだ。七四年から七五年の、国民春闘から公労協のスト権ストにいたる時期のことである。その結果、敗戦から七〇年代前半までを三章に分けて、A5判七〇〇頁余の大作として書ききったのであった。二〇〇字詰め原稿用紙になおせば三四〇〇枚が綺麗に清書された原稿であった。

とりわけ、安保闘争、三池闘争、松川闘争が全国の闘いと栃木の取り組みを織り交ぜながら、「安保闘争」という節を立てて二〇〇字詰め原稿用紙二二〇枚をかけて書かれており、川崎さんの思い入れが伝わってくるのである。こうして、川崎さんは戦後労働組合運動史を川崎さんなりにまとめたのであった。これを仕上げた自信と楽しさが組合史執筆者川崎さんを誕生させたのであろうと思う。

しかし、昼夜を分かたぬ全精力をかけた執筆生活をおえてみると、脚力の衰えは無残なもので当時参加した労働旬報社の社内旅行についていけないほど足が弱っていたという。そこで、川崎さんは近郊の山歩きを始めたのであった。それから、数年かけて、途中から前田寿男さんと一緒に歩いたり、青梅に引越したりして、奥多摩の山々はすべての登山ルートを制覇することになる。また、早起きし、執筆は午前中に終え、午後は次に書く内容を構想しながら散歩するという生活スタイルを確立したのであった。

川崎さんの追悼集に当たり、川崎さんの執筆した本のすべてに、編集会議に参加したり、割付・校正するか、最低限原稿を読む形で付き合ったものとして、以上の報告をしておきたい。

（出典…『回想の川崎忠文』二〇一二年二月一四日）

わが病氣

佐方 信一

前略

猛暑が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。

実は、私は七月二五日から八月二三日まで、入院生活をしており、この猛暑とは別の暮らしをしておりました。

入院生活というのは、大腸がんで患部を切除し、人工肛門をつける手術をしたためです。また、肝臓もがんに侵されていることも判明しました。肝臓のほうは、機能が侵されるほど進んでおりませんが、がんが進行することを止める必要があるとのこと、今後、抗がん剤治療を続けることになりました。

以上のように、人工肛門で排泄の処理をしなければならないこと、肝臓の治療を続

けることで、これまでのような自由な生活に比べれば制約を受けることになります。

私はあとひと月ほどで七八歳になりますが、医師よりがんの説明を受けた夜、病院のベッドの上で、「まあ、いい人生を送ってきたなあ。これからは、病氣中心に生活しよう」と、納得したことでした。

これまでいろいろお世話になってきましたが、必要な場にもお伺いできないこともあると思いますが、何卒、ご寛恕いただきたいと思ひます。

現状をお知らせしますとともに、今後ともご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

草々

二〇一六年九月

(パソコンに残る)

恩師川畑まり子先生へ

佐方 信一

拝啓

秋も深まってまいりましたが、先生にはお元気にお過ごしと思います。

久志中学校で特別にご恩を受けたまま六〇年にわたる音信不通にもかかわらず、先生が私のことに気をかけていただいていることが、坊津の集まりについて電話連絡してくれた、いとこの菅沼チイ子の話からよくわかりました。不義理を深く反省しておりますが、春日部の壽先生のお墓にお参りするようにとのお言葉を有り難く聞き、先生のお心の広さに感銘しました。恥を忍んでぜひ墓参りに伺いたいと思います。

壽先生には久志中学の三年間、特別の教えを受け、私の学力と人格形成の土台をつくっていただきました。いまでもふとした時に、これは壽先生に教わったことだと気

づくことがあります。

本当に恩師です。

ただ、申し訳ないことに、私は七月に大腸がんの手術を受け、九月中旬に退院し、現在抗がん剤を服用し、自宅で病人生活を送っております。自宅での生活には何の不自由もありませんが、外出等の行動範囲を少しずつ広げている最中で、まだ春日部までうかがう自信がありません。もう少し体力が回復してからご連絡申し上げます、ぜひ壽先生の墓前にご案内いただきたいとお願ひ申し上げます。年内には伺えると思いますので、しばらくご猶予をいただきたくお願い致します。

まり子先生の広く深い心に感謝しつつ、お詫びの手紙を差し上げる次第です。寒さが日々に深まってまいります。ご自愛のうえお過ごし下さい。

敬具

二〇一六年十一月七日

佐方信一 拝

川畑まり子先生

合宿の贈りもの

佐方 信一

私の合宿への参加の仕方はたいへんわがままなものであった。第一目の夕食直前に到着し、二日目の夕食には本体と別れて帰宅した。

それでも、第一日目夜の学童っ子のアトラクションには随分感心したし、そのあとの父母交流会の痛飲は気分がよかったし、翌日の御岳から鳩ノ巣溪谷への山歩きは痛快であった。要するに私は、たいへん愉快的気分で帰宅したというわけである。

ところが、痛快な気分にはひたっていたのも合宿への参加の仕方同様ひとりよがりであつたらしい。

翌日帰ってきた妻から『父母交流会でのお父さんのあの言動はなんだったの』と叱られたのである。小生はいい合宿だと思っており、その真意がつかめないから、聞き

ただしてみると、父母の皆さんのあたたかい雰囲気とアルコールに没入して、失礼な言辞を弄したらしい。言われてみるといくつかの場面が、おぼろげながら甦ってきて、はなはだ具合の悪いことといったらない。

みなさんに悪いことをしたと思うと同時に、酒に飲まれる年齢に達したことを悟って忸怩たるものがあつた。

その後日のこと、合宿実行委員会の有志のコンパが深山さんのところで開かれたとき、ずうずうしくも闖入して、楽しい合宿の思い出話をお聞きする機会をもったが、合宿が実行委員会によってどの様に企画され、場所の選定、宿泊所の確保、実踏等、一つ一つの障害をのりこえてかちとられたかを知るにつけ、自分の参加の仕方と失態を内心恥じ入った次第であつた。

とはいえ、鳩ノ巣合宿は私には大きな贈物となった。御岳からの楽しかった山歩きの楽しかった記憶が忘れられず、ずっと前から奥多摩歩きを続けていた会社の仲間に加わって、一五年ぶりに、山歩きを再会したのである。

高水三山からはじめて、御前山、大岳山、棒の折れ瑞がき山などを歩いて、大晦日には帰省のついでに、子どもと一緒に高千穂峰に登るといふほどの熱の入れようになつてしまったのである。

というのは、山歩き後の数日の体調がすこぶる好調なのである。

こうしたことで、子どもと妻と一緒に高尾山、城山、景信、陣場等、高尾山系を登って、我が家の楽しみもなった。

このように、合宿の贈物と自分で楽しんでいると、わが住まいの近くのお母さん達が話し合って、「子供たちをどこかの山へつれていけ」ということになった。私は仲間が出来たとばかり快諾し、行き先をちよつと通俗すぎとは思ったが、高尾、城山に決めた。

合宿実行委員会の企画、実踏等の綿密な計画のことが頭のすみを過ぎ、子どもたちの体力と安全を考えたからであった。しかし、ケールやリフトを使わずに、自分の足で登ることにして、山歩きの雰囲気が残っている琵琶滝から登って、城山に行き、帰路はつり橋のある森と動物のコースを通ることにした。

学童っ子はよく注意を聞いて歩いたし、実に快活だった。私にすれば、鳩ノ巣合宿をミニ体験した楽しい山歩きであった。

ところで、私は学童っ子たちに高尾行きの作文を書くように命じた。子どもたちの思い出になるだろうと思ったこと、「どこを見てきたか子どもたちの」観察力についても知リたかったことが、作文宿題を出した私なりの理由であった。

それからずいぶん時が過ぎて、学童の臨時総会があった。そこで深山さんが父母からの合宿作文が出てこないと作文募集を訴えておられた。この訴えも子どもに作文を命じた私には耳が痛く、あわてて筆をとったというわけである。

それはともかく、みなさん一緒に日帰りで東京近郊の山を歩きませんか。

(一九八一・八、上本郷学童保育所『鳩ノ巣合宿』)

三九会主催の山歩きへのお誘いと資料

佐方 信一

初夏の緑のなかを歩く、高水三山、ハイクのご案内

前回の浅間尾根はずいぶん歩きましたが、おしゃべりもたっぷりで、山菜のてんぷらにめぐりあい、かたくりの群落に出会えて、いい山歩きだったと思います。連休はいかがお過ごしでしたか。

さて、今回は三月に雪のため行けなかった高水三山への再挑戦です。名前の通り、高水山、岩茸石山、惣岳山の三つの山を登ろうというわけです。奥多摩入門の山と言われています。また、高水山は古くから信仰の山として知られ、山頂直下には常福寺という真言宗豊山派のお寺があり、鬱蒼とした大木に囲まれています。ここまでの道

には、一合目から九合目までの石柱があり、もうすぐだと励ましてくれます。山頂からは、奥多摩の山々が見渡せ、眼前にわたしたちの親しい山となった御岳山や大岳山が霞んでみえます。また、二番目の山・岩茸石山からは、近くに奥武蔵の山々がゆったりとした山谷をみせ、遠く新宿副都心やサンシャインビルがかすんでいます。三つの山をつなぐ尾根道は広々として歩きやすい道です。どんな鳥の鳴き声を耳にすることができるか楽しみにしたいですね。ではお会いするのを楽しみにしています。要領は下記のとおりです。

記

月 日…1994年5月22日（日曜日）（小雨決行）

集合場所と時間…JR立川駅2番線ホーム青梅より階段下、午前8時45分。

コース…立川発8時56分の奥多摩行きに乗り、軍畑で下車。あと、コースは前に案内しましたので時間だけを書きます。登山口（10・30）↓高水山（11・50、ここで 御岳山と大岳山を望みながら昼食）。1時出発、35分で岩茸石山（1・35）↓惣岳山（2・40）↓玉川屋（4・00）。いつもの蕎麦で乾杯。

準備するもの…乗車券はホリデーバスか、奥多摩フリー切符のどちらか安い方を駅で求め

てください。

おべんとう（立川駅に駅弁があります）

水筒（麦茶やウーロン茶、紅茶など自分の好きなものを入れて）

運動靴（山道ですので必ず）

ズボンかキュロットスカートで

リュック…中には、タオル、軍手、雨傘を入れて

以上

追伸…浅間尾根をおりた民宿で話題になった田部重治の〈数馬の一夜〉のコピーを同封します。目を通していただけたら幸甚です。

三九会のみなさま

ご無沙汰しています。お変わりございませんか。

三月九日が近づきましたので二〇一二年の三九会のご案内です。

二〇年前の甲南八期三五周年後のハイキングなどでは、毎月集まっていたのが遠くなりました。

また、昨一年の三九会が終わってすぐ、東日本大震災と福島第一原発の事故があつて、みなさんさまざまな経験をなさったのではないでしょうか。誘う人があつて、事故後仙台の被災地を訪れ、津波の跡形もなくなった海岸を見て圧倒されました。また、私が住んでいる松戸は、放射線のホットスポットで、市内の公園の放射線量を計測し、市に対策を求める市民の運動に後ろのほうから参加するなど経験しました。

一方、近所づきあいの人が鹿児島島に行ったことがないのでぜひということで、昨年秋季に二泊三日で鹿児島案内の旅をしました。

私はそんなこんなですが、老いを感じるようになったとはいえ、まだ、かつてわれわれが老人を見て感じた老成したとか、達観したのとは程遠く、分からないことばかりでガキ同様に悩んでいます。

みなさんのいい話もお聞きしたくて、一年溜まったあんなこんなをお互い喋りあうことを楽しみに、万障繰り合わせのうえにご出席くださるようお願いいたします。場所は下記の通り、集まりやすさを考えて、東京駅の近くにしました。

日時…2012年3月9日午後5時～7時

場所…ななは（丸ビル6階の飲食街）を三九会で予約

TEL03・3240・1020

会費…酒を飲まない人…4500円、酒を飲む人…5500円

予約締め切り…同封の返信用はがきで、会場の都合もあり、2月末日までにご返事ください。

(幹事…成田勝代・佐方信一宛)

資料 三九会山歩き・街歩き日程表 (鹿児島県立甲南高校八期関東三九会)

一九九二年

一〇月 御岳・日の出山 玉堂美術館、御岳溪谷散策後酒蔵「澤乃井」へ

十一月 御岳・鳩ノ巣溪谷(大檜峠、雲仙橋経由) 溪谷河畔の民宿で乾杯

十二月 高尾山 城山 小仏峠 景信山

一九九三年

一月 鎌倉・葛原岡ハイキングコース(銭洗弁財天、佐助稲荷、高德院大仏、長谷寺経由) 駅前で乾杯

四月 高尾・森林科学園 緑色の桜、御衣黄を知る

五月 大山(伊勢原在住の山本五百子さん同行)

六月 横須賀散策(横須賀在住の伯山量見さんの企画で、記念艦三笠、観音埼灯台見学)

八月 大菩薩峠(一泊)

九月 御岳・大岳山(大岳神社、馬頭刈尾根経由)

十一月 奥多摩湖(ドラム缶橋、奥多摩むかし道を境橋まで歩く)

一九九四年

一月 鎌倉天園ハイキングコース(鶴岡八幡宮、鎌倉宮、瑞泉寺、天台山、天園茶屋、大平山、鷺峰山、建長寺、亀ヶ谷切通し経由)

二月 青梅丘陵ハイキングコース(紅梅苑、吉野梅郷、吉川英治記念館、玉堂美術館経由、見学)

御岳の「玉川屋」で乾杯

四月 弘沢ノ滝、浅間嶺、数馬の里 山崎屋(田部重治著「数馬の一夜」ゆかりの茶屋)で乾杯

五月 高水三山(高水山、岩茸石山、惣岳山)

一〇月 御岳・大岳山、鋸山、鋸尾根、愛宕山 奥多摩駅前で乾杯

一〇月 御岳・日の出山から吉野梅郷 日向和田河畔の釜飯屋で乾杯

一九九五年

一月 鎌倉ハイキング(覚園寺、百八やぐらを経て天園コースへ、明王院、浄妙寺、報国寺、

杉本寺参拝)、小町の二宮さん宅で乾杯

二月 雪の奥多摩・三頭山 蛇の湯だから荘で入浴、乾杯

三月 高尾山・南高尾

四月 奥多摩・三国山、生藤山

五月 奥多摩・三ツ釜ノ滝(数馬の石門、梅沢林道 キャンプ場経由)

六月 丹波山村サオラ峠

九月 雲取山宿泊登山(雲取山荘泊)三峰口、大輪、ロープウェイ山上駅経由。下りは石尾根、

小雲取山、ブナ坂、七ツ石山経由鴨沢へ

一〇月 川乗山

十一月 三頭山 蛇の湯だから荘で乾杯

一九九六年

一月 鎌倉ハイキング(朝日名切通し、熊野神社、光触寺、巡礼古道、曼陀羅堂やぐら、名越

切通し、安国論寺、妙法寺、妙本寺拝観経由)二宮さん宅で乾杯

四月 奥多摩湖、むかし道を花見ハイキング、奥多摩駅前で乾杯

五月 奥多摩・川乗山(百尋ノ滝、足毛岩の肩、大根ノ山ノ神経由)、鳩ノ巣駅前雲仙屋で乾杯

箱根・明神岳(大雄山最乗寺、宮城野経由)、勘太郎の湯入浴

六月 南アルプス仙丈ヶ岳宿泊登山(長衛荘泊)、広河原、北沢峠経由して仙水峠へ。二日目

七月 大滝ノ頭、小仙丈岳経由仙丈ヶ岳へ、馬ノ背藪沢分岐、北沢峠、広河原、甲府経由

九月 奥多摩・御岳山ロックガーデン(綾広の滝、七代の滝)経由鳩ノ巣へ、雲仙屋で入浴、

乾杯

一〇月 箱根・矢倉岳

十一月 陣馬山 陣溪園にて入浴、乾杯

一九九七年

一月 鎌倉・衣張山ハイキング、祇園山ハイキングコースから宝戒寺、金沢街道、平成巡礼道

犬懸ヶ谷、報国寺、浄妙寺を経由、二宮さん宅で乾杯

二月 吉野梅郷から日の出山登山、町営つるつる温泉で入浴、乾杯

三月 大岳から富士見台、鶴脚山を経て馬頭刈尾根へ

四月 奥多摩湖ドラム缶橋、惣岳山を経て御前山へカタクリを求めて

五月 小沢峠、黒山を経て岩茸石山、惣岳山へ「玉川屋」で乾杯

六月 卒業四〇周年同期会(鹿児島市錦江高原ホテル)の翌日、クラス企画霧島巡り(雨中、

霧島神宮、上野原遺跡、火口湖の不動池、六観音池見学)、霧島の麓、佐藤さんの地元、

祝橋温泉旅館泊。この時、後にプレミアムがついて有名になった佐藤学さんの焼酎工場

見学があり、焼酎のおいしい飲み方を教わり、佐方さんは実践して実感したそうです

八月 霧ヶ峰高原ミニハイク、茅野町営温泉入浴、帰りの車中で乾杯

九月 箱根・金時山、仙石「福島館」温泉入浴

一〇月 富士吉田、足和田山を経て紅葉台へ、河口湖駅前で乾杯

一月 高水三山（別コース）、御嶽駅經由鳩ノ巣駅へ、雲仙屋で乾杯
一九九八年

一月 鎌倉の切通し踏破ハイキング……雪のため中止

二月 藤野から陣馬山を経て栃谷へ……雪のため中止

四月 六義園、飛鳥山 街歩き

五月 緑の浅間嶺を歩く……雨で中止

七月 八ヶ岳宿泊登山 美濃戸口、白河原經由、山小屋「行者小屋」泊、翌日、地藏の頭、赤岳展望荘を経て赤岳、阿弥陀岳登頂。佐方さんは体調が気になるようで阿弥陀岳登頂は断念

九月 御岳山、大岳、奥の院、ロックガーデン 玉川屋で乾杯

一月 明王峠、陣馬山を経て陣谷温泉へ、入浴、乾杯

一九九九年

四月 浅間嶺に山桜とカタクリを訪ねて

七月 北アルプス燕岳、大天井岳、常念岳宿泊登山（燕山荘、常念小屋泊）雨のため常念岳登山断念（安曇野「ちひろ美術館」見学）

九月 御岳平から大岳・鋸山、愛宕神社を経て奥多摩駅へ

二〇〇〇年

一月 谷根千を歩く 羽二重餅を食べて、谷中墓地を巡り、谷中商店街、宮本百合子生家、「青

二月 轄」発祥の地、鵜外の「観潮楼」など見学

奥武蔵日和田山

四月 扇山、百蔵山から猿橋駅へ

五月 奥多摩棒ノ嶺 名坂峠、大丹波、川井經由

八月 常念岳、蝶ヶ岳宿泊登山（常念小屋、蝶ヶ岳ヒュッテ泊）

一〇月 多摩川の源流を尋ねて笠取山へ 塩山駅から水干を經由

十一月 盧花恒春園内愛子夫人旧宅にて古川さん母娘の手作り料理で忘年会

二〇〇二年

一〇月 払沢ノ滝から檜原村・数馬に至る浅間嶺

十一月 卒業四五周年同期会 シェラトン・グランデ・トウキョウベイホテルで大会、泊。翌日、

独自企画で軽井沢へ、貸し切りマイクロボスで中央高速を經由して清里、野辺山、小諸
懐古園見学、クラブハウス、軽井沢コンチネンタル泊、翌日軽井沢を一周見物。上信
越道經由で帰都、皇居東御苑見学

二〇〇三年

十一月 陣馬の陣谷温泉で忘年会

二〇〇四年

二月 樋口一葉・文人たちを尋ねて、本郷、菊坂、白山界限を歩く

二〇〇七年

五月 卒業五〇周年閉幕記念同期会 城山観光ホテルで大会、前日三九会・桜島古里温泉「ふるさと観光ホテル」泊、翌日、桜島一周観光ツアーをして、城山同期会へ

二〇〇八年

一月 谷中七福神巡り 田端文士村見学、西日暮里、谷中、上野まで

二〇〇九年

三月 鹿児島・関東合同三九会（京都一泊 嵐山・らんざん泊）

二〇一七年

四月 国立昭和記念公園散策

二〇一八年

一〇月 関東八期会、傘寿を機に幕を下ろす（日比谷プレスセンター内「アラスカ」にて）、三九会は関東以外からも参加があり一五名出席。二次会を赤坂見附クラブ「シルビー」にて開催、佐方さんはここまで一緒でした。

（成田勝代作成）

『堀田善衛を読む』への感懐

佐方 信一

石井さん

『堀田善衛を読む』をお送りいただきありがとうございました。しかも、自分のために購入されたものをわざわざ。おかげで興味深く読みました。大変申し訳ない次第です。

堀田と直接接触したことを中心に書き手が執筆しており、大いに楽しみました。ベトナム脱走兵を堀田がかくまったことについては蓼科の別荘を開放したぐらいに思っていました。逗子の自宅で面倒を見たのですね。大したものですね。本物ですね。また、わたしは、『ゴヤ』は途中までしか読まず投げ出したままですし、『ミシェル城館の人』は気になりながら手に入れてもないので、送っていただいた本で今回教

えてもらうことができました。

とりわけ、宮崎駿の文章は教えられるところが多くありました。宮崎が取り上げている堀田の最後のエッセー『空の空なればこそ』は、旧約聖書の話で、かつて読んだ折、堀田も歳をとってこんなわけのわからん宗教のことを書くようになったかと思ひ飛ばした記憶があるのですが、こっちが堀田の意図を理解する力がなかったことを宮崎の解説で知りました。短い文章ですので今回再読しましたが、分かったのかどうか今も自信はありません。

以上のように大変楽しい時間を過ごせたのですが、そのうえで、ちょっと付け加えたいことを述べさせていただきます。この本に、『堀田善衛全集1』に大江健三郎が執筆した解説を加えると、もっと堀田の仕事に近づけるのではないかと思います。あなたに見てほしいと大江の文章をコピーして同封しました。

『堀田善衛を読む』の「はしがき」は、堀田が一九四五年三月一〇日の東京大空襲から同月二四日に上海へ出発するまでの短い期間に、暗記できるほど集中的に『方丈記』を読んだことを感動的に紹介しています。大江は、堀田が東京大空襲の現場に立ち会ったことをより重視して、次のように書いています。

「太平洋戦争の、その日本人の悲惨の一頂点の、すなわち東京大空襲の現場にわ

れわれはまず堀田善衛青年を発見する。かれは現実にもかつてまっすぐ歩みよる。……なにがなんでも歴史、現実の『現場』にたちあわねばならぬという魂の決意にたっているかれは。この堀田善衛青年が、想像力的には、七百年前の破滅的乱世を生きた『方丈記』の作者に深く影響づけられていたことに、われわれはいうまでもなく注意をそそがなくてはならない。(中略)

しかも奇怪な『現場』があらためて急襲するのである。青年の前にピカピカ光る長靴をはいた天皇があらわれ、焼け出された民衆は土下座して泣いた。この『臣民としての優情』……と(「解説 典型的人間 典型的文学者」)。

このように大江は、堀田が戦争の現場に立ち会ったことを重く見ているようです。堀田は焼跡を見ながら、これにどう向き合うかを考えたのだろうと思います。そして、死者一人ひとりを餓死の現場まで出かけて数えて何人死んだと記述した『方丈記』とは何か、その作者の鴨長明とはどんな人間か、また、宮廷画家でありながら「戦争の惨禍」という版画を残したゴヤとはどういう人物か。いつぼう、『明月記』という日記に「世上乱逆追討耳ニ満ツト雖モ、是レヲ注セズ。紅旗制戒吾ガコトニ非ズ」(源氏と平家の戦さは真っ盛りだがそんなことは書かない。源氏が勝とうがどうだろうが自分が知ったことじゃない)と外の世界を無視し芸術至上主義に徹することを宣言して日

記を書き始めた藤原定家にいたく感心したのでした。そのうえで、この三人の文人、画家を明らかにすることを堀田は一生の課題とします。堀田自身が次のように語っています。

「この間、司馬遼太郎さんと対談したときに、彼は『俺は、まるで戦中のおれへの手紙を書いているようなものだ』といっていました。私もまったく同じで、後年の『方丈記私記』（一九七一年）とか、『定家明月記私抄』（一九八六年）などは、結局、戦時中に背負い込んだものを戦後になって作品化したものなんです。それから、『ゴヤ』（一九七三〜七六年）にしても、戦時中に『戦争の惨禍』という版画集を見たことから始まっている。

ですから、戦時中に背負い込んだテーマを返すのに、ほとんど生涯を費やしたといえるんじゃないでしょうか。それは、大岡昇平さんなども同じ思いだったと思います。戦時中の自分というものからやつと解放されたのは、今書いているモンテニユ（ミシエル 城館の人）第一、二部、集英社刊、第三部は『すばる』に連載中です。『めぐりあいし人びと』は、『めぐりあいし人びと』」。

『めぐりあいし人びと』は『堀田善衛を読む』にも取り上げられている自伝的回想録ですが、この聞き役と構成を行ったのは橋本進さんです。そんなわけで、私のところ

においてももう読みませんので、同封します。余裕があったらパラパラめくって読んでください。

くだい文章で恐縮ですが、もうひとつ付け加えたいことがあります。大江のいう「臣民の優情」という問題です。「優情」という言葉は「基準のない、思想のない、ふらふらする日本人の心情」くらいにこれまで理解していたのですが、この手紙を書くにあたって正確に知りたいと広辞苑をみると、用語として取り上げられていません。堀田の造語でしょうか。

戦時中を堀田が直接対象にした作品として、池澤夏樹は本書で『若き詩人たちの肖像』を取り上げ、楽しく語っています。この小説はモデル探しの楽しさ、戦争を謳歌しない若者たちの話で、私もかつて大変面白い小説として読んだことを思い出しました。いっぽう、堀田が戦時中を対象にして描いた長編に『記念碑』（一九五五年）があります。私にはこの作品が「優情」という問題を扱っているように読めました。同盟通信の記者とその秘書役の女性と予科練に入っているその息子、転向者と転向者の非転向者の妻、記者とその女性秘書が泊まっているホテルで働くたくましい庶民の女性、特高警察官などを登場させて戦時中の日本を書いています。この作品は読みづらいようですが、堀田は一生懸命書いており、私は好きな作品です。文庫本が手元にありま

すので同封します。石井さんに読んでほしい作品です。

なお『記念碑』には『奇妙な青春』（一九五六年）という『記念碑』に登場した人たちの戦後を書いた続編があります。一九四五年一月一日、思想犯が釈放された日に田村町の飛行館で開かれた自由戦士出獄歓迎人民大会で、布施辰治が「みなさん、しばらくでした」（だったかどうか不正確）と挨拶するところから、二・一スト中止までを書いていきます。『記念碑』で非転向者として描かれた女性が共産党本部と産別会議本部のおつかい係として登場しますが、スト中止のところで「これは違う」（この言葉も不正確）とつぶやき、二・一ストの進め方に納得しないところで終わっています。日本の戦後に対する堀田の見解でしょう。この本は手元に見当たらないので送れません。が、集英社文庫で以前出ています。この二作が『堀田善衛を読む』に紹介されていないのが、私は残念でした。

くどくどと書きました。必要な肝心なところを説得的に書けなくて残念です。とはいえ、石井さんのおかげで若い時代に格闘した堀田善衛に再会できて、振り返ることができました。ありがとうございます。

一〇月に入院した折、藤田宜永『戦力外通告』という小説を、表題に誘われて途中まで読んでいましたが、担当医にもう抗がん剤の治療は体力的にできないと言われて、

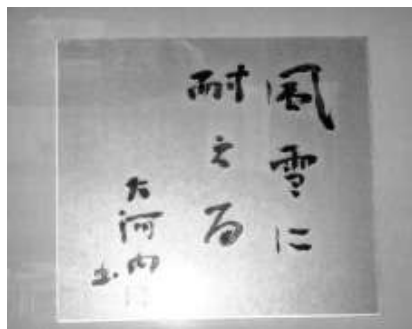
こんなものを読む時間はないという気分になって読むのをやめて、妻に家に帰って帰ってもらいました。そんなわけで、石井さんという交流できることを楽しみにしています。

風邪などひかずにお元気で暮れをお過ごしください。奥様によりしくお伝えください。

二〇一八年十一月二七日

佐方 拝

VI 主な仕事



松尾先生が大河内先生からいただいた画仙紙とこの色紙を
塩田先生と佐方に分けてくださったという



『大河内一男集』完成記念 1981 年 12 月 22 日
前列中央 大河内一男 両端 松尾洋
後列中央 塩田庄兵衛の先生ご夫妻 右端本人

労働旬報社時代の主な仕事

法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』第三七集、

第五六集

労働運動史研究会編集『労働運動史研究』（四六号～六三号、

以下休刊）

法政大学大原社会問題研究所編『社会・労働運動大年表』Ⅰ、

Ⅲ＋別巻Ⅱ索引・出典

法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑復刻』第二二集、

第三五集

法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑復刻・別巻

日本労働年鑑特集版・太平洋戦争下の労働者状態・労働運動』

法政大学大原社会問題研究所編『写真でみるメーデーの歴史』

法政大学大原社会問題研究所編『金属産業労働組合の組織と活動』

産別記念会編『産別会議・全労連機関紙』（復刻版）

末川博編集代表『基本労働六法』

大河内一男『大河内一男集』全八巻

第一巻 社会政策論Ⅰ

第二巻 社会政策論Ⅱ

第三巻 労使関係論

第四巻 労働組合論

第五巻 戦後労働運動論

第六巻 国民生活論

第七巻 社会運動史Ⅰ

第八巻 社会運動史Ⅱ

黒川俊雄・嶋津千利世・犬丸義一編『講座・現代の婦人労働』全四巻

第一巻 婦人労働者の賃金と雇用

第二巻 男女平等と母性保護

第三巻 労働者の生活と家事・育児

第四巻 労働運動と婦人労働者

フランス労働総同盟編・中林賢二郎編訳『ドゴール体制下の

労働運動と五月ゼネスト』

塩田庄兵衛『新版 日本労働運動の歴史』



牧瀬恒二『沖縄返還運動 その歴史と課題』
 牧瀬恒二『沖縄三大選挙 一九七〇年問題と沖縄』
 波照間洋『立ちあがる沖縄——教公二法反対闘争の記録』
 屋良朝苗編『沖縄教職員会一六年 祖国復帰・日本国民としての教育をめざして』

羽仁説子・宗像誠也・尾崎陸編『母と子のためのベトナムのはなし』
 日本とベトナムの子どもの作文交流実行委員会編『ベトナム

への手紙』

大槻健・尾山宏・徳武敏夫編『教科書黒書』

正木清伝記刊行委員会編『正木清伝 民衆とともに歩んだ六〇年』

三重県員弁郡教職員組合編『いなべの土のなかの教育 三重県

員弁郡教組物語』

相沢与一『現代最低賃金制論』

日本労働組合総評議会編『総評二十年史』上巻・下巻

三池炭鉱労働組合編『みいけ二〇年』

三池炭鉱労働組合編『みいけ二〇年 資料篇』

日本教職員組合編『日教組二〇年史』

国鉄労働組合編『国鉄労働組合の二〇年』

国鉄労働組合広島地方本部編『鉄路燃やす闘魂の歩み

国鉄労組 広島地方本部二〇年史』

国鉄労働組合東京地方本部編『国鉄労働組合東京地方

本部二〇年史』

全商工労働組合編『全商工二〇年史』

愛知県高等学校教職員組合編『愛高教二〇年史』

日本私鉄労働組合総連合編『私鉄総連二〇年史 資料編』

総評全国一般労働組合東京地方本部編『闘いは野火の如く

結成二〇年闘争史』

福岡県高等学校教職員組合編『福岡県高教組二〇年のあゆみ』

福岡県教職員組合編『福岡県教組二〇年』

大分県教職員組合編『大分県教組二〇年史』

帯広地区労働組合協議会編『帯広地区労二〇年史』

味の素川崎工場労働組合二〇年史編纂委員会編『労働組合

二〇年史』

全国競馬労働組合編『競馬労働者の二十年——全国競馬労働組合史』

東京地方労働組合評議会編『戦後東京労働運動史——東京



地評の二五年

全国金属労働組合全国金属史編纂委員会編『全国金属三十年史』
 阪急電鉄労働組合編『阪急電鉄労働組合三十年史』
 全国紙バルプ産業労働組合連合会編『資料にみる紙パ労働者のあゆみ紙パ労連結成三〇周年記念』
 日本都市交通労働組合編『都市交三十年史』
 福岡県高等学校教職員組合編『福岡県高教組三〇年のあゆみ』
 大分県教職員組合編『大分県教組三十年史』
 大分県労働組合評議会編『大分県労評三十年史』
 長野県教職員組合編『長野県教組三十年史』
 全国電気通信共済会労働組合編『電済労三〇年史』
 板橋区労働組合連合会編『荒川が見える 板橋区労連三〇年の歩み』
 大阪府職員労働組合編『大阪府職労三五年史』
 国鉄労働組合編『国鉄労働組合四〇年史』
 全日本電機機器労働組合連合会編『電機労連運動史』
 紙バルプ産業労働組合連合会編『紙バルプ労働運動史』
 全日本港湾労働組合編『全港湾運動史』

全日本自由労働組合編『全日自労の歴史』

全駐留軍労働組合編『全駐留軍労働組合運動史』第二卷／第四卷
 全北海道開発局労働組合編『全開発史 われらの歩み一五年』
 全国金属労働組合在原製作所支部編『組合のあゆみ 単一結成二〇周年記念誌』
 中央競馬労働組合編『中央競馬労働組合史』
 大阪交通労働組合編『大交史』
 大阪市水道労働組合編『大阪水労史』
 宮城県労働組合評議会編『宮城県労働運動史』第一卷・第二卷
 栃木県労働運動史編集委員会編『栃木県労働運動史』
 千葉県労働組合連合協議会編『千葉県労働運動史』
 東京都区職員労働組合編『都職労の歴史』第一卷／第三卷

フリーの編集者時代に携わった主な仕事

法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』第五八集／第七九集



法政大学大原社会問題研究所編『新版 社会・労働運動大年表』
全一卷＋索引

法政大学大原社会問題研究所編『社会労働大事典』

法政大学大原社会問題研究所編『日本の労働組合一〇〇年』

法政大学大原社会問題研究所編『日本労働運動資料集成』

全一三巻＋別巻

宮城県高等学校教職員組合編『宮城高教組三十五年史』

法政大学教職員組合四〇年史編纂委員会編『全法政四〇年の歩み』

日本都市交通労働組合編『都市交四〇年史』

大分「県評センター」編『警鐘 大分県労評運動四五五年史』

国鉄労働組合編『国鉄労働組合五〇年史』

宮城県教職員組合編『宮城県教職員組合運動史』第一巻・第二巻

日本高等学校教職員組合編『日高教運動史』

全駐留軍労働組合編『全駐留軍労働組合運動史』第五巻・

第六巻・七巻

東京都区職員労働組合編『都職労の歴史』第四巻・第五巻

青木一・大槻健他編『現代教育学事典』

環境教育事典編集委員会編『環境教育学事典』

茂木俊彦編集代表『障害児教育大事典』

山口榮一編集代表『21世紀コンピュータ教育学事典』

藤田和也・数見隆生・久保健他編集代表編『健康教育大事典』

子どものからだと心』

事典刊行委員会編『新版 社会保障・社会福祉大事典』

日本科学者会議編『環境問題資料集成』全一四巻

青木宗也・外尾健一・中山和久・初井常喜編『労働判例大系』

全二〇巻

加藤智章他編『社会保障・社会福祉判例大系』全四巻

加藤智章他編『新版 社会保障・社会福祉判例大系』全四巻

判例大系刊行委員会編『大系 環境・公害判例』全九巻

竹内常一他編『講座 高校教育改革』全五巻

朝倉新太郎他編『講座 日本の保健医療』全五巻

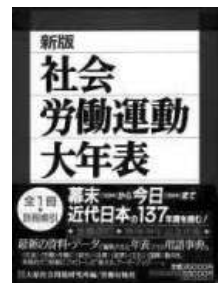
日本生活協同組合連合会医療部会編『家族みんなの健康医学百科』

一番ヶ瀬康子「一番ヶ瀬康子社会福祉著作集」全五巻

NHK福祉番組取材班編『新版 すこやかシルバー介護』全四巻

仲村優一「一番ヶ瀬康子編『世界の社会福祉』全一二巻

自由法曹団編『新 ぐらしの法律相談ハンドブック』



VII 略歴・病歴



北岳山頂 1994年8月8日



北岳の肩の小屋前 伊那の友人たち

本田靖春『本田靖春集』全五巻
 塩田庄兵衛『京都にて 1974～1987』
 小出土地改良区編集『小出土地改良区とその周辺』
 上本郷学童保育所十五周年記念文集『風の子』
 近藤正己編『私立目黒高校解雇撤回の記録』
 松尾洋『松尾多賀をおくる』
 橋口胖『某月某日』
 塩田庄兵衛『二十一世紀へのバトン 塩田庄兵衛の八十年』
 日本労働弁護団五〇年史刊行委員会編『日本労働弁護団の五〇年』（全四巻）
 旬報法律事務所編『旬報法律事務所の半世紀』
 「回想の川崎忠文」刊行委員会『回想の川崎忠文』
 山田達夫『日本の食糧・日本の農業』
 全日自労建設農林一般労働組合50年史編纂委員会編『建設一般の50年』
 （石井次雄作成）





家族写真 川邊郡西南方村久志で
(全員揃う) 1953 年初夏 14 歳



家族写真 日置郡田布施村の大きな
木の下で 1948 年 1 月頃 9 歳



歩きはじめ 二歳頃
一九四〇年頃



赤ちゃんの写真 一〇〇日
目頃 一九三九年二月頃

一九三八(昭和十三)年

一〇月一日、鹿児島県川邊郡西南方村坊(現在は鹿児島県南さつま市坊津町坊)にて、教員の父佐方直と、元教員の母ミサオの長男として生まれる。なお、一九四一年に長女明子、一九四四年に次男弘一、一九四八年に三男寛行、一九五二年に次女京子が生まれ、五人弟妹となる。

一九四五年(昭和二十)年

四月、鹿児島県日置郡東市来町伊作田国民学校入学。以後、父の転勤のため小学校は、県内を転々とする。

一九五一年(昭和二十六)年

三月、川邊郡西南方村久志小学校卒業。

四月、父直が校長を務める久志中学校入学。テニス部に所属、一年生の時に、川邊郡の中学校大会に出場、小原道夫と組んでダブルスで準優勝する。

一九五四年(昭和二十九)年

三月、久志中学校を卒業。

四月、鹿児島県立甲南高等学校入学。

一九五七年(昭和三十二)年

三月、鹿児島県立甲南高等学校卒業(第八期)。

一九五八年(昭和三十三年)

四月、早稲田大学第一文学部国文学科入学。

一九五九年(昭和三十四)年

二年生のとき、公益財団法人鹿児島奨学会「同学舎」寮に入寮し、井之脇寿一、濱嶋敦俊、永山義高、森山慶四郎、皆倉宜之らと一緒にいる。退舎は六三年。自活していくため、在学中から日本子どもを守る会の「子どものしあわせ」の編集に携わる。安保闘争が激しくなり、政治活動にも参加。

一九六五年(昭和四十)年

三月、早稲田大学第一文学部国文学科卒業。鹿児島出身の参議院議員鶴園哲夫(全農林出身)の秘書をする(一年間)。その後、井之脇寿一が引き継ぐ。井之脇と赤岳へ登る。初めての山行きだったと本人はいう。渡辺良夫弁護士等とも何度か山登りをし、労働旬報社を紹介される。

一九六六年(昭和四十二年)

三月、労働旬報社に入社、編集部に所属。法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑・第三七集』から毎年担当することになる。詳細は「Ⅶ 主な仕事」参照。



中学三年、学芸会の英語劇「レ・ミゼラブル」一九五四年頃 一五歳
左から二人目本人、三人目鈴木泰弘氏 四人目三窪良子さん



高校受験用の写真 一五歳



鹿児島県立甲南高校2年9組 最後
列中央の4人並んだ生徒左端 16歳



早稲田時代 一九六〇年前
後の冬休み 母の縫ってく
れた着物を着て

一九六九年（昭和四十四）年

一〇月、末川博編集代表『基本労働六法』刊行に携わる。

一九七一年（昭和四十六）年

五月、法政大学社会学部教授中林賢二郎と倭子御夫妻の紹介と媒酌で、同自主ゼミ所属の大橋三千枝（父岩美、母花子の長女）と結婚。

一九七四年（昭和四十九）年

二月、長男・隆出生。

一九七六年（昭和五十一）年

四月、父、直亡くなる。最後の職は、鹿児島県始良郡溝辺町の教育長として鹿児島空港の誘致にも携わる。

同月、勲五等雙光旭日章受賞。

一九七九年（昭和五十四）年

十一月、松戸市中根に佐方信一名義の住居を建て、本籍を移す。

一九八一年（昭和五十六）年

『大河内一男集』第一巻から第八巻まで二年にわたり担当。この年の『日本労働年鑑・五二集』には携わっていない。松戸の上本郷学童保育所の「鳩ノ巢合宿」に飛び入り参加。この後、会社の仲間と高水三山、御前山、大岳山、棒ノ折・瑞垣山等へ登る。大学時代にはじめ

て山登りをしてから十五年ぶりの登山。家族でも高尾、城山、景信、陣馬等の山歩きをはじめ。

一九八三、四（昭和五十八、九）年頃からの家族との山登りは少し高い高水

三山、大菩薩峠、鹿児島島の韓国岳、宝剣岳等々。

一九八三〜七（昭和五十八年〜六十二年）年まで、法政大学大原社会問題研究所編『社会・労働運動大年表』全四巻の出版に携わる。

一九八八（昭和六十三）年

「体力の限界を感じ、二十二年間勤めた労働旬報社退社」と手帳にある。以後、多くの方々のご配慮で、自宅で企画・編集業務を継続。勤めていた労働旬報社、とりわけ、在籍中から関わっていた法政大学大原社会問題研究所の『日本労働年鑑』の編集に携わることが出来たこと、松尾洋先生、塩田庄兵衛先生の力添えで各著書の出版に携わることが出来たことは有難かったと書く。

【い】からは病歴も加わる】

一九八九（平成元）年

二月、「進行性狭心症」にて緊急入院、バルーン術、数度の入院退院にてリハビリ、加療。この年の後半あたりから、家族や地元の友人等とリハ



久志中学校第7期卒業クラス会
2012年10月30日 最後列
中央 本人



結婚式（1971年5月）市ヶ谷私学
会館（現アルカディア）
中林賢二郎・倭子ご夫妻の媒酌で



労働旬報社社員一同 1969年頃



早稲田時代 一九六二年
十一月頃 浅間山麓にて
井之脇寿一氏と

ピリをかねて近県のハイキングと登山を再開する。
一九九一年（平成三）年

三月、『風の子』上本郷学童保育所十五周年記念文集作成を手伝う（発行所・上本郷学童保育所）。

一九九二～三年（平成四～五）年には、だんだん高い山に挑戦し、数年かけて三〇〇メートル級の仙丈岳、赤岳、常念岳に登る。

一九九四年（平成六）年

八月 伊那の友人たちと北岳に登山する。プロッケン現象に出会う。

一九九五（平成七）年

五月 『松尾多賀をおくる』 出版に携わる。

六月 何度も看病に帰郷した末、母ミサオ亡くなる。

一九九六（平成八）年

鹿児島県立甲南高等学校三年九組の担任橋口胖先生の喜寿記念に皆で取り組んだ『某月某日』の出版に携わり、先生から高浜虚子の碑の拓本を頂く。虚子の碑は柳川に建つ。

二〇〇〇（平成十二）年 松戸馬橋地域の友人と「暮らしの相談会」を月一回開設する。

二〇〇二（平成十四）年

三月、塩田庄兵衛著『二十一世紀へのバトン』出版に携わる。

二〇〇三（平成十五）年

大原社会問題研究所の嘱託研究員となる

二〇〇四（平成十六）年

十二月、『回想の川崎忠文』刊行に携わる。

二〇一二（平成二十四）年

九月 長男隆、平山由紀子（父徳廣、母節子の長女）と結婚。

十二月、大腸がんで長患いの弟弘一を亡くす。

二〇一三（平成二十五）年

国道六号線松戸馬橋の弁天橋陸橋下の交差点付近で、人身事故が多発し、信号機を設置する案が町内会から持ち上がった。共産党の市議、県議とともに地域後援会が対応、事務局となる。信号機と横断歩道は一年で設置できた。この運動は、地域のコミュニティバスを走らせる運動に繋がって行き、子育て世代やお年寄り等の足となっていく。

二〇一六（平成二十八）年

七月、腸閉塞のような症状があり、救急で入院、ハルトマン術を行いストマー着用となる。検査の結果「下向結腸がん多発性肝転移」「ステージ4」とのこと。本人と医師との間で治療方針を進める。初めは、大腸が



松戸上本郷学童保育の父母たちと
1991年

南アルプス仙丈ヶ岳にて
一九九一年



鹿児島に帰省の折、えびの高原韓国
岳山頂 息子隆と 1984年



大原社会問題研究所の皆さんと
前列左より手島繁一先生と本人。
後列右より二村一夫、一人おいて、
五十嵐仁の各先生

ん用の抗がん剤の投与をするも目立った効果は認められず。
九月、大腸がん手術後の七十八歳の現況を文章に纏める。
十一月、久志中学時代の恩師川畑壽先生のお墓参りについての延期のお
願い書く。

二〇一七（平成二十九）年

大腸がん用の抗がん剤はどれもがんを消滅するまでには至らず、一部数
パーセント拡大もあり悩む。主治医は、保存していた本人の患部細胞を
研究のためアメリカの大学に送り、ゲノム検査をしたい旨、本人に提案
があり承諾する。九月末から体調が崩れ、十月、鹿児島から妹二人見舞
いに来た時に、自分で案内する予定表を作るが案内はできず、弟と子ど
もの力を借りる。別の抗がん剤に換え、体調を立て直し、十一月甥の
結婚式には茅ヶ崎に一泊して、参加。

二〇一八（平成三十）年

二月、アメリカからゲノム解析の結果が届き、乳がん用のある抗がん剤
が有効と分かる。日本では、「治験」での治療のため、「国立がん研
究センター東病院」を紹介される。

三月、井之脇寿一、竹下昌勝が見舞いをかねて上京し、東京の友人と合
流し、「前川のうなぎ」会食の日程表を作成、本人も参加する。

三月中旬、国立がん研究センター東病院に入院し、抗がん剤の投与が
はじまる（以後、入院と通院）。夏頃、がんがいくつかは消え小さく
なった。さらに経過をみる。

九月二十七日、本人の了解のもと、BS日本テレビの取材をがん研究
センターの中村先生と受け、「医進薬新―夢のメデア神殿―二〇一九
スペシャル」の第二回「大腸がん・胃がんゲノム医療」を収録、放映
は二〇一九年一月十三日と連絡があった。後に、DVDが届く。

十月五日、自らの傘寿の祝いのため、初台のオペラシティで「アジアン
コンサート」を聴く（指揮・大友直人）。シベリウスに感動する。

十三日、甲南高校傘寿の会へ参加する。直後、精密検査の結果、心臓の
血管の数値に問題が起き、二十日から入院、カテーテル術でステント二
本を入れる。その後、肝臓と胆管にも問題が起き、治療法の検討をする。
いわゆる副作用で体が悲鳴を上げ始めたとのこと。さまざまな検査が続
き、結果、がん研究センターの医師団としては、抗がん剤の治療を取り
やめ、緩和ケアに入らざるを得ないことを決め、主治医の中村先生より
その旨の報告を受ける。

十一月、緩和医療を受けるため、診察を国立がん研究センター東病院か
ら、当初の手術をした新松戸の病院に移し、自宅療養を中心に、適宜通



甲南高校からの友人 左より森山慶
四郎氏、竹下昌勝氏、永山義高氏、
本人 2015年、永山家



『回想の川崎忠文』刊行をして
2011年 前列左より本人、飯島信吾
氏、五十嵐仁、芹澤寿良、早川征一郎、
二村一夫の各先生



旬報社創立60周年記念会 2009年
11月 池袋スカイビル（アリス館の
皆さんとともに）



三九会ほか 京都散策 2009年

院することにする。同時に市と介護のことを相談し、訪問看護とマツ
サージをお願いする。

十五日、子ども夫婦と御岳に紅葉を見にいく計画をたて、「ままごとや」
で会食をする。家族葬を希んだ。帰りは「坂道を登れた」と手帳に記す。
十二月、玄関ポーチ、階段、トイレ、風呂場等に手摺をつけ、洗面所の
床の段差をなくす工事をする。

二〇一九（平成三十一）年

延命措置は望まず普通に生きたいと、自らいろいろなシミュレーションを
しながら生き方を研究する。毎日、家族はつとめて自然にしている。

一月十三日、BS日テレの第二回「大腸がん・胃がんとゲノム医療」を
観る。電話が数本ある。

二月七日、つくば研究学園都市にあるがん研究センターの中村先生、天
野先生に電車と車を使い自力で挨拶に行く。中村先生は「お役に立てず
申し訳ありません」。今後の治療に向けては必ず役立てていきたいと
思います」との丁寧な言葉に、「ありがとうございます」と挨拶が出
来たとはつとし、帰宅後休む。

八日、階段がきついと一階の書斎のベッドに移る。実の妹、弟と友人数
人に「ありがとう」の電話をし始める。声が震えているようだったが、

義妹の一人には「三食を美味しく食べてわが部屋に元気に病気をしてい
ます」という、ユーモアも見せる。

三月八日、二月半ば頃から黄疸が始め、先生から、体の悲鳴だと
こっそり告げられる。見舞いの人をセーブする。体調をくずす。

三月九日（土）看護師に付き添われてゆっくり入浴する。

三月十一日に入院を決める。そのとき先生に「四人部屋の窓側によるし
く」といい、「人様に迷惑がかかるようなら個室をお願いします」と伝
える。

三月十三日、外泊の許可を得て帰宅。一泊後、鹿児島から見舞いに来た
妹二人と弟と団欒、お土産のラーメンを食べて、夕方再入院。このとき、
子どもの車に乗ろうとして体がくずおれる。救急車を呼ぶ。病室では元
気を取り戻し、皆と会話し『京子ちゃん大きくなったね』という。
三月十五日朝、「普通食」を希望し、配膳されないうちにひとりで逝っ
てしまった。

（戸籍謄本、診断書、本人の手帳およびメモ、妹、友人等の
証言にもとづき作成）

（光陰矢のごとし）とよく言われますが、突然見めぐりから夫が姿を消して十ヵ月、ちよつとした会話が出来ないむなしさを感じる時、未曾有の異常気象がもたらした多くの方々の辛苦を思い、体が悲鳴をあげつとも人間らしく生きたいと精一杯頑張っていた佐方信一の末期の命と重ねて、日々を過ごしてきました。

そして、いつもは忙しい年末年始を、今年はテレビの前で過ごし、暮れのベートーベン第九楽章に始まって、ニューイヤーマラソン、ウィーンフィルのニューイヤークンサート、箱根駅伝と、例年と変わらない番組を、静かに猫と見ました。

ところで私は、この『ひたすら生きて』という佐方の追悼集をなぜ作ろうとしたのかを書かねばなりません。

生前、佐方は無宗教の家族葬を希望していましたが、実際には、皆さんからの要望もあり、本人が好んだ曲をバックに十数人に思い出を語っていただく音楽葬を選びました。葬儀が終ってしばらくすると、「自分のことを言わない佐方さんの知らない側

あとがきにかえて



葬儀場 北松戸ライフケア・開場前
2019年3月20日



大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念シンポジウム 2019年3月20日(水)



関東甲南高校八期傘寿記念同窓会 2018年10月 日本プレスセンター10階
左側屈んでマイクを持っている人：幹事・永山義高氏、左側最後列中央あたり本人

面が分かって良かった」「高校生から家を離れていた兄のことは殆んど知らずにいたので、驚いています」「録音テープはありますか」等々の声が寄せられ、準備の至らなさを反省しつつ、「追悼集」が頭を過ったのでした。ところが、「黒衣」に徹してきた佐方信一の生き方からして、『追悼集』など作ってはいけないという思いも過り、迷いました。

夏になって、旧くからの友人である井之脇寿一様、永山義高様に相談し、丁度、お線香をあげに来て下さった旬報社のOB石井次雄様、飯島信吾様にも相談しました。すると、『応援しますよ』『事務局を受けましょう』と、心温かい言葉をいただいたのです。迷いが消えました。

そこで、私は、人生のあるひと時を共にした多くの方々から、「ありのままの佐方信一像」を忌憚なく書いていただくために、執筆依頼の拙い文をしたためました。

年末には、皆さんの原稿が集まり、飯島さんが揮身を籠めて打ち出した分厚いDTP版下に、その佐方信一像を見せていただきました。

どの原稿から、驚くほど生き生きとした佐方信一が甦ってくるではありませんか。涙無くしては読めないほどの感動を受けました。

そこで今、私が、この『ひたすら生きて』に加えるとしたら、何だろうかと考えました。

「黒衣」に徹しようと佐方が、精一杯生きた証を「主な仕事」と「略歴と病歴」に残すことだと感じました。

いろいろな岐路に差し掛かったとき、一つひとつ乗り越えながら、生きることをあきらめなかったその足跡が記されるならば、何よりですが、果たして出来るだろうかとも思いました。

幸い、「主な仕事」は、石井様が作ってくださいました。私は、皆様のお力に頼りながら、「略歴と病歴」を出来るだけ事実に基づいて作成することに心がけました。その中でいくつかの遺稿・書簡を見つけました。

老老介護のような生活から、ふっと抜け、何をしていいかわからなかった私にテーマが出来ました。昔、「短歌雑誌」の編集に携わっていた時、「校正」は出来るけれど、「校閲」はむづかしいという体験を得ました。それを思い出し、われとわが身に鞭打って、いろいろな資料の整合性に心を配りました。今、写真を探し、選びつつ、そこからもエネルギーをいただこうと思っています。

この間の、孤独な時間の何と有意義だったことでしょう。

皆様のお陰で、最近、恥ずかしそうにしながらも「追悼集」を作ったことを佐方が認めてくれるような気がし始めました。

最後になりましたが、原稿をお寄せいただいた二村一夫様はじめ大原社研の皆様、原稿依頼のために奔走してくださった井之脇寿一様、永山義高様、高校や中学の同級生の皆様、旬報社や地域の皆様、そして、それを一冊にまとめるためにお力をいただいた石井次雄様、飯島信吾様、口石利昭様、さらに、木内洋育社長のご配慮で、かつて働いていた旬報社から本を出していただける光栄をも賜わり、佐方信一に代わって心よりの御礼を申し上げたいと思います。

この本は、丁度一年経ちます三月一五日には、お届けできると思います。お暇を見て目を通していただければ、有難く存じます。

いろいろほんとうにありがとうございます。

二〇二〇年一月一五日

佐方三千枝

ひたすら生きて
佐方信一 ある日ある時

二〇二〇年三月一五日発行

編 者 佐方三千枝

〒271-0053 松戸市中根449

発行者 木内洋育

発行所 旬報社

住 所 〒162-0041

新宿区早稲田鶴巻町544

中川ビル4F

電 話 03-5579-8973

印刷製本 中央精版印刷株式会社

(非売品)

